日魯漁業株式會社、太平洋漁業株式會社、太平洋合同罐詰株式會社、函館冷凍ドック株式會社、帝太共同漁業株式會社、帝太大同罐詰株式會社、日本漁業冷凍株式會社、豊國罐詰株式會社各取締役社長、函館水産興業株式會社取締役會長、株式會社佐々木商事專務取締役

緑綬褒章受賞者

勲七等功七級　平塚常次郎氏

明治十四年十一月九日生
東京市澁谷區鶯谷町二八

わが國水產漁業界の王者たる平塚常次郎氏は、東京府の人平塚常次氏の次男、大正元年分家して新たに一家を起す。

氏夙に札幌農學校に學び明治三十四年同校を卒業するや直ちにカムサツカに渡航して鮭鱒漁業實施の實情を調査し、その極めて有望にしてまた國策上重要性あるを認識し屢く朝するところありしが、同四十年ポーツマス條約により日露漁業協定成るや益重なる漁業權益の擁護を志し、同年漁業組合的の實施に先だちてカムサツカ東海岸カムサツカ河附近に渡航、露領漁業の經營に着手せり。其の後數次にそそぎし經營こそ氏が今日の大を成せる基礎にして、またわが國水產漁業發展の礎石と謂ふべし。

氏が勇斷平先して露領漁業に先鞭をつくるや氏に倣ひて就業するもの年を逐ふて增加せしも、其の多くは眼前の小利を求むるに急にして、雄大の計畫をなすなく、經營規模の拙きも資本を節減して順納的なる域に脫せず、漁獲物の處理また地種にして協調缺如として國內に販路を求め得るに過ぎず。しかも後進の露國同業者が、雄大なる計畫のもとに着々その地歩を築きつつあるを見たる氏は、今にして製品の改善と經營の革新を成すにあらずんば、日本漁業者の劣敗の日近きを悟り、熟慮の結果先づカムサツカ河漁場に罐詰工場を創立し、紅鮭罐詰を製造して英國に輸出するの壯擧を決行せり。時に明治四十三年のことなり。

更に大正二年英國における先進米國製品に壓倒されんとするを朝し、英國より自動式サニタリー罐製罐機械を輸入し、蓋製機をカムサツカ四漁場ナゼルナヤ漁場に建設せる罐詰工場に設置す、これ實に本邦罐詰業界に新機式機械を利用せし嚆矢にして、同機使用後の製品は益よ優秀となり、英國における地歩また大いに鞏固を加ふるに至れり。

同三年小樽市に本邦最大の製罐工場を有する北海製罐倉庫株式會社を設立、ついで組絲式製造業を經營して鮭鱒罐の船內製造に獨歩を揚げ、あるひはまた露國漁業者と抗爭してこれを驅逐し、翻て優良漁區の奪取維持に盡瘁し日本の富源を涵養する等、常に國につくすに熱誠をもつてし、大正九年帝國漁業株式會社を設立常務取締役に就任、更にこれを發展合品株式會社に合併し常務取締役たり。同年新たに塩鮭加工業株式會社を創立して取締役となる。昭十

褒状額子製造所社長

緑綬褒章受賞者

堀抜義太郎氏

明治二十九年生

住所　兵庫縣伊丹市伊丹二ノ六

營業所　兵庫縣伊丹市伊丹町

略歴

一介の勞働者より身を起し、今や大工場の支配者として、我邦製網界に君臨し、世界の業者を睥睨しつゝ、常に「戰後産業人として長期建設の國策に順應せんには輸出振興を以てせざるべからず」との信念の下に、國家産業に多大の貢獻を爲しつゝあるもの、是を堀抜網子製造所社長堀抜義太郎氏其の人と爲す。

氏は三重縣下の貧しき一農家に生れ、六歳にして慈母を、十一歳にして嚴父を失ふの不幸に會ふ。爲に小學校を五年にて退學し、十三歳の春大阪に出で、藥種商の丁稚となり、更にメリヤス問屋に奉公し、十九歳の時、主家の衰落に遇ひ、己むなく三度共の職を轉じ、日給七十五錢の一職工として日本網業製造所に入る。幼時孤兒となりて人生の慘苦を味ひ、少年時代を貧路の艱難に過したる氏は、一意前途の光明を夢みつゝ克己精勵、獨り默々として製網の仕事を習得し、以て他日雄飛の素地を作り、大正七年二十三歳にして鋼津フェルト會社に轉ず。當時歐洲大戰市後にして、會社の經營困難となり、勞働爭議頻發する間に處して、專心工場の復興に努力したるを認められ、僅かに二十四歳の青春を以て、事務長兼工場長の榮職に就き月給百圓を支給せられ、全責任を以て其の經營に當る。昭和二年伊丹町有力者の協力を得、八千五百圓の資金を投じ、現工場の位置に七十二坪の工場と三十二名の職工を以て、堀抜帽子製造所を創設す。爾來拮据經營、業績隆々として現在に至り、今や資本金二百萬圓、職工數千五百人、網體生産年額二萬打、同體出貨百數十萬打にして、全國體出貨の約九割を擧するの大會社となれり。洵に驚異に値する大躍進と稱すべきなり。

氏は今日の大を成すと共に、常に社員の福祉增進に意を用ひ、七百餘名を收容する寄宿舍及び食事の補給制度、青年學校、各種の社會奉仕、團體訓練、體育振興の施設を行ふ等、利益の外眼中何物も無き事業家を愧死せしむるものあり。

最近昭和九年三月、長くも高松宮紀殿下の御成を器し、また三重縣名貴郡矢持尋常高等小學校改築費一萬一千四百五十圓を寄附し、同十四年十一月十四日勅定の緑綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

なる。翌十年前記二會社日魯漁業株式會社に合併さるゝや常務取締役に就任、同十一年堤合名會社を創立して取締役と任社員となり、同十五年冷凍冷藏業に着手す。昭和四年日魯漁業專務に、同九年同社取締役副社長に、同十年同社長に累進、同十三年北千島水産株式會社取締役たり。

氏が斯くの如く終始一貫一業に專念し、露領漁區の開發に、罐詰事業の伸展に外大の努力を拂ひたるのみならず、冷凍事業の改善に盡瘁し、自蘇漁業條約實施に當身を以て彼が條約無視を糾彈し、邦人漁業權益を確保するため斯業の大合同を提唱して、其の目的を達成し、更にまた露領漁業の大合同と密接なる關聯にあり、北千島鮭鱒流網漁業の合同を斡旋して相剋摩擦を解消せしめ、常々たる本邦漁業陣營を整備して、君臨點晴の偉業を完遂ころと謂ふも敢て過言にあらず。

氏はこの間斯業の發展伸張を期して外遊すること前後四回に及び、關係諸會社諸團體の要職に就きて業界の進展に資したること枚擧に遑あらず、假令現に頭書諸會社の樞機に參畫してこれを主宰するにとどまらず、水產化學工業、函館製綱船具、北海道製罐、函館船渠、大北漁業、函館定置倉庫各社重役たる外、鐵道運賃審議委員、日本罐詰協會々長、日本鮭鱒罐詰共同販賣會、北千島紅鮭鱒罐詰共榮會各代表者、帝國水產會特別議員、露領水產組合評議員、日本輸出冷凍水產組合常議員、東京市水產會特別議員たり。

昭和九年日本產業協會總裁伏見宮殿下より、同十年大日本水產業總裁伏見宮殿下より、それぞれ水產業功勞者として表彰され、同十一年十月陸軍特別大演習に際し札幌市において　長くも天皇陛下に單獨拜謁を仰付けらるの光榮に浴せしが、更に同十三年北洋漁業功勞者として勅定の緑綬褒章を賜ひ、其の功績を顯彰せらるゝの光榮に浴し、家門に榮光を加ふ。

元ホシサン醤油醸造元古正政吉商店主

紺綬褒章受賞者

故 古荘政吉氏

明治元年一月廿八日生
熊本市北千反畑町八

略歴

氏は熊本市の人古荘嘉吉氏の長男として、同市南坪井町に生る。古荘家は祖父政右衛門氏天保年間熊本県菊地郡より、南坪井村に移住して煙草栽培製造業を創業せしより、新業を家業となす。祖父開業の頃は、移住者なるに加へて、未だ習練せざる業のことゝて、隆盛を見るに至らざりしも、氏の父君嘉吉氏に至りて業運漸くにして開け、同業者間にも認められるゝの地位に達したるが、煙草製造業者として不動の業礎を築き上ぐるを得たるは、實に政吉氏の指揮精勵に因る。

氏は幼少の頃より厳父嘉吉氏のもとに家業を習得し、亡跡を襲ぎて家督を相續するや、具さに同業者の煙草製造工程並に施設の萬般を観察し、深長補短以て自家製品の品質の向上と製造能率の増進に專念し、常に研究的態度を失はざりしかば、業績益々隆實を加ふるに至りしも、恰も煙草專賣制度の施行に遭ひ、数々辛苦の結晶にして父祖傳來の家業をも遂に放擲して、他に新たなる家業を創業せざるべからざるの已むなきに至れり。

即ち氏は一時前途を悲觀し、一攫千金の投機に誘はるゝの悪夢にすら襲はれしも、一門一族の前途と家門の矜を思ふ氏の反省は、遂に自暴自棄を滅しめ、長嘆久しく永きにわたる熟慮の結果、遂に醤油並に味噌の醸造業を撰びて更生の途を拓くことゝはなりぬ。

醸造の業は全く未經驗にして、萬人嗜好を異にする食糧品の製造とて、筆舌に盡し難き辛酸を嘗ね、或時は需要者の苛酷を極く等、到底凡人の企及し得ざる努力にも拘らず、創業後爾三年は缺損續きにて、妻女より廃業を促されしこと屢々なりしも、金徳の意志のもと、素志の貫徹に邁進せんとする氏の熱意は容易に挫折せざりしのみならず、益々其の度を加へ、飽くなき研鑽は遂に実果を結び、遠近に聲價を昂むるに足る良醸醤油の醸造に成功せり。ホシサン醤油これなり。

ホシサン醤油の品質優良にして、需要範圍の廣大なるは敢て要せず、長くも献上御嘉納の光榮に浴すること一再に止まらず、氏の更生の偉業は嫉然として輝きつゝあり。

昭和二年十月熊本市教育特別基金として金壹萬圓寄附の厚に依り同三年二月八日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

太刀佩

紺綬褒章受賞者

福井繁太郎氏

慶應元年九月二十四日生
住地 京都市下京區龜ヶ井通松原上ル住吉町
自邸 同 上

略歴

京都に於ける美術的染色工業中の逸品として、古來江湖の愛用を得つゝある友禪染が、明治の中葉に至るまで、御傳統の幼稚なる手工に依りて製出せられつゝあるを歎じ、之が染色の改良向上に鋭心し、遂に其の目的を達して、新業今日の

友禪染

紺、綠綬褒章受賞者

福井繁太郎氏

慶應元年九月二十四日生
住地　京都市下京區醒ヶ井通松原上ル住吉町
自部　同　上

略歴

京都に於ける藝術的染色工業中の逸品として、古來江湖の愛用を得つゝある友禪染が、明治の中葉に至るまで、徒傳統の幼稚なる手工に依りて製出せられつゝあるを歎じ、之が染色の改良向上に苦心し、遂に其の目的を達して、斯業今日の隆盛を見るに與つて偉大なる功績あるもの、之を福井繁太郎氏と爲す。

氏は京都府松岡權次郎氏の二男として、慶應元年九月廿四日を以て生れ、後先代又藏氏の婿子となる。少年の頃より友禪業に從事し、廿一歳の時獨立斯業を開始す。爾來業務に精勵して家運の興隆を圖るとともに、斯業の研究向上に努め、恰も明治二十五年以來外國製の染料續々輸入せられ、色彩の自由が得らるゝと同時に、染模様の變化を促し、隨つて流行の變遷著しきものあり、氏は此の機運に順應すべき模範圖案の必要を唱道し、爾來圖案專門技工の養成に努め、其の數今や千戸を越ゆるに至る。明治四十年十月、京都染物同業組合評議員に擧げられ、斯業技術改善の方法として競技會を開催し、或は粗製濫造の弊を矯正すべく、組合に技師を置きて各工場を巡回指導せしめ、或は廣く友禪の實質を内外に宣傳する等、全精力を事業の發展に傾注す。同四十一年にはレース模様染付の方法を案出して、專賣特許權を得るに至る。而して該品の一度市場に現はるゝや、意外の好評を博したるを見て、之を私に濫用するものありしも、斯業發達上より見て喜ぶべしと爲し、其の使用を默認せり。又大正九年財界未曾有の不況時代襲來して、斯業は大打撃を蒙り、同業者中廢業するもの續出したる爲め、職工の失業する者尠からざるを見るや、之が救濟策として、豫ねて理想とせる銅造服實の途を開き、直に工場を擴張して彼等を從業せしめ、其の生活を安定せしめたり。之等の事は、洵に業界の美談と言ふべし。

曩に京都商工會議所議員、稅務調査委員、眞會議員に選ばれたる外、全國美術工藝博覽會審査員、京都博覽會審査員に推され、盡瘁する所大なり。

昭和三年京都市大禮奉祝事業費として金一萬圓を寄附し、同年十月廿九日勅定の紺綬褒章を賜り、更に同年十一月廿五日、實業に精勵し友禪業の發展に貢獻したる廉に依り、勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴せり。

惡感にすら襲はれしも、一門一族の前途と家門の矜を思ふ氏の反省は、遂に自營自業を戒しめ、長嘆久しく永きにわたる熟慮の結果、遂に醬油並に味噌の醸造業を撰びて更生の途を拓くこととはなりぬ。

醸造の業は全く未經驗にして、萬人嗜好を異にする食糧品の製造とて、筆舌に盡し難き辛酸を重ね、或時は需要者の罵倒を蒙り、品質の改善に心醉を絞く等、到底凡人の企及し得ざる努力にも拘らず、創業後兩三年は缺損續きにて、妻女より廢業を促されしこと屢々なりしも、金輪の意志のもと、素志の貫徹に邁進せんとする氏の熱意は容易に挫折せざりしのみならず、益々其の度を加へ、倦くなき研鑽は遂に美果を結び、遠近に聲價を昂むるに足る良種醬油の醸造に成功せり。ホシサン醬油の品質優良にして、需要範圍の廣大なるは數喝を要せず、殊くも献上御嘉納の光榮に浴すること一再に止まらず、氏の更生の偉業は燦然として輝きつゝあり。

昭和二年十月熊本市教育特別基金として金壹萬圓寄附の廉に依り同三年二月八日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

連續褒章受賞者

故 松本歡次郎氏

天保十年七月二十一日生

山陰貯蓄銀行頭取

當主 松本美行氏

明治廿四年七月七日生

松江市寺町九十九番地

略歴

松本家の家業は由來酒造業なりしが、歡次郎氏は夙に海外貿易を志し、明治四年島取藩廳の鷹を承け藩業に關せし伊平員の海外輸出を企圖し、先づ神戸、長崎等の開港地に販路を拓きたるに、豫想外の好成績を擧げ、竪いで遂に清國向け貨物品として、多額輸出に成功し、地方産業を振作せしめたる外、これまた舊松江藩の藩業の一つたりし出雲人參の品質低下を憂ひ、これが挽ひ下げを受け、品質の向上と海外輸出に專念し、人を清國に派して人參生産地につき精細に栽培法を研究せしめ、自らも亦清國に渡りて販路の開拓、海關稅の輕減に奔命する等、上海の出張所を基地として百方に活躍し、拮据經營その宜しき得たるため、出雲人參の聲價は漸次に高まり、輸出額漸增し、清國向貿易業界に堂々たる地位を占むるに至れり。

更に氏は鄕民の救濟事業に多額の私財を投ずるとともに、松江銀行、山陰貯蓄銀行を創設して、金融の圓滑を期し、地方産業の振興に寄與せしところ尠からず。松江商工會議所會頭としての功績また偉大なるものあり。明治三十七年一月十五日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。同年一月二十二日易簀。行年六十六歳。

當主美行氏は島根縣の人宇山消氏の令弟。先代舅三氏の養子として松本家に入る。先代舅三氏は歡次郎氏殘後家督を相續、亡父の遺志を繼いで父業の進展に專念する傍ら、松江商工會議所副會頭、松江銀行常務取締役、山陰貯蓄銀行頭取、出雲電氣取締役として、實業界に雄飛し、更に松江市會議長に推される等、地方自治の發展に寄與せしところ尠からず。父名と家門に榮光をもらしめたか。

美行氏は京都帝國大學經濟學部の出身にして、大正十四年鳥業を卒へるや直ちに川崎第百銀行に入りて、父祖相傳の業たる金融業の實務修得に專念せしが、昭和九年去つて山陰貯蓄銀行に入り、常務取締役を經て頭取に累進、新知識を金融業界に傾注して斯業の發展に勉め、德望また自ら備はり好評嘖々たるものあり。今や漸く圓熟の域に達し、近き將來に於ける大飛躍を期待さる。

緑綬褒章受賞者

服部守次氏

明治廿五年三月廿五日生

東京市荏川區日蔭町三ノ六七三

略歴

人その志を立て業を擇ぶにあたりて、鄕黨の先輩、同族または知己朋友の例に倣ふこと尠からざるは世の常なり。指導され刺戟され發奮を促さるるの先輩、同族、知己、朋友を有

ベルト製造業

紺綬褒章受賞者

服部守次氏

明治廿五年二月廿五日生
東京市荏川區日蔭里三ノ六七三

略歴

人その志を立て業を興ぶにあたりて、寵富の先聖、同族または知己朋友の例に倣ふこと勿からざるは世の常なり。指導され刺戟され發奮を促さるるの先輩、同族、知己、朋友を有するものこそ幸ひなり。

しかりと雖も如何によき刺戟と指導者を有するも、自ら懶惰にして奮起するの熱情なからんには、遂に好刺戟も何らの結實を齎らし得るものにあらず。よき指導者も徒らに勞して功を奏するを得ず。要はその人物如何によつて人生の運命は決定せらるるものと謂ふべし。

資性秀で環境に惠まるる者にして、奮起の熱情を伴ふ者は必ず功を成すものなり。わが服部守次氏の如きも、同族の勇躍に刺戟されて發奮、遂に今日の大を成せる人物にして、その奮闘の經路は方に一篇の立志傳を生むに足れり。

氏は東京においてベルト製造業を以て盛名ある服部時吉氏とその故郷を等しくし、氏が同業を撰ぶに至りしは、時吉氏に影響されしところ尠からざりしものあり。

氏は服部傳右衛門氏の次男、明治二十五年三月長野縣下水内郡飯山町に生る。夙に東都を志して期するところあり、稍稍長じて上京、ベルト製造業に從事して專ら斯業を習得、漸く獨立の基礎を成すや日暮里に自營の工場を創立して斯業界に進出し、今や服部時吉氏とともに東都ベルト業界における重鎭たり。氏の今日あるは、進取積極の精神に富む氏の資性が然らしめたるは論を俟たざるも、また百折不撓、幾多の辛酸を經たる精勵の賜たり。

氏はまた社會公共に奉ずるの念厚く、昭和十年秩父三峯神社へ五百圓、同十五年、日暮山町記元二千六百年記念事業費として五百圓を寄附せし外、奇特の行爲枚擧に遑あらず。茲に日本赤十字社特別會員章を授けられしが、昭和十五年七月飯山驛常高等學校敷地擴張費、ブール新設費並にピアノ購入費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同年十二月十二月勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

頭としての功績また偉大なるものあり。明治三十七年一月十五日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。同年一月二十二日易簀。行年六十六歳。

當主美行氏は島根縣の人宇山浦氏の令弟。先代贐三氏の養子として松本家に入る。先代贐三氏は數次郎氏歿後家督を相續、亡父の遺志を繼いで父業の進展に專念する傍ら、松江商工會議所副會頭、松江銀行常務取締役、山陰貯蓄銀行頭取、出雲電氣取締役として、實業界に雄飛し、更に松江市會議長に推される等、地方自治の發展に寄與せしところ尠からず。

美行氏は京都帝國大學經濟學部の出身にして、大正十四年卒業を卒へるや直ちに川崎第百銀行に入りて、父祖相傳の業たる金融業の實務修得に專念せしが、昭和九年歩つて山陰貯蓄銀行に入り、常務取締役を經て頭取に累進、新知識を金融業界に傾注して斯業の發展に勉め、德望また自ら備はり好評嘖々たるものあり。今や漸く圓熟の域に達し、近き將來に於ける大業績を期待さる。

農業、山林業

藤原宗兵衛氏

慶應三年一月四日生
兵庫縣神崎郡越知谷村越岩八十七番屋敷

略歷

祖先以來農業を營む傍ら、山林業を經營して巨富を積み、地方の豪族を以て聞え、爾來連綿として今日に至り、其の家彌々榮えて、屢常國家奉公の念を忘れず。公共公同に盡しつつある藤原家は、今を距る百數十年前、四代前の宗兵衛氏より兵庫縣神崎郡越知谷村越岩に住す。宗兵衛氏は本家藤原市兵衛氏次男にして、當家の始祖なり。本家東側の地に宅を構へ、村民此の居を稱して上之段と云ふ。農事商業に丹誠して家其だ榮え、二男二女あり。嘉永七年八月十日、行年八十三歳を以て卒す。妻みかは、作頃村荒川長右衛門氏の女なり。二代目を庄助氏と云ひ、後宗兵衛を襲名す。爾來當家の統を續ぐものは、宗兵衛の稱を以てす。庄屋を勤め、又家業に盡して家運益々揚る。其の取扱ふ所の林業に於て、越知杉板の名を江湖に馳せ明治六年八月十日卒す。妻たき氏は岡村藤本小左衛門氏の女にして、七男二女あり。三代を元藏氏と稱し後又先代の名を嗣ぐ。林業に力を注ぎ、其の製出に係る川元印の枚數も名あり。山林家として名聲縣下に鳴り、産を積むこと益々大なり。明治維新當時、保長村務戸長等の諸役を勤む。同村藤本作兵衛氏の女を娶り、二女を擧ぐ。明治廿六年八月廿九日五十八歳を以て卒す。四代を產藏氏と稱す即ち當代宗兵衛氏是なり。氏は慶應三年一月四日を以て分家藤原利氏助の長男に生れ先代の婿子となり、其の長女眞子氏に配せられ、先代逝去の後を承けて、其の家督を相續す。資性溫厚篤實にして、能く家業に勵み、青年の頃越知谷村牧入役を勤めて令名あり。爾來村會議員に推さるゝこと數次、其の間地方自治の爲に貢獻する所大なり。現時農業の傍ら林業を經營し、今や山林七百町歩を有し、杉檜良材と雜木を產す。

公共の念に富み、大正十三年神崎郡越知谷村農道改修費として、金三萬二千三百七圓餘を寄附したる廉に依り、昭和四年三月二十三日勅定の緑綬褒章下賜の光榮に浴したる外、明治二十七年平安遷都一千百年式典に私財を醵出し、近衛篤麿公より白銅牌を贈られ、又居村の里道改修、越知谷小學校建築等に多額の費を寄附す。最に熊野神社氏子惣代を勤め、現に寶壽寺門徒惣代、日本赤十字社有功社員として盡瘁しつゝあり。

緑綬褒章受賞者

寺西福吉氏

明治三年十二月十四日生
住所　兵庫縣伊丹市鍛町

略歷

金澤名產の由多加紙の製法に改良を加へて以來、苦心研鑽幾多の發明を成就し、國内の產業振興に寄與すると共に、輸入を防遏し、以て產業報國に多大の貢獻を致せるもの、之を寺西福吉氏と爲す。

氏は石川縣金澤市上中島町の人、政穗氏の二男として、明治三年十二月十四日を以て生る。夙に長兄の發明に係る由多

緑綬褒章受賞者

東洋リノリューム株式會社專務取締役

緑綬褒章受賞者

寺西福吉氏

明治三年十二月十四日生
住所　兵庫縣伊丹市昌町

略歴

金澤名産の由多加織の製法に改良を加へて以來、苦心研鑽幾多の發明を成就し、國内の産業振興に寄與すると共に、輸入を防遏し、以て産業報國に多大の貢獻を致せるもの、之を寺西翁吉氏と爲す。

氏は石川縣金澤市上中島町の人、政纘氏の二男として、明治三年十二月十四日を以て生る。夙に長兄の發明に係る由多加織の業を援け、同二十八年長兄の逝去後、其の業を繼承して拮据經營、專ら廣物利用を本旨として新國産品を製出し、之が海外輸出の途を拓くべく、刻苦研鑽遂に獨創の發案を以て、專賣特許實用新案を得るもの、實に百有二十餘件の多數に上り、就中蚕絲織、黄金織の如き、最も主要なる輸出品たるに至れり。即ち蚕絲織は絹糸の纖維を加工し、之に綿糸を混織して實用的の數物となしたるものにして、遠く南北亞米利加其の他諸國に輸出し、又黄金織は廣物の燦爛古綿布等を漂白し、種々なる模様を絞染したる數物にして、之亦前記蚕絲織と共に、海外に輸出せられ、我國産品中の大なる誇りとなす所たり。氏の博大にして縝密なる研究心は、實に前記百二十有餘種の發明を以て足れりとせず、大正五年遂にリノリュームの製法を發明し、專賣特許權を得て廣く社會の需要に應ず。後米國に渡りて、其の製法の權利を極め、歸國後更にて、廣く海外に輸出せられつゝあり。

されば、昭和三年十一月十七日、夙に家兄を授けて由多加織を完成し、爾來苦心研鑽、特許實用新案等百二十餘件に達す。又優良なるリノリュームを製造して輸入品を防遏する等斯業の振興に寄與せる効績尠からず。洵に實業に精勵し業民の模範たる者として、勅定の緑綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらる。又多年國利を本旨として實業に從事しつゝ重要輸出品を發明し、以て國産の聲價を宣揚したる功に依り、大正九年並に昭和三年の二回に亘り、帝國發明協會より表彰せられ、引續き同協會の評議員に推さる。現時東洋リノリューム株式會社專務取締役として、業界に重きを爲せり。

日蓮宗に歸依し、夫人梢（明治十六年十一月生）との間に三男四女あり、清瀧洵に養むべき一門たり。

む。同村藤本作兵衛氏の女を娶り、二女を擧ぐ。明治廿六年八月廿九日五十八歳を以て卒す。四代を孫藏氏と稱す即ち當代宗兵衛氏是なり。氏は慶應三年一月四日を以て分家藤原利助の長男に生れ先代の養子となり、其の長女眞子氏に配せられ、先代逝去の後を承けて、其の家督を相續す。資性溫厚篤實にして、能く家業に勵み、青年の頃越知谷村牧入役を勤めて令名あり。爾來村會議員に推さるゝこと數次、其の間地方自治の爲に貢獻する所大なり。現時農業の傍ら林業を經營し、今や山林七百町歩を有し、杉檜良材と雜木を産す。

公共の念に富み、大正十三年神崎郡越知谷村縣道改修費として、金三萬二千三百七圓餘を寄附したる廉に依り、昭和四年三月二十三日勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴したる外、明治二十七年平安遷都一千百年式典に私財を醵出し、近衞篤麿公より白銅牌を贈られ、又居村の里道改修、越知谷小學校建築等に多額の費を寄附す。茲に熊野神社氏子惣代を勤め、現に寶壽寺門徒惣代、日本赤十字社有功社員として盡瘁しつゝあり。

緑綬褒章受賞者

勲三等　**林　蝶子女史**

明治六年一月十七日生
大阪市西區立賣北通六丁目一二番地

略歴

大阪市西區本田三番町故寺西龜次郎氏の長女として生れ、明治二十三年六月林家に嫁す。同家は明治二十二年一月以來運送業を營みしが、明治三十六年五月海運業に轉じたるものにして、大正七年七月、夫竹三郎氏逝去するや、當時僅かに五歳なりし幼兒に家督を相續せしめ、自ら親權者となりて、其の名「チフ」を「蝶子」と改め、專ら運業を繼承して精勵よく努め、大いに事業の隆昌を圖り以て今日あるに至れり。

夫人は常に信仰に厚く、屢々私財を投じて神社佛閣の改修を計り、又よく公共のためにつくし、大正七年八月、大阪市救濟事業資金として金壹萬圓を寄附せし廉により、大正九年十一月勅定の紺綬褒章を下賜せられ、同八年八月大阪市へ市立產院（市内に二ケ所）建設資金として金四萬圓、大阪養老院建設費として金壹萬圓、奈良縣關照寺維持費として金五千圓、法華寺維持費として金貳萬五千圓、同年十月文部省へ教育資金として金壹百萬圓、獻納せし廉により、同十三年五月明治勳章の勳三等に叙せられ、瑞寶章を下賜せらる。

ノ昭和四年六月四日　堂上陛下大阪市へ行幸の砌り、長くも大阪府廳に於て單獨拜謁の光榮に浴せり。

緑綬褒章受賞者

河崎助太郎氏

明治六年一月十日生
大阪市東區備後町四ノ四四

略歴

氏は岐阜縣岐阜市吉先町に生れ、父は吉久夫といひ醫業の傍ら、藩政の廢止されて、明治の新政成るや、夙に實業界が將來に望はんを嘱望し、當に助太郎氏に對し其の道を誤らせりといふ。故に氏は學ぶに及んで當時開港場として、將く發展を期あつゝありし神戸に出で、神戸支廳使に奉職支廳を經ること數年、實業及び諸外國の情勢を觀察し、當々實業界に投じて國を擧はんと志せり。氏は當時四歳の女

紺綬褒章受賞者

河崎助太郎氏

明治六年一月十三日生
大阪市東區備後町四ノ四四

略歴

氏は岐阜縣岐阜市富茂登笹屋町に生れ、父は喜久夫といひ岐阜の藩士なり。幕政の廢止されて、明治の新政成るや、夙に實業界が將來に擧はん事を建議し、嘗に勘太郎氏に對し其の意を洩らせりといふ。故に氏は長ずるに及んで當時開港場として、殷く發展を極めつゝありし神戸に出で、神戸英學校に學び英語を修むる傍ら、貿易及び諸外國の情勢を觀察し、益々實業界に投じて覇を爭はんと志せり。氏は當時西歐の文物續りに渡來し、官著の制服先づ洋風に則り、國民の風俗も漸く洋風化せんとする趨勢を看取し、毛織物の需要將來益々增加すべきを察して、早くも毛織物及び綿織物の販賣を開始し、更に其の原料たる毛絲及び洋毛を輸入する傍ら、洋毛紡績の工場を興し、最新の機械を購入し、且技術及び工場設備の研究を重ねしむべく、技師を歐米に派遣し、或は自ら諸外國の商業實況を觀察し、其の結果を實地に採用して着々功を收め、遂に今日の如く實業界に覇を唱ふるに至れり。今日モスリン紡績其の他羅紗糸セル類の產額大いに增加し、輸入を防止するに至りしは氏の功績實つて大なるものあり。

大正四年人の勸めに從つて、衆議院議員の立候補をなし、大阪市民多數の輿望を擔つて高票を得て美事に當選せり。爾來代議士たる事四回、常に國事のために奔走し、殊に大阪市民の利益を擁護して諸種の事業を促進するに努め、また建策する所尠からず。抑も實業家出身の代議士は往々政權を利用して私腹を肥さんとし、國家の大綱を忘れて利權に赴趨する者多く、その醜狀見るに堪へざるものあり。然るに氏は全くこれ等の弊と其の選を異にし、眞に邦家を思ひて政道の公正を計らんとし、何等の當にも與せず、不偏不黨、獨自の政見を披瀝して純正中立を守れり。後實業同志會武藤山治氏と倡々政見の一致を見、その人格に共鳴するところあり、遂に同會に席を置くに至れり。

氏は幾多の事業を經營するも、徒らに私利私慾に耽る事を喜ぶものにあらず、常に勞資協調の主義に立脚して、事業即民を潤ほすものなりとの意見を持す。

大正十年十月岐阜高等農事校に金二萬五千圓を寄附して、同場子弟の奬學に資し、その功によつて大正十五年二月、紺綬褒章を下賜さる。その他公共事業及び神社佛閣に寄附せしこと枚擧に遑なく、總額實に十萬圓を越ゆるといふ。

十一月勅定の紺綬褒章を下賜せられ、同八年八月大阪市へ市立產院（市内に二ケ所）建設資金として金四萬圓、大阪養老園、法華寺維持費として金貳萬五千圓、同年十月文部省へ軟育資金として金壹百萬圓、献納せし廉により、同十三年五月明治勳章の勳二等に叙せられ、瑞寶章を下賜せらる。

昭和四年六月四日　聖上陛下大阪市へ行幸の砌り、長くも大阪府廳舍に於て單獨拜謁の光榮に浴せり。

日本型ベルト製造工場出

精銳表彰受賞者

服部祐吉氏

明治十三年十一月廿三日生
東京市京橋區入船町一ノ五

略歴

氏は長野縣の出身、明治十三年十一月長野縣下水内郡飯山町に生る。氏が風々の聲をあげし當時は、明治維新のあとを受け、國民たりし動搖も漸く治まり、諸政萬々その緒につき意氣旺んなる新日本は旭日昇天の勢をもつて、日進月歩の進歩に、施々しき青年をなしたる、國實の意味における意明期なりき。

由來、長野縣の地は、戰國時代より先哲、賢人輩出し、本新的意氣旺盛なりしが、明治維新後にありても、他府縣に比して全國なる進歩をとげたり。特に思想方面に大いに見るべきものあり、諸藩出の偉人また數んなりしが、國民擧げて維新大政の眞意義を理解し、獨立自尊の精神を旺盛ならしめて、それぞれ家業に精勵し、家を富ましむることは、國家を富ましむるの所以なる通念のもとに、勤儉力行を實踐し、今日長野縣が最發展として、全國に冠絶するに至るの基礎を築けり。

國民を擧げて斯くの如く眞摯なる態度をとらしめしは、鄕黨先輩の遺德が然らしめたるものにして、後進のうち鄕關を出でて他鄕に名を成さんとするものの總ては、先哲の訓へに從つて奮起したるに外ならず。

氏初等教育の課程を終るや、優秀たる新鋭の氣漲る故山にありて、父業を扶けて盡るところなかりしが、遂所として超る理想與業の大波を見ては、これを傍觀するに忍びず、出でて他鄕に業を立て名を成さんことを志し、明治四十年二十七歳にして東京に上り、ベルト製造業者に就き、新業を習得すること十歳年、勤勞により得たる資財に加ふるに、技術的自信を得るに及んで、大正十二年自ら日進屋にベルト工場を建設してこれが經營に當るに至れり。關東拍掘前後、克くその困苦を厭らず、南次震災をもたらして今日の大を成す。洵に氏の如きは志立ち偉中の逸材たるを失はず。

昭和十五年四月故里飯山等高等小學校敷地擴張費並にプール新設費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十六年二月五日勅定の褒賞を賜ふの光榮に浴す。

大阪商工會議所會頭、島田德太郎氏の
後任子爵、一代にして百萬の富を築きたる島田德太郎氏の
實業界の功勞を讃えしめ、後繼子爵にと
實力力等を讃えしめ、實に實業を起したしめ、後繼子爵にと

島田德太郎氏

明治二十年十二月十八日生

住所　大阪市西區立賣堀南通六丁目六番地

島田德太郎氏

明治二十年十二月十八日生

住所　大阪市西區立賣堀南通六丁目九番地

大阪商工會議所議員、島川商會、帝國製鋼各株式會社々長、光洋製鋼、光洋鋼板、東亞製鋼、貴歌作所、第內燃機各株式會社取締役、尼崎製鐵、九榮鐵工各株式會社監査役、レール工業組合

實業家學歷及經歷者

島田德太郎氏

明治二十年十二月十八日生

住所　大阪市西區立賣堀南通六丁目九番地

大阪商工會議所議員、島川商會、帝國製鋼各株式會社々長、光洋製鋼、光洋鋼板、東亞製鋼、貴歌作所、第內燃機各株式會社取締役、尼崎製鐵、九榮鐵工各株式會社監査役、レール工業組合

略歷

徒手空拳、一代にして巨萬の富を築きたる島田德太郎氏の實業界に於ける努力の跡を顧れば、實に愼夫を起たしめ、後進子弟にとりては好個の教訓資料たるものあり、氏の動き洵に立志傳中の一異彩と稱すべし。

氏は三重縣度會郡勝倉村字東宮島田音吉氏の次男として、明治二十年十二月十八日を以て生る。才氣凡を拔き、覇氣に富める氏は、長ずるに從ひ、此の寒村僻地に碌々たるを欲せず、明治四十一年七月遂に志を出奔して大阪に來り、西區立賣堀の繰綿に雇はれ、具さに辛酸を嘗めつゝ、忠勤を勵むこと六年、其の間略ぼ幾昇の貴重に過ぎるに至るや、大正二年值かに壹百圓の資金を以て獨立、島田商會を創立し、諸執條、鐵山鉄鋼等の販賣並に仲買を營む、爾來幾多の浮沈に遭遇し來るも、之に屈せず、飽迄勇往、異常の努力を以て事に當り、遂に其の志望ひられて、同業者間の信用頓大高まり、業勢大第に發展するに至れり。當時の苦心は到底筆舌の盡く盡す所に非ず。爲くして業界に敏腕たる地位を築くに至りたる氏は、其の餘裕に係る島田商會の業績を擧めて株式會社とし自ら社長たる外、帝國製鐵其の他各會社の重役として商工界の爲に盡し、今や關西實業界に嚆々たる令名を馳せつゝあり。

氏が一介の小店員より身を起して、今日の榮達を見るに至りたる得意や、事業ふべきものあるも、氏は功成り名遂げたる今日、尙其の低徊を忘れず、勤儉己を持し、店員に對して寬大にして、恭謙互讓の美德を身を以て示しつゝあり。然も國家事公の念頗る厚く、昭和三年三月、日本赤十字社大阪支部病院建築費として、金二萬八百圓を寄附したる處により、同年八月十八日勅定の緋綬褒章下賜の光榮に浴したる外、社會公共事業に多大の力を致し、之に投じたる私財は頗る巨額に上ると稱せらる。

禪宗に歸依し、篤志、圍碁に趣味を有す。

飯民を擧げて斯くの如く貳拜なる態度をとらしめしは、鄕黨先輩の遺德が然らしめたるものにして、後進のうち鄕關を出でて他鄕に名を成さんとするものの總ては、先哲の訓へに從つて奮起したるに外ならず。

氏初等教育の課程を終るや、優劣たる新鋭の氣漲る故山にありて、父業を扶けて怠るところなかりしが、澎湃として起る殖產興業の大波を見ては、これを傍觀するに忍びず、出でて他鄕に業を立て名を成さんことを志し、明治四十年二十七歲にして東京に上り、ベルト製造業者に說き、新業を習得すること十數年、勤勞によりて得たる資財に加ふるに、技術的自信を得るに及んで、大正十二年自ら日暮里にベルト工場を建設してこれが經營に當るに至れり。爾來拮据精勵、克くその運營を誤らず、漸次隆盛をもたらして今日の大を成す。洵に氏の如きは亦立志傳中の逸材たるを失はず。

昭和十五年四月故里飯山等高等小學校敷地擴張費並にプール新設費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十六年二月五日勅定の緋綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

關西合名會社代表社員、吳服業

緒綬褒章受賞者

西村重郎兵衛氏

明治十七年九月十七日生
滋賀縣蒲生郡市邊村字市邊

略歷

○昭和三年八月滋賀縣蒲生郡市邊尋常高等小學校講堂修設費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同年十月一日勅定の緒綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○昭和十四年五月官幣大社近江神宮造營費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十五年十二月二日勅定の緒綬褒章飾版壹面を賜ひ、其の善行を表彰さる。

氏は滋賀縣人小島寫吉氏の三男にして、滋賀縣蒲生郡市邊村字市邊に生る。先代西村重郎兵衛氏の養子となり、先代襲養家者を相續、重郎兵衛を襲名す。

氏もまた近江商人として天下に名を成せる逸材にして、堅忍不拔の精神と剛毅自重の德實とを以て、今日の大を成したる立志傳中の異色たり。其の足跡はまさに業歷の範たるに足り、生ける教材たるを失はず。

先代重郎兵衛氏夙に吳服商を經營し、すでに業礎を築き居たりしとは雖も、實父の家業を繼ぎて克く家名を辱しめず、益々これをして隆昌ならしめ、しかも揚ぎたる偉石の業礎を確立するは容易の業にあらざるなり。

氏は家業に精勵怠りなかりしのみならず、常に鄕黨の育英事業に盡瘁し、村政自治に參與せしところ尠からず。即ちかつて區長として村治に參與し、公務に鞅掌して積劇なる業務の整理を斷行し、また學務委員となりては教育施設の整備擴充に邁進して克く學村の衆望を繼承せしめ、更に敎化事業の仲間に關しても其の功績顯著なるものあり、地方に於ける德望の士として最仰の的たるのみならず、非常時局下にあつては銃後諸團體の強化力として、指導者的使命を積當せしめらるゝに至れるは當然のことにして、氏もまたこれを甘受して率先範圖の至誠を披瀝して、銃後國民の責務遂行の範を垂れつつあり。

氏は鄕黨に敬愛せられ、鄕黨に於ける地位極めて重きのみならず、百有餘年にわたる長き傳統と、業界不動の信望のもとに不斷の精進を續けつつある關西合名會社代表社員として大阪財界に於ける地位また重し。今や職域奉公、大政翼贊の馬場願る緊切を極むる時、氏の如く多年にわたり終始一貫精進の精神を實踐躬行し來れる模範の士が、大阪財界にありて更に適切なる範を示しつつあるは、大阪市にとりて又國家にとりて多幸と謂ふべきなり。

綿糸布商兼株式會社設立發起人

緒綬褒章受賞者

和田久左衛門氏

明治廿三年十月廿八日生
住所　兵庫縣武庫郡住吉村字小阪山

略歷

人爲温厚篤實にして、宛として君子の風格を具へ、而も能く父祖の家憲を遵守し、質素己を持して範を一家に垂れ、華を去り實に就き、益々家道を繼揚せるもの、之を大阪の素封家和田久左衛門氏と爲す。

氏は京都府華族にして三井一門の長老たる三井源右衛門氏つぐ弟として、明治二十三年十月二十八日、京都市下京區新

事業に盡瘁し、村政自治に參與せしところ尠からず。即ちかつて區長として村治に參與し、公務に執掌して繁劇なる業務の餘暇を善用し、また學務委員となりては教育施設の整備擴充に邁進して克く學村の業績を遂成せしめ、更に教化事業の伸展に關しても其の功績顯著なるものあり、地方に於ける德望の士として最仰の的たるのみならず、非常時局下にあつては銃後諸機關の推進力として、指導者的使命を擔當せしめらるゝに至れるは當然のことにして、氏もまたこれを甘受して卒先報國の至誠を披瀝して、銃後國民の責務遂行の範を垂れつつあり。

氏は鄉黨に敬愛せられ、鄉里に於ける地位極めて重きのみならず、百有餘年にわたる長き傳統と、業界不動の信望のもとに不斷の闘進を續けつつある稻西合名會社代表社員として大阪財界に於ける地位また重し。今や職域奉公、大政翼賛の昂揚顧る緊切を極むる時、氏の如く多年にわたり終始一貫斯道の精神を實踐躬行し來れる模範の士が、大阪財界にありて更に適切なる範を示しつつあるは、大阪市にとりて又國家にとりて多幸と謂ふべきなり。

紺綬褒章受賞者

和田久左衛門氏

明治廿三年十月廿八日生

住所　兵庫縣武庫郡住吉村字小阪山

略歴

人爲道厚篤實にして、宛として君子の風格を具へ、而も能く父祖の家憲を遵守し、質素己を持して範を一家に垂れ、華を去り實に就き、益々家道を鞏固ならしめるもの、之を大阪の素封家和田久左衛門氏と爲す。

氏は京都府華族にして三井一門の長老たる三井源右衛門氏の令弟に當り、明治二十三年十月二十八日、京都市下京區新町通の邸に生る。同廿四年先代久左衛門氏の養子となり、大正四年家督を繼ぎ、同時に前名高隣を改め先代を襲名せり。

夙に三井銀行に入り精勵職務、他の所謂富豪の御曹子と撰を異にするものあり、大いに其の將來を囑望せられつゝありしが、後、和田家の人となるや、父祖傳來の土地家屋の管理に從ひ、嘗に家名を辱しめざるのみならず益々家産を增大ならしむ。最も鴻池信託株式會社の創立せらるゝに當り、其の取締役に擧げられて、同社の經營に參畫せり。曾て三十四銀行監査役、大正信託株式會社專務取締役たりしことあり。

抑々和田家は大阪府に於ける著名の素封家にして、且つ大地主、大家主として知られ、岡地多數貧窮家中にも、多く其の比儔を見ず。岡家最近に於ける所得稅額は、蓼莪堂の分を合せて、實に十一萬數千圓を算し、府下多額納稅者中の雄圓たり。

他面氏は社會、公共の事に對して、深き理解と誠意とを有し、從來貧困者の救濟に、天災地變に因る罹災者の救恤に、或は國防、教育其の他諸團體に獻金寄附義損せる私財實に巨萬の額に達す。爲に勅定の紺綬褒章並に同飾版下賜の光榮に浴したること實に十四回（妻母あり共）に及び、且金飾版を下賜せられるる等、殆ど他に類例を見ざる所にして、氏が如何に貧人の爲に盡しつゝあるかは、之に依りて見るも餘かなりと謂ふべきなり。

母堂ある刀自は、文久二年九月十一日、先々代鴻池善右衛門氏の長女に生れ、現男爵鴻池善右衛門氏の伯母たり。明治十二年先代久左衛門氏に嫁し、內助克く勗む。大正四年父君歿後は信仰生活に入り傍ら茶道華曲の趣味生活を樂しむ。刀自亦各種公共事業に私財を投じ、勅定の紺綬褒章並に飾版下賜の榮を擔ふこと數回に及ぶ。洵に當代婦女子の龜鑑と云ふべし。

合名會社企文堂社長、株式會社久留米ホテル專務取締役、日本兵書出版、デパート旭屋各株式會社取締役、福岡縣書籍雜誌商組合長、福岡縣國定教科書特約販賣所代表者、福岡縣中等教科書販賣協會々長、全國書籍雜誌商組合聯合會常任幹事、全國書籍雜誌商組合地方協會幹事日本中等教科書協會聯合會幹事、書籍雜誌文具卸小賣商

紺綬褒章受賞者

菊竹大藏氏

明治廿六年十月廿一日生
久留米市米屋町

略歷

夫れ書籍は人類の心の糧にして、其の實行の多寡は、一國の文明を測るの尺度なりと稱せらる。九州は我國の中心地に遠きも、古來海外交通の要衝に當り、各種の產業開け、民度頗る高くして、書籍の普及發るべからざるものあり。多年此の地に於て書籍商を營み、屢路九州一圓に亙り、地方業界の隨一として、名聲遠近に嘖々たるもの、之を久留米に本店を有する企文堂と爲す。

當家の創業は頗る古く、先々代福岡縣人菊竹儀平氏の代に始る。勝ち當事時代、文久三年の開店なり。其の長男壽市氏は明治元年五月を以て生れ、同四十年家督を相續す。當主大藏氏は其の子として、明治二十六年十月三十一日を以て、現地に呱々の聲を揚ぐ。聰明なる資性を父祖より傳へ、大正十年四月先代の歿後を承け、家督を相承して、其の遺業を繼ぐや、積極經營に任じ、努力奮闘遂に今日の盛運を致し、九州に於ける第一流の書肆として、名聲全土を壓せんとするの概あり。現時其の店舗企文堂を經營する傍ら、株式會社久留米ホテル專務取締役たるを始め、デパート旭屋、日本兵書出版各株式會社取締役として、業界に重きを爲せり。又福岡縣書籍雜誌商組合長、福岡縣國定教科書特約販賣所代表者、福岡縣中等教科書販賣協會々長に推され、更に全國書籍雜誌商組合常任幹事、全國書籍雜誌商組合地方協會、日本中等教科書協會聯合會幹事各幹事等に舉げられ、業界の爲に盡瘁しつゝあり。

公共、公利の念に厚く、昭和十二年一月久留米市圖書館建設費として、金二萬圓を寄附したる厚に依り、其の功を賞せられ、同十三年四月七日、勅定の紺綬褒章を下賜せられ、家門の榮譽を歸かせり。又昭和十五年十一月、帝國教育會より教育功勞者として表彰せらる。其の他各方面に巨財を投じ、其の事業を援けたること枚擧に遑あらず。洵に當代稀に觀る有德の士と言ふべし。

元株式會社積文商店社長

紺綬褒章受賞者

故 近藤友右衛門氏

明治七年八月生
名古屋市東區白壁町三丁目

略歷

○日本赤十字社名古屋支部資金として金壹萬圓寄附の廉に依り、大正九年十月二日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

○岐阜縣海津高等女學校建設費として金壹萬圓寄附の廉に依り、昭和二年五月十六日勅定の紺綬褒章飾版壹箇を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

元株式會社信友商店社長

紺綬褒章受賞者

故 近藤友右衞門氏

明治七年八月生

名古屋市東區白壁町三丁目

略歴

○日本赤十字社名古屋支部資金として金壹萬圓寄附の廉に依り、大正九年十月二日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

○岐阜縣海津高等女學校建設費として金壹萬圓寄附の廉に依り、昭和二年五月十六日勅定の紺綬褒章飾版壹箇を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

○關東大震災救護費として金貳萬圓寄附の廉に依り、昭和二年十一月十九日勅定の紺綬褒章飾版壹箇を賜ひ。其の善行を表彰せらる。

○名古屋市公會堂建設費として金拾萬圓を寄附せし廉に依り、昭和六年八月八日勅定の紺綬褒章飾版壹箇を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

○上海事變に際し國防充實費として金拾萬圓寄附の廉に依り、昭和十三年二月十四日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

氏は紺綬褒章受賞者として德行の譽高かりし先代近藤友右衞門氏の子息たり。先代友右衞門氏は美濃國高須町の商家に生れしが、小規模なる營業は氏の遠大なる雄圖を滿たすに足らず。嘉永六年名古屋に出でて呉服商を創めしも、後轉じて雜貨商を營み、明治維新の直後更に橫濱に進出して唐絲商を營む。情勢克く家業の隆昌を來すや、三轉して紡績業に移りしが、何れも對外貿易關係によりて擾頭せる新商業にして、氏の活眼にして初めて着目し得たるところ、これを總括すれば新時代に適應せる洋物商とも謂ふべきか。

新開港地橫濱における經驗は遂に氏をして洋物商「信友」を創設するの基礎とはなれり。即ち氏は屢々たる抱負を抱いて家鄕に歸り、資金を調達して名古屋市白壁町に新店舗を構へたり。これ實に近藤家の業礎たり。

氏の歿後家業を繼承したる二代目友右衞門氏は、慶應義塾に學び、父業をして益々隆興せしめたる逸材にして、家業に精勵して先代を補佐する傍ら、常に社會、公共の事業に私財を投じて寄與するところ尠からず、大正七年社會事業費として、金拾萬圓を寄附し、長くも三ツ組金杯を賜ふの光榮に浴し、更に揮毫の光榮を重ねしが、昭和十三年四月逝く。享年六十四。

地に嘱々の聲を揚ぐ。聰明なる資性を父祖より傳へ、大正十年四月先代の歿後を承け、家督を繼承して、其の遺業を繼ぐや、拮据經營に任じ、努力奮闘遂に今日の盛運を致し、九州に於ける第一流の書肆として、名聲全土を壓せんとするの概あり。現時其の店舗金文堂を經營する傍ら、株式會社久留米ホテル專務取締役たるを始め、デパート旭屋、日本兵書出版各株式會社取締役として、業界に重きを爲せり。又縣岡縣書籍雜誌商組合長、福岡縣調定教科書特約販賣所代表者、福岡縣教中等教科書販賣協會々長に推され、更に全國書籍業聯合會常任幹事、全國書籍雜誌商組合地方協會、日本中等教科書協會聯合會各幹事等に擧げられ、業界の爲に盡瘁しつゝあり。

公共、公利の念に厚く、昭和十二年一月久留米市圖書館建設費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、其の功を錄せられ、同十三年四月七日、勅定の紺綬褒章を下賜せられ、家門の榮譽を輝かせり。又昭和十五年十一月、帝國教育會より教育功勞者として表彰せらる。其の他各方面に私財を投じ、其の事業を賞けたること枚擧に遑あらず。洵に當代稀に觀る有德の士と言ふべし。

貿易商事株式會社々長、日本レース株式會社
重役、綿花、綿糸、綿布直輸入商

綿業貢献篤志家

原田龜太郎氏

明治十九年三月二十九日生

住所　大阪市西成區有栖町三十七番地
事務所　大阪市南區安堂寺町三丁目九番地
出張所　東京市麹町區丸ノ内中六號館

略歴

氏は大阪市南區の富豪として近隣の信望を享めたる原田源太郎氏の長男として生る。幼にして英發、源太郎氏その將來を囑望し、佛人經營の明星商業學校に入學せしめ、專ら敎育により、初等中等の敎育を修得せしむ。稍々長じたる氏、才でにして實業家たるの素質顯著にして、爾來外國貿易に關する專門的知識の吸收と實踐的經驗の集積につとめ、秘かに獨立の機を覗ひつつありしが、時を得て綿花、綿絲、綿布類の直輸入商を創業、洗練されたる氏の商才と、不斷の努力は業界稀れに見るの短時日の間に、早くも內外の信望を博し、爾ちにして今日の大を成すに至れり。創業大正十二年、洵に驚異的進展と謂ふべきなり。

阪急實業治維の風光明媚の地雲雀丘に、西方庵と稱する一佛堂あり。阿彌陀如來を本尊となす。淨土眞宗に歸依する氏が精神修養の道場として建立せしもの。寸暇を割きて參詣し心身の靜謐に專念することを怠らざる氏は、時にまた社員をも參堂せしめて、思想の善導に餘念なしといふ。氏の家業の發展の根據するところは、實にこの淸淨無垢の信仰を基礎として發する信念の實踐にありと謂ふべし。

氏はまた育英事業に盡すところ尠らず、母校明星商業學校幹事として、同校の發展に寄するところ多年に及び、その功績により佛國政府よりオフセ文化褒章を贈らるゝこと二回。同校數千の卒業者は、氏を慈父の如く景仰しつつあるも亦當然と謂ふべきなり。更にまた錢後來公會、町會、警防團等の幹部として、錢後の事公に、地方自治の發展に、滅私的努力を投じつつあり。

支那事變勃發直後、偶々同氏の私宅出征勇士の宿舍に充てられ、假泊せし一勇士が職場にて戰傷、大阪金岡陸軍病院に歸還せしを見舞ふて感ずるところあり、日本赤十字社の病院に建銳し、昭和十三年一月同社大阪支部事業資金として金壹萬圓を寄附、同年四月二十三日勅定の緋綬褒章を賜ふの光榮に浴す。假泊せし一勇士の戰傷見舞が資金寄附の動機となれるは奇緣といふべきも亦氏の面目躍如たるものあり。

元神戸取引所常務理事、朱敬賢

綿業貢献篤志家

故中村直吉氏

明治十三年八月十五日生
神戸市兵庫區小物成町

略歴

神戸全市の小學校には、校門の傍ら或は運動場の一隅に、我國近世に於ける勤勞道德の偉大なる實踐家二宮尊德先生の銅像建立しありて、登校或は退出の際、可憐なる兒童が一々之に對して體拜を爲せる敬虔なる光景を實見するなるべし。眞は米穀商を營み、神戸取引所常務理事、商會議員等を勤め

が精神修養の道場として樹立せしもの。寸暇を割きて参画し心身の鍛錬に專念することを忘らざる氏は、時にまた社員を も参堂せしめて、思想の善導に餘念なしといふ。氏の家業の盛運の根源するところは、實にこの清淨無垢の信仰を基礎として發する信念の實踐にありと謂ふべし。

氏はまた育英事業に盡すところ尠らず、母校明星商業學校幹事として、同校の發展に資すること多年に及び、その功績により佛國政府よりオフセ文化褒章を贈らるゝこと二回。同校數千の卒業者は、氏を慈父の如く景仰しつつあるも亦當然と謂ふべきなり。更にまた銃後奉公會、町會、警防團等の幹部として、銃後の奉公に、地方自治の發展に、滅私的努力を投じつつあり。

支那事變勃發後、偶々同氏の私宅出征勇士の宿舍に充てられ、假泊せし一勇士が戰地にて戰傷、大阪金國陸軍病院に歸還せしを見舞ふて歸ずるところあり、日本赤十字社の活躍に感銘し、昭和十三年一月同社大阪支部事業費金として金壹萬圓を寄附、同年四月二十三日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。假泊せし一勇士の戰傷見舞が資金寄附の動機となれるは奇緣といふべきも亦氏の面目躍如たるものあり。

中村直吉

元神戸取引所常務理事、米穀商

紺綬褒章受賞者

故 中 村 直 吉 氏

明治十三年八月十五日生
神戸市長田區小物成町

略 歷

神戸全市の小學校には、校門の傍ら或は運動場の一隅に、我國近世に於ける勤勞道德の偉大なる實踐家二宮尊德先生の銅像建立しありて、登校或は退出の際、可憐なる兒童が一々之に對して禮拜を爲せる敬虔なる光景を實見するなるべし。是は米穀商を營み、神戸取引所當務理事、議會議員等を勤めて、業界政界の兩方面に活躍しつゝありし故中村直吉氏の寄附に係るものにして、其の篤行は以て衆人の範と爲すべく、其の異色ありし存在は、亦以て大いに傳ふるに足るべし。

氏は兵庫縣人、中村德五郎氏の子として、明治十三年八月十五日、神戸市兵庫佐比江町に生れ、同二十二年家督を相續す。夙に實業に志し、米穀商高野調七商店兵庫支店及び山田喜介商店神戸支店等に勤務し、明治三十八年十月、市內戸場町に初めて米穀肥料商を開業、同四十四年、當時同市本通三丁目に株式會社神戸米穀取式所仲買人となり、大正七年神戸米穀肥料市場副部長に當選し、同年長南勝大臣より內閣米の指定商人を命ぜられ、之に盡力せし功に依り、滯貨兵庫縣知事より記念品並に感謝狀を受く。更に同年神戸證券株式會社常務取締役に擧げられ、同八年二月神戸米穀肥料市場內閣米部長となり、後辭任す。同年株式會社神戸信託圖取締役、同九年神戸取引信託株式會社監査役を勤め、同十年四月歐米に漫遊し、各國取引所並に一般商業狀態、社會事業等を視察して、同年十月歸朝す。一方同十二年九月兵庫縣會議員に當選、同十四年十二月縣參事會員、同十五年十二月縣會市部會副議長に推され、縣政の爲に貢獻する所多かりき。

夙に二宮尊德翁を敬慕し、昭和三年七月以來同五年九月までに、神戸市第中尊常小學校外全市六十九校並に神戸市神戸幼稚園へ、尊德先生の銅像各一基を寄附したる處に依り、其の功を錄せられ、昭和八年三月十六日、勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の篤行を表彰せらる。又日本道德宣揚の爲め、敎化團體聯正會を興し、更に兵庫實踐少年團長、少年團神戸地方聯盟會幹部、兵庫方面委員長、敎護委員代表、清和會理事、日伯協會理事として各方面に活躍しつゝありしが、後病を以て長逝せり。

住友元夫氏

明治四十五年一月一日生
京都市上京區北野紅梅町一〇

略歴

住友家は人も知る、東京の岩崎、三井兩家と相並びて、我國三大富豪の一に居り、德川時代より浪華親指の豪封家として、其の名夙に全國に著聞し、近世に至りては益々其の大を加へ、今や同家の事業は、商工業は素より金融業其の他實業のあらゆる部門に進出し、國家産業の上に偉大なる足跡を印しつゝあり。故に小傳を與へんとする住友元夫氏は、即ち此の大家に其の生を享け、玉巷裏面の環境裏に人と成りたるに似ず、顧る篤實にして、常に其の專門とする學理の研究に沒頭精進し、些かも顯榮の念無く、其の美徳と學識は、實に所謂身實司と稱せらるゝ點と其の儘を具にするものあり。以て青年子弟の範と爲すに餘りありと言ふべし。

氏は男爵住友吉左衛門氏の四男として、明治四十五年一月一日、大阪市東區鎌谷東之町の邸に呱々の聲を擧げ、幼にして慧敏聰明、學序を經て京都帝國大學理學部に入學し、昭和十一年三月優秀なる成績を以て之を卒業す。型十二年歳末に進び、各國を遍遊して、其の專門とする理學方面の研究及び之が施設を調査すると共に、政治經濟社會各方面に亘りて觀察を遂げ、其の收穫に過し、大いに得る所あり。然くて昭和十三年七月、此の歐米文明の觀察によりて所感充實したる新抱負を携もして歸朝するや、直ちに京都市上京區北野紅梅町の邸に住居の風雅を設け、其の知識の財力と、御能の智力を傾倒して、益々學術の研究に精進努力しつゝあり。氏は之より先、其の學事研究助成の金已か能く、昭和十二年三月洋行の資金に充ち、京都帝國大學理學部學術振興會に於ける研究費として、金一萬圓を寄附したる點により、明年八月二日勅定の褒狀授與を下賜せらるゝの榮を擔へり。其の他社會公共事業の金に厚く、又敬神崇佛の志に富み、之等に對し私財を投じたること枚擧に暇へざるものあり。氏の如き富まれたる境地に在る人士が、公共事業に盡瘁することは、或は行ひ易きものあるべしとするも、資産の身を以て故に潜隠し率先これ等公共事業に貢獻しつゝあるは、海に敬服に値すると共に、其の事に忠實にして、學問研究の研究を怠らざる、以て眞實と稱するに足るものありと言ふべし。

外村市郎兵衛氏

明治十七年四月二日生
住所 愛知縣海部郡七宝村大字七宝
勲等 勲六等 瑞宝章

略歴

○大正十一年十二月滋賀縣神崎郡南五個莊尋常高等小學校及び同五個莊村役場新築費として金壹萬二千五圓を寄附せし點に依り、昭和二年二月三日勅定の褒狀を授與せらる。其の善行を表彰せらる。

○昭和六年三月發行大成社大成人名辭典」第二版に收錄されてゐる

十三年七月、此の歐米文明の視察によりて所發充實したる新知識を携らして歸朝するや、爾來京都市上京區北野紅梅町の邸に偕老の風趣を樂け、其の無限の財力と、新鋭の智力を傾倒して、益々理學の研究に精進努力しつゝあり。氏は之より先、其の理學研究助成の念已み難く、昭和十二年三月洋行の首途に先ち、京都帝國大學理學部理學教室に於ける研究費として、金一萬圓を寄附したる處により、明年八月二日勅定の褒獎狀を下賜せらるゝの榮を擔へり。其の他社會公共慈善の企に厚く、又敬神崇祖の志に富み、之等に對し私財を投じたること枚擧に遑へざるものあり。氏の如き夙まれたる境地に在る人士が、公共事業に盡瘁することは、或は行ひ易きものあるべしとするも、貴重の身を以て益に率先これ等公共事業に貢獻しつゝあるは、洵に敬服に値すると共に、其の學に忠實にして、歷常其の研究を怠らざる、以て異數と稱ずるに足るものありと言ふべし。

褒獎狀授與者

外村市郎兵衛氏

明治十年四月二日生

住所　滋賀縣神崎郡南五個莊村金堂

營業所　京都市前峰鳥丸東

略歷

○大正十一年十二月滋賀縣神崎郡南五個莊等尋高等小學校及び同五個莊村役場新築費として金壹萬二千五圓を寄附せし廉に依り、昭和二年二月三日勅定の褒獎狀を賜ひ其の善行を表彰せらる。

○昭和六年三月總社大城神社へ石鳥居一基並に社殿額を寄附せし廉に依り、同九年十一月二十日勅定の褒獎狀を賜ひ其の善行を表彰せらる。

氏は滋賀縣人谷增次郎氏令孫、前名市三郎、市村家に入りて先代市郎兵衛氏の養嗣子となり、長女いと女と婚姻、大正十年家督を相續し、市郎兵衛氏を襲名す。

外村家は滋賀縣下屈指の素封家として知られ、先代市郎兵衛氏の精勵は更に家門の繁榮を加へ、家業また彌々盛昌に赴き、機物問屋市村の屋名は京阪神三都は勿論帝都にまで普通し取扱商品の聲價高く全國的に信用を獲得せり。

由來近江商人の堅實にして聰敏、しかも商才に秀で、他郷に出でて名を成す者多きは、夙夙たる事實として世人の三嘆し措かざるところなるも、先代市郎兵衛氏の如きは、實に典型的近江商人にして、家門の輝く傳統を基礎に、非凡の商才を駆驅せしめて巨萬の富を蓄積し、多額納稅者の列に加はるの榮光を獲得するなど、其の經營着實なる苦闘史は、方に衆人の範と爲すに足れり。

當主市郎兵衛氏家督を相續して、家業を繼ぐや、只管に愛父の信條を踏襲して、奇矯の商策を採るを避け、終始堅忍不拔の精神を堅持し家業の進展を期し、家郷に於ける慈善全く愛閭となり磐石の大を成すや、倫ろに京都、大阪の兩都に店舗を創設して、商業經營の擴張を企て、孜々營々その經營の任にあたり、今日の大を成すに至れり。

氏は家業に精勵する傍ら、常に自治の發展に意を用ひ、鄉村村會議員として村政に參畫し、教育の振作に、文化の向上に、保健衛生施設の擴充に、適切なる助言獎勵をなし、これが實施にあたつては、率先して私財を投ずるなど、其の功績極めて顯著なり。更に氏は敬神崇祖の念篤く、神社佛閣の修築、建立に際じては、淨財を獻じて盡瘁を助成せしこと枚擧に遑あらず。洵に理想的實業家といふべきなり。

不動産有價證券賣買商

優良表彰者

湯川公二氏

明治三十一年八月廿四日生

住地　和歌山縣海草郡龜川村且來

住所　和歌山市寺町通四ノ丁一番地

略歴

和歌山市に於て、不動産、有價證券の賣買、投資、住宅地土地建物の經營に從事し、多額納稅者の列に列すると共に、各種の公職に就き、一方公共、公同の事業に盡瘁し、特に國家の將來が青年の力に俟つことと大なるものあるを痛感し、有爲の青年を養成することを念願として、之に力を注ぎつゝある湯川公二氏の如き、洵に實化會に擧る異色ある人材と言ふべし。

氏は和歌山縣人湯川專太郎氏の二男として、明治三十一年八月二十四日、同縣海草郡龜川村且來に生る。學業を經て軍部に從事し、明治大學を卒業、昭和三年歐米に遊び各地の產業經濟等を調査して歸朝す。爾來有價證券住宅地土地建物等の經營に從事し、大いに產を成すに至れり。一方財團法人和歌山警察協會評議員、日本青年館會評議員、日本赤十字社和歌山支部參事を始め、和歌山司法保護委員會參與、日本赤十字社和歌山支部南鄕員、市國在鄕軍人和歌山縣支部後援會理事常任顧問、和歌山縣地代家貸家業者委員等の公職に就き、之に貢獻する所頗る多く、又和歌山市青年學校研究會、選擧粛正委員會、防空委員會各委員に擧げられ、更に聯合青年團副團長、修德高等女學校父兄會長、淡南教育會副會長等に推され、東奔西走、之に盡瘁しつゝあり。

公共、公同の念に厚く、大正十四年三月、和歌山縣海草郡龜川村公會堂及び尋常高等小學校講堂用地一棟を寄附し充る處に依り、其の功を賞せられ、昭和四年八月十六日、勅定の褒狀並賞狀下賜の光榮に浴せり。又同十四年五月には、伏見宮博恭王殿下御來和に於て、日本海員掖濟會有功章を御親授あらせられ、同日晩餐の御陪食を賜はる。其の他昭和十二年七月、軍人後援會和歌山縣支部へ金一萬五百圓、同十四年十二月、日本赤十字社和歌山支部へ金二萬圓を寄附したる外、明治、大正年間より現在に至るまで多年に亘り、陸海軍を始め司法、教育、產業、警察、文化其の他各種の社會公益事業、災害救濟等のため、十數萬圓の私財を寄附し、賞勳局總裁、勳章、市長等より褒賞、表彰を授與せられたること枚擧に遑あらず。

有限責任株式會社原油探鑛社長、日本ペイント
株式會社監査役、專務、常務、各種石油製品
並製油原料輸入貿易商

優良表彰者

吉原定次郎氏

明治八年十二月廿五日生

大阪市北區中ノ島三ノ七

略歴

關西に於ける製油業界中堅に新興屈指の稱ある吉原製油株式會社は、我が吉原定次郎氏の主宰經營する所に係る。氏は兵庫縣の人明治八年其の地に生る。生家は同地屈指の名家にして

く、又和歌山市青年學校研究會、選擧區正委員會、防空委員會各委員に擧げられ、更に聯合青年團副團長、修徳高等女學校父兄會長、淺酣飲育會副會長等に推され、東奔西走、之に盡瘁しつゝあり。

公共、公同の念に厚く、大正十四年三月、和歌山縣海草郡鳴川村公會堂及び尋常高等小學校講堂用建物一棟を寄附したる廉に依り、其の功を賞せられ、昭和四年八月十六日、勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴せり。又同十四年五月には、伏見宮殿下御來邸に於て、日本海員掖濟會有功章を御親授あらせられ、同日晩餐の御陪食を賜ふ。其の他昭和十二年七月、軍人援護會和歌山縣支部へ金一萬五百圓、同十四年十二月、日本赤十字社和歌山支部へ金一萬圓を寄附したる外、明治、大正年間より現在に至るまで多年に亘り、陸海軍を始め罹災者救恤等のため、十餘萬圓の私財を寄附し、實動團組織、勸業、市長等より褒賞、表彰を授與せられたること枚擧に遑あらず。

吉原製油株式會社取締役社長、日本ペイント株式會社監査役、製油、製紙、各種石鹸製造並製油原料輸入貿易業

紺綬褒章受賞者

吉原定次郎氏

明治八年十二月日生

大阪市北區中ノ島三ノ七

略歴

關西に於ける製油業界中實に斯界屈指の稱ある吉原製油株式會社は、我が吉原定次郎氏の主宰經營する所に係る。氏は兵庫縣の人明治八年其の地に生る。生家は同地屈指の名家にして且つ素封家たり。氏は普通學を修了後、將來實業に志を抱いて少壯大阪に出で傳手を求めて同地の某兩替店に入り、商業の見習に從事すること數年、明治三十年、親戚關係に在りし同市著名の油問屋吉原家に懇望せられて婿子となり、後家督を相續と同時に前名長平を改めて、定次郎を襲名せり。而して同家は先々代治助氏の時代、氏既に江戸堀精油問屋として盛名を馳せ番頭時代大阪商人として斯界に嶄る處きを爲せり。當主定次郎氏は家業を繼承以來、更に時代に適應せる營業方針を踏立し、大正八年上海に上海製油株式會社を創立し、其の社長として同社の經營に任じ、翌九年吉原堺製油所を設立し、次で吉原油脂工業所を起す等、益々業務の發展擴大を企圖し、更に昭和七年西宮市今津町東濱なる吉原製油所を增築して、之れに前記吉原堺製油所並に大阪築港所在の吉原油脂工業所を合併し、同時に資本金二百萬圓の吉原製油株式會社を創立し、其の成立と同時に氏は自ら取締役社長に就任し、爾十年一月吉原家父祖傳來の營業たる株式會社吉原定次郎商店をも併合して、資本金を四百萬圓、全額拂込濟となし、また一方脫色脫臭蒸溜等總て至善なる製油作業なるに拘らず氏は英米獨等各國に於ける製油機械の幹を蒐め、精製工場の如き獨逸製最高級機械を購入して高等製品の完成に努め、品質の改良と創造に精進する外、更に特記すべきは世界各國要都市に通信網を張り油脂及び油脂原料の世界大勢の察知に留意し、鋭意良品廉價の供給に專念しつゝあり。今や其の聲價は全國に亙り、又海外各地に雄出し、一ケ年の生產取扱高實に壹千萬圓乃至壹千五百萬圓の巨額を算し、實に斯界の王座を占むるの觀あり。氏は德望人格共に高く、昭和七年四月英國改良增殖褒勵賞金一萬圓寄附の擧により、紺綬褒章を下賜さるゝの光榮に浴せり。

安川寛

明治鉱業株式会社取締役副社長、明和鉄工所、明和火薬株式会社取締役、安川電機製作所各株式会社取締役、帝国

紺綬褒章受賞者

安川寛氏

明治三十六年一月十七日生

福岡県戸畑市中原千七十二番地

略歴

福岡県は石炭の産額に於いて、国内第一に位するのみならず、製鉄其の他各種工業隆盛を極め、其の殷賑の趨勢を観るものあり。安川家の先々代故敬一郎翁は、九州に於ける炭鉱界の巨頭として、曾に財界の長老たるのみならず、本邦實業界の重鎮と謳はれ、功を以て華族に列し男爵を贈はりたる偉傑なりき。其の三男たる先代清三郎氏亦同地事業界に活躍して、多大の功績を貽したる人材にして、苟くも北九州に於て語らんとするものは、断じて安川家一門を逸すべからざるなり。

當代寛氏は、清三郎の長男として生れ、昭和二年東京帝大機械科を卒業したる後同大學院に入りて研究に従事し、同七年東大講師に挙げらる。以て其の學識の如何に高邁なるかを想察すべし。後歸して家業に與はり、現時明治鉱業株式會社副社長たる外、関配各會社の取締役として重きを爲せり。

公共の念に厚く、戸畑市職業教育資金並に市託兒所基金として、金二萬三百圓を寄附したる廉により、昭和十二年二月廿六日勅定の紺綬褒章を、又昭和六年乃至九年事變に際し、國防義會國防資金として金三萬圓を寄附し、同十三年八月十一日重ねて同褒章を下賜せらる。

氏の一家一門は歴代公事に盡し、祖父敬一郎男は明治四十四年教育事業に貢献したる廉に依り、勲三等に叙せられ、大正九年華族に列し男爵を賜ふ。同十一年恩賜財團済生會に金五萬圓を寄附して、紺綬褒章を下賜せられ、同十三年貴族院議員に當選、昭和二年従四位に叙せられ、同九年十一月卒去す。又先代清三郎氏は厳父の気性を享け、頗る識達にして社交的手腕あり。青年の頃米國に遊び、ペンシルヴアニヤ大學に於て經濟學を專攻し、在米五年にして歸朝するや、爾来實業界に入りて活躍、先代の盛名を辱めざりし人材にして、大正十三年十二月、門司商業學校建設資金として、金一萬圓を寄附し、同十五年十月十八日勅定の紺綬褒章を、同十二年九月、關東大震災救援の爲め、金三萬五千圓並に天幕一張を寄附し、昭和二年十月廿八日、紺綬褒章に附すべき飾版一箇を下賜せられ家門の榮譽を輝かせり。洵に當代稀に覩る奇特の一家一門といふべし。

紺綬褒章受賞者

故 従六位勲三等 山口玄洞氏

文久三年十月十日生

京都市上京區河原町通寺小路上ル

梶井町四百六十一番地

略歴

身を一小徒弟より起し、篤實なる資性と高邁なる人格に加ふるに、經綸の商才を以てし、遂に關西洋反物界の重鎮となり、曾つて貴族院議員に選ばれ、又各種の社會事業に貢献し、公共公利に多大の力を盡したるもの。之を山口玄洞氏と

廿六日勅定の紺綬褒章を、又昭和六年乃至九年事變に關し、福岡縣國防資金として金三萬圓を寄附し、同十三年八月十一日重ねて同褒章を下賜せらる。

氏の一家一門は歷代公事に盡し、祖父敬一郎男は明治四十四年教育事業に貢獻したる廉に依り、勳三等に叙せられ、大正九年華族に列し男爵を賜ふ、同十一年恩賜財團濟生會に金五萬圓を寄附して、紺綬褒章を下賜せられ、同十三年貴族院議員に當選、昭和二年從四位に叙せられ、同九年十一月卒去す。又先代清三郎氏は嚴父の氣性を享け、頗る溫厚にして社交的手腕あり。青年の頃米國に遊び、ペンシルヴアニヤ大學に於て經濟學を專攻し、在米五年にして歸朝するや、直ちに實業界に入りて活躍、先代の盛名を辱めざりし人材にして、大正十三年十二月、門司商業學校建設資金として、金一萬圓を寄附し、同十五年十月十八日勅定の紺綬褒章を、同十二年九月、關東大震災救援の爲め、金三萬五千圓並に天幕一張を寄附し、昭和二年十月廿八日、紺綬褒章に附すべき飾版一箇を下賜せられ家門の榮譽を輝かせり。洵に當代望に觸る奇特の一家一門といふべし。

貴族院議員

紺綬褒章受賞者

故　從六位勳三等　**山口玄洞氏**

文久三年十月十日生
京都市上京區河原町通寺小路上ル
梶井町四百六十一番地

略歷

身を一小徒弟より起し、篤實なる資性と高邁なる人格に加ふるに、經濟の商才を以てし、遂に關西洋反物界の重鎭となり、曾つて貴族院議員に選ばれ、又各種の社會事業に貢獻し、公共公同に多大の力を致したるもの、之を山口玄洞氏と爲す。

山口家は代々備後國尾道に於て醫を業とし、先代玄洞氏は名醫手として知られ、鄕黨の間に德望頗る高き人なりき。氏は文久三年十月十日、其の長男として生れ、幼名を濟助と呼び、後玄洞を襲名す。幼時嚴父を失ひ、家政亦豐ならざりしを以て、大阪に出でて洋反物商士居善助商店に入り、小店員として努力精勵しつゝありしが、明治十四年主家沒落の悲運に會したる爲め、氏は之を機會に獨立して、東區伏見町に洋反物の小賣店を開始す。爾後苦心慘憺漸くにして繁昌の機運を迎へ、同區淡路町に移り、初めて洋反物直輸入商を營むに至る。大正元年、其の店を京都市河原町廣小路に移す。間も無く歐洲大戰に伴ふ財界の好況時代に遭遇し、氏は克く之に順應して異常の發展を遂げ、大正七年之を資本金百萬圓の株式會社とし、社長の椅子に就き益々業務の發展擴張に努む。其の間共同火災、三十四銀行、大日本紡績各株式會社等の取締役に就任す。蓋に明治三十七年九月貴族院議員に互選せられ、日露戰役の功に依り、勳四等に敍せられ、後勳三等に陞叙さる。後高齡の故を以て、一切の公職を擲ち、業務を妻子三郎氏に讓り、爾來悠々自適の日を送りつゝありしも篤く公共の念に厚く、往年自費を以て山口厚生病院を創立し、中流以下の人々に對して專ら施療に勉め、以て社會政策の先驅を爲せり。大正八年七月尾道市立實業補習學校設置並に經營基金として、金拾參萬圓を寄附し、同年十一月十一日勅定の紺綬褒章を下賜せられたる外、大正九年恩賜財團濟生會へ金三萬圓、同十一年尾道市商業學校基本財產金五萬圓、同十二年關東大震災救援金一萬圓、昭和三年京都市大禮奉祝事業費金一萬圓、同十三年財團法人刑務協會へ金一萬圓を夫々寄附し、各飾版を御受するの光榮を擔へり。

大阪市西會店主

的場仁市氏

明治二十年八月生
住所　大阪市東區中道一丁目廿番地

略歴

氏は大阪市東區瓦町に生る。實父仁市氏は高等官員として事務多忙を極めしが、氏未だ學齢に達せざる明治廿七年逝す。依つて仁市を襁褓の時より引取り、慈愛を注ぐこと實子の如くなりき。氏は、實父の恩愛を深く感じ初めて、不幸死別の悲運に遭遇せし氏は、當時幼にしてしかも解するところあり、稍々長じて大阪市に於ける有數の醫師たる上田忠兵衛店へ入店、約十年間病苦患者店舗に精勤、非凡の商才を認められしが、獨立自營の精神は潤底氏をして醫師店の一店員たるを滿足せしめず、氏を勸つて自營の發心決意を促し、爰店して大阪市天王寺區東法能町に一戸を構へ、工業用クレーの販賣を經營す。蓋く奮發努力たるクレーの販賣には、氏十年の醫師商店員としての經驗も從するところなく、業績不振を重ねしかば遂に閉店して、爲々自適の生活に入る。氏が今日の大をなしたるは、實に四五年にも及ぶ靜觀的生活の賜と謂ふべし。靜中自ら動あり、氏が專賣特許ハツキン鍍金の特許權を買收して、再び商道に經濟の絲を結きたるは、能く機を察よるに敏なる氏の活動性の然らしめたるものと謂ふべく、氏の輝しき人生行路の首途は此處に始る。大阪市西區靱中通一丁目番地に店舗を開き、ハツキン鍍金の製造販賣を開始せしが、當時世人の科學的知識幼稚にして、高價なるの故を以て其の實際的價値を認めず、資上代金を宣傳爲に支拂せんとするも尚多くの不足を見るの狀態なりしが、氏の不撓の努力は科學的製品の實質的價値を認識せしめ、科學萬能の稱辭を普及徹底せしめんとする公益的觀念は、漸次ハツキン愛鍍の眞價を昂め、今や東京ハツキン會、大阪ハツキン會を結成し、販賣網の組織化、統制化によつて普給の圓滑化を期し、大阪市東淀川區東明町に從業員七十名を擁する工場を有し、全能力を擧げて製造に專念すると雖も需要を滿たし得ざるの盛況にて、販賣額年百五十餘萬圓に上る。

昭和十四年十二月、日本赤十字社大阪支部事業費として金壹萬圓を寄附せし處に依り、同十五年六月一日紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

昭和十四年十二月陸谷部隊へ金五萬圓、同日大阪地方海軍人事部へ金五萬圓を獻金、さらに同日恩賜財團軍人援護會大阪支部へ金壹萬圓を寄附する等善行多し。

株式會社宮崎商店取締役會長、大神中央土地
株式會社々長、大阪金物同業組合組合長

紺綬褒章受賞者

宮崎彌作氏

明治八年二月二十一日生
大阪市天王寺區堂ヶ芝二町一〇九

略歴

連綿二百二十數年、父祖創業の地に家業を繼承するものは尠し。わが宮崎家の如きは享保年間の創業にして、代々家運に浮沈なく、子孫克く祖業を興隆せしむ。蓋し稀れに見るの名家たり。富屋と號し金物を商ひ、時に幕府の御用商人をつ

株式會社宮崎商店取締役會長・大神中央土地
株式會社々長・大阪金物同業組合組合長

紺綬褒章受賞者

宮崎彌作氏

明治八年二月二十一日生
大阪市天王寺區堂ヶ芝町一〇九

略歴

連綿二百二十餘年、父祖創業の地に家業を繼承するものは稀し。わが宮崎家の如きは享保年間の創業にして、代々家運に浮沈なく、子孫克く祖業を興隆せしむ。蓋し稀れに見るの名家たり。當屋と號し金物を商ひ、時に幕府の御用商人をつとむる等、唐物町當屋の名は、同業界一流の老舗として盛名ありき。彌作氏は先代彌三郎氏の二男、家督は長兄二代目彌三郎氏これを相續し、氏は明治廿八年四月分家獨立す。宮崎家は長兄彌三郎氏が始祖より數へて九代目にあたるといふ。

彌作氏大阪協立學校を卒業するや、父兄を扶けて家業に勵み怠るところなかりしが、大正六年合名會社宮崎商店を設立し長兄等一族と共に機に參與し、自らは代表取締役たり。昭和九年合名會社を株式組織に改め代表取締役となり、更に同十五年取締役會長となる。この間金物同業組合評議員、同副會長、日本陸鄕機器輸出組合理事長として業界に稗益したるところ尠からず。現に大阪金物同業組合組合長として、非常時局下に於ける職域奉公に萬全を期しつゝある外、大神中央土地、昭和透明紙廠社の重役として活躍しつゝあり。

昭和十五年三月亡次男供雄のため日本赤十字社大阪支部事業費として金壹萬貳千圓を寄附せし廉に依り、同年八月三日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

昭和十三年五月下旬皖後國民を感動せしめたる戰地報道あり、宮崎少尉の最期これなり。同月十八日山東省大黄集に於ける戰闘に於いて高勢よく六百の敵の兵を屠り、しかも從容負傷兵を收容し自らは城壁を先に乘め、敵重圍の中にありて事敗もて自盡したる同少尉の悲壯なる最期は、鬼神をも哭かしむるものありしが、實に同少尉こそ氏が次男宮崎謙二氏なり。武勳に依り中尉に進級、功五級勳六等を賜る。氏は愛息謙二氏の武勳を愛でると共に、其の遺骨に依り陸海軍をはじめ大阪市ならびに謙二氏の母校たる宮崎高等農林學校へ金萬圓を寄附し美擧を慰む。謙二氏の千古不滅の勳功と共に氏の奇特なる善行は、永へに顯彰さるるに足るべし。謙二氏烈堂の近詠に左の一首あり。

かくはかりたたへられけり勳功は
汝ひとりかは家のほまれそ

半衿地卸商

紺綬褒章受賞者

細田善兵衛氏

慶應三年八月十四日生
京都市中京區押小路上ル

略歴

京都に本據を構へ、全國樞要の地に支店を設け、廣く半衿卸商を營み、全國的に其の盛名を謳はれ、現時隱退して悠々餘生を送りつゝあるも、其の間尚ほ國家奉公の念を斷たざるもの之を細田善兵衛氏と爲す。

當家は滋賀縣蒲生郡日野町より出で、先代喜兵衛氏は慶應二年十月京都に移り、半衿卸商を營み、明治十九年東京に支店を設け手廣く事業を經營す。當代は先代の長男として、慶應三年八月十四日京都に生れ、前名を儀三郎と稱す。明治二十四年先代が善輔と改名退隱したる後を承け、家督を相續すると共に善兵衛を襲名し、父業を繼承す。之より先、稍々長ずるに及んで、京都婦人會の大家幸野楳嶺翁伯に師事し、後專ら半衿圖案の事に當る。後氏の代に至るや、拮据經營、大阪に支店を開設するに至り、明治四十三年五月實弟永輔、甥善三郎、義弟又吉の諸氏と共に、細田合名會社を組織して其の代表社員となり、半衿並に服裝用品の製造販賣を營み、販路次第に擴大して社運頓に振ひ、札幌、仙臺、高崎、金澤、名古屋、岡山、福岡等に支店出張所を設け、業勢更に一層の進展を來したるを以て、昭和二年株式會社細田商店を設立し、令弟永輔氏を社長に推し、自ら相談役として社業を督し、細田合名會社は保養事業として自身社長の職に在り。一方懇請を受けて教育會評議員、感化保護員、施藥德義會員等に擧げられ、大正九年以來柳池尋常小學校學務委員に推され、後校舍の改築竣工を俟つて昭和九年退任す。其の他、八阪神社總代、平安神宮、梨子神社、豐國社各代表、智恩院總代たりしことあり。

頗る社會公共の念に富み、昭和四年十二月、日本弘道會より、社會事業功勞者として表彰せられ、同五年四月京都市柳池尋常小學校建築費として一萬圓を寄附したる廉を以て、同七年二月六日、勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴せり。其の他昭和十一年京都府及び京都市へ社會事業費として各一萬圓を寄附したる外、赤十字社京都支部へ一千圓、日本海員掖濟會へ五百圓を寄附して各有功章を贈られ、又平安神宮へ三千圓を獻納する等、其の額數萬圓に上る。昭和十一年古稀の齡に達し、爾來退隱して、勤左衛門と改名し、其の趣味とする和歌、繪畫、美術に親み、宛として高士の風格あり。

星野喜右衛門

褒賞授與者

星野嘉右衛門氏

住所　二等　大月十九日生
福島縣若松市材木町一〇六

不言實行の美徳は萬人これを學んで實踐を期するところなるも、到底凡俗の士にしてこれを爲すを得ず。艱苦其間の苦積と、堅忍にして倦らざるの修練と、不屈不撓の精神を要すればなり。

わが星野嘉右衛門氏の如きは、數十年の久しきにわたりてこの美徳を實踐し來れる德望の士にして、地蔕氏を仰いで御父に接するに等しき感をもつてするは、また宜べなりと謂ふべきなり。

星野家は代々酒造を業となし、氏の父眞具に家業に精勵して家運を興隆せしめ、星野家の盛名は若松市はいはずもがな、福島縣下一圓にわたりて知悉されたる名門なり。

氏父眞の業を繼ぐや精勵精勵業容の擴大强化をはかるとともに、醸造清酒の品質向上を期しては醸造施設を改善整備し、專ら優良なる銘柄を以て優良なる消費を確實することに專念せしかば、幸福として稱ぎなかりし業績に、更にいちだんの光彩あらしめたり。

氏が斯くの如く父眞の業を守りて其の家名を汚さざりしのみならず、更に家業をして驚異的進展を遂げしめたるは、いはゆる不言實行の美徳を文字通り實踐勵行したる點にして、氏の德良にして篤實なる性格とともに以て學ぶべきに足るものにして、氏の今日に至る生涯と其の業績の足跡は、直ちに以て參考の道を示すものなり。

氏は家業の隆昌に赴くに伴ひて、顧みて小成に安んずることなく、積極方針を以て進むことを知らず、倦怠を得ては地方産業の開發伸張、自治の發展、教育の振興に盡瘁し、福島縣ならびに若松市の仲彈に與つて大いに力あり、特に教育の振興に關しては多大の私財を投じて、これが施設の擴充と新施設促進に寄與し、その治績見るべきものあり。

由來福島縣下における教育施設は、會山地帶の富有なる地域を除きては、概ね不完全とも謂ふべき狀態にあり從つて文化の進展に浴すること極めて薄く、文化の程度また低きに甘んぜざるを得ざりき。

其の因つて來る原因は一二にとどまらざるも最大の原因は、財政問題にあり、如何に國家が國都を擧じて教育施設の擴充をなさんとするも、國家經費には自ら限度あり、義務教育費の如きですら、多く不足を告ぐるを通例となす、況んや高級の教育施設費を國費支辨に俟でことは到底不可能なるは當然なり。しかして富有なる府縣は貧困なる府縣に比較して、財政豊かなるが故に教育施設また盛ひ、子弟その恩惠に浴することを得るも、貧困なる府縣は財政豊かならざるが故に、子弟をして數多の不自由に屈へしめざるを得ず、等しく國家の將來を擔荷する小學兒童にこの不公平あるは、誠に忍び難き事實なるも、この點を除くに一つの途あり。卽ち社會公共事業に率するの精神を涵養せしめて、私財の寄附を仰でことこれなり。

世に私利を貪りて公益を顧みざる者多けれどもまた私財を投じて國家社會に奉するもの尠しとせず。

福島縣下にありては個人の如く比較的富有なる地域は會山地帶に限られたるも、他地においても私財を投ずるの實力あるものなきにあらず、率先して社會公共に奉するの犧牲の實を示すもの尠かりしため、教育施設擴充費の如き擧財をすら提供するに躊躇するを一般の風習となすの例ありき。

わが星野嘉右衛門氏は大正十四年早くも傳統の篤志を發揮し、同年二月兒童奬學資金として、若松市へ金壹萬圓を寄附す。

氏の寄行は卽ち一石萬鉢を期すにひとしき勢をもつて關下實業家の興を興き、氏の寄行ありてのち相ついで私財を投じて公共に奉ずるの赤誠を披瀝するもの續出し、市立教育施設ならびに社會施設の整備强化を招來せりといふ。

氏のこの寄特の行爲もまた不言實行の美徳の現れにして、既往浮華口頭を以て教育施設の不備を論ずるも、實踐につきてこれが改善强化をなし得ざる徒輩をして愧然たらしめたるはまた當然といふべきなり。

氏の寄行は實に右にのみとどまらず、褒狀、表彰狀を授與され數枚擧に遑あらざるも前記兒童奬學基金寄附の點に依り、大正十四年十月十日勅定の精綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

松居元右衛門氏

となす、況んや萬般の教育施設費を國家支辨に仰ぐことは到底不可能なるは當然なり。しかして富有なる諸縣は財政豐かならざるが故に、子弟をして幾多の不自由に耐へしめざるを得ず、等しく國家の將來を維當すべき小學兒童にこの不公平あるは、誠に忍び難き事實なるも、この弊害を除くに一つの途あり。即ち社會公共事業に率ゐるの精神を振起せしめて、私財の寄附を仰ぐことこれなり。

世に私利を貪りて公益を願みざる者多けれどもまた浮財を投じて國家社會に率ゐるもの尠しとせず。福島縣下にありては叙上の如く比較的富有なる地域は鑛山地帶に限られたるも、他地においても私財を投ずるの資力あるものなきにあらず、卒先して社會公共に率ゐるの模範の實を示すもの尠かりしため、教育施設擴充費の如きですら、多く不足を告ぐるを通例となれり。

貧困なる諸縣に比較して、財政豐かなるが故に教育施設また整ひ、子弟その恩惠に浴することを得るも、貧困なる小學兒童にこの不公平あるは、誠に忍び難き事實なるも、この弊害を除くに一つの途あり。即ち社會公共事業に率ゐるの精神を振起せしめて、私財の寄附を仰ぐことこれなり。

世に私利を貪りて公益を願みざる者多けれどもまた浮財を投じて國家社會に率ゐるもの尠しとせず。福島縣下にありては叙上の如く比較的富有なる地域は鑛山地帶に限られたるも、他地においても私財を投ずるの資力あるものなきにあらず、卒先して社會公共に率ゐるの模範の實を示すもの尠かりしため、教育施設擴充費の如き浮財をすら提供するに逡巡するを一種の風習となすの例あり。

わが星野嘉右衛門氏は大正十四年早くも傳統の弊風を痛嘆し、同年二月兒童奬學資金として、若松市へ金壹萬圓を寄附す。

氏の善行は忽ち一石萬波を起すにひとしき勢をもつて縣下資産家の胸を衝き、氏の善行ありてのち相ついで私財を投じて公共に率ゐるの赤誠を披瀝するもの續出し、漸次教育施設ならびに社會施設の整備强化を招來せりといふ。

氏のこの奇特の行爲もまた不言實行の美徳の現れにして、輕佻浮薄口頭を以て教育施設の不備を論ずるも、實際につきてこれが改善强化をなし得ざる徒輩をして啞然たらしめたるはまた當然といふべきなり。

氏の善行は實に右にのみとどまらず、褒狀、表彰狀を授與されし數枚擧に遑あらざるも前記兒童奬學基金寄附の應に依り、大正十四年十月十日勅定の緋綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

緑綬褒章受賞者

松居元右衛門氏

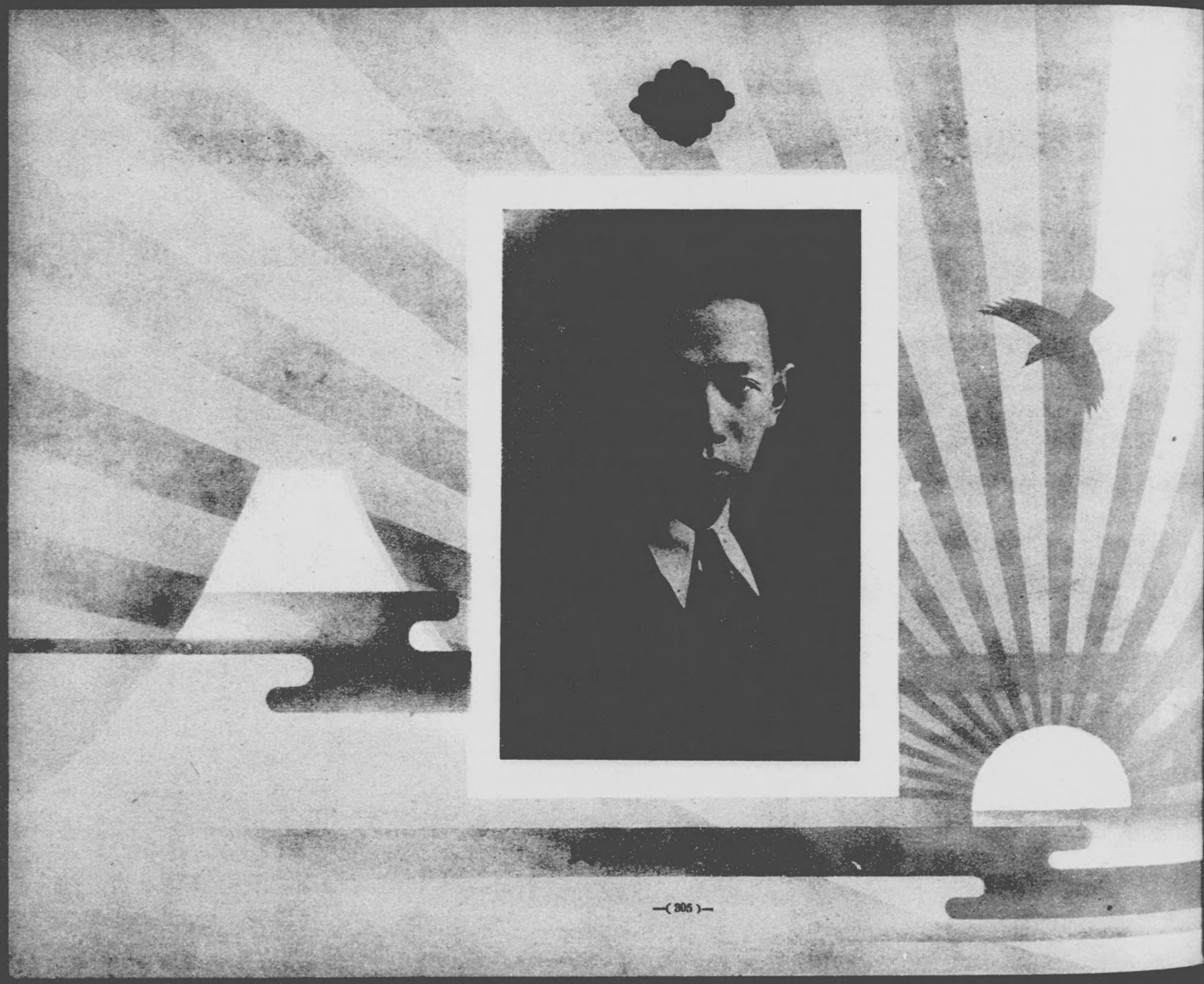
住所　京都市下京區貴町通松小路東
營業所　福岡市東中洲町二五六

明治九年二月生

我邦織物界の名品として、名聲海内に普聞せる博多織の改善向上を企圖して、專ら同業者を誘導しつゝ力めて生産費の低廉を圖り、以て販路の發展に努力したる松本元右衛門氏は、所謂士魂と商才とを發揮せる業界の逸材にる業界唯一の功勞者たり。

氏は滋賀縣の人、先代元右衛門氏の長男として、明治九年二月を以て生る。幼名を貴次郎と稱し、同二十一年六月、滋賀縣より博多に來り、先代の開始したる博多織の業務を補佐す。同二十三年四月單身京都に出で、平井金三郎氏設立のオリエンクル・ホールに入り、英語、漢學、數學の三科目を修め、同二十六年業を了へて家庭に歸來一意專心家業の改良發展に精進し、以て博多織の聲價なる販路を開拓するに努力す。當し當時の博多織は、七百有餘年の長き歴史を有するに拘らず、明治十年の西南役後、人心の浮薄に伴ひ、銀製濫造の弊に陷りたる結果、販路の信用地に墜ちたる時代にして、之を憂ひたる先代は奮然蹶起、福岡市内綱町に一工場を設け、博多織の製造を專業として之が改良向上に全力を注ぎ、明治十八年には京中洲に工場を新設し、同二十二年四中洲に分工場を設け、職力同業者を指導して、名聲の回復と販路の擴張に勉め、漸次信用挽回の曙光を見んとするに方り不幸五十三歳の壯齡を以て長逝せるものにして、氏は先代の遺業を繼承するや、其遺言を奉じて、博多織の改良に心血を濺ぎ、大に同業者を感得し、銀製濫造を戒むる所ありしも、何等其功勞きのみならず、却つて冷笑を以て迎へらるゝ有樣なりし爲、氏は益に一意を專にし、都ち一般同業者と異しく、輸入品と競爭する銀製品を觀し、之に說明を附して店頭に飾り、一方納品も同じく同樣の手段を執り、特製品と濫造品とを明瞭に區別陳列して販賣に際し、益に一層の光明を認むるに至り、專ら優良品の製造に努力す。當時織業者の多くは四十五軒の內、氏の熱意を諒かず、徒に信用を失墜して廢業の已むなきに至りたるもの十三軒に及べりと言ふ。氏は克く勞良品の製造の發達を期し得せるを喜び、京中洲の工場を增設し、續いて四中洲に特許部工場を設け、更に同市內奈良に新工場を增設すると共に、從來機業、染色、意匠等が各分業となり居たるを統一して、自家の工場に設備し又京都西陣に研究工場を設け、最多の專門技術員を要成する等、今や斯業に於ては、其規模業績共に全國第一をを有すること一頭に於ます。明治四十三年四月農商務大臣より福岡縣二百萬圓に近く、高貴の御用命大正五年十一月の御發二回に亘り、長き渡りより、特旨御差遣の光榮を得し、更に昭和三年十一月十七日、多年の光榮に浴せり。

氏は常に社員、職工の待遇改善に意を注ぎ、特に若き店員に勉學の餘暇を與へて、實業學校等に入學せしめ、又女工には、裁縫會の一部を開放して裁縫室に充て、師を聘して之を習はしめ、或は講習會を開いて、心身の修養に資せしめ、其他父兄會を催して、會社と家庭間の意思の疎通を圖り、兩者の關係を圓滑ならしむるに努め、一朝市の變あるとして、自治の爲に貢獻する所尠からず。私財を投じて廣袤の隣比せる一町內を作り、之を中洲方面と稱して開發を遂むるに至らしめたる外、或は水道に、或は電燈に、其他土地の重要問題に干與して、之に力を注ぎたること枚挙に遑あらず。氏素性高邁にして、而も報賞を失はず、常に産業報國を念として、苟も私利を先にせず。開發善導と善良を樂む、以て人格の高雅なるを推知すべし。氏が同業者の間に重きを爲せるのみならず、衆民の景仰を享けつゝあるもの茫に所以無しとせず。



用を博し、技に一道の光明を認むるに至り、專ら優良品の製出に努力す。當時機業者の重なる者四十五軒の內、氏の懇說を聽かず、遂に信用を失墜して廢業の已む無きに至りたるもの十三軒に及べりと言ふ。氏は克く精良品興隆の機運到來せるを看取し、東中洲の工場を增設し、續いて西中洲に特許部工場を設け、更に同市內春吉に新工場を增設すると共に、從來機業、絣絲、染色、意匠等が各分業となり居たるを統一して、自家の工場に設備し又京都西陣に研究工場を設け、幾多の專門技術員を養成する等、今や斯界に於ては、其規模業績共に全國第一を以て稱せらる。農に組織を更めて、株式會社と爲す。近年の調査に據れば年產額二百萬圓に近く、高貴の御用命を拜すること一再に止まらず。明治四十三年四月農商務大臣より銀盃及功勞賞を授けられ、同四十四年十一月及大正五年十一月の前後二回に亘り、長き過りより、侍從御差遣の光榮を拜し、更に昭和三年十一月十七日、多年實業に精勵し、斯業の振興に竭力せる功績尠からず、衆民の模範たる者として、勅定の綠綬褒章を下賜せらるゝの光榮に浴せり。

氏は常に社員、職工の待遇改善に意を注ぎ、特に若き店員に勉學の餘暇を與へて、實業學校等に入學せしめ、又女工には、寄宿舍の一部を開放して裁縫室に充て、師を聘して之を習はしめ、或は勝劣會を開いて、心身の修養に資せしめ、其他父兄會を催して、會社と家庭間の意思の疎通を圖り、兩者の關係を圓滑ならしむるに勞め、總てを一大家族主義の下に抱擁しつゝある等、洵に他の模範たるに足るものあり。

一面市の長老として、自治の爲に貢獻する所尠からず。私財を投じて商家の櫛比せる一町內を作り、之を中洲京極と稱して殷賑を極むるに至らしめたる外、或は水道に、或は電燈に、其他土地の重要問題に干與して、之に力を注ぎたること枚擧に遑あらず。氏資性高邁にして、而も誠實を失はず、常に產業報國を念として、苟も私利を先にせず。閑暇謠曲と書畫を樂む。以て人格の高雅なるを推知すべし。氏が同業者の間に重きを爲せるのみならず、衆民の景仰を享けつゝあるもの蓋に所以無しとせず。

緒綬褒章受賞者

藤武脩三氏

明治四十一年一月三十日生

住所　鹿兒島市山下町八五

勤務所　鹿兒島市仲町五〇

藤武脩三氏は鹿兒島の人、治元吾藏氏の次男にして、夙に英才の譽れ高く、中等教育を卒るや直ちに大分高等商業學校に學び、修學と人格の陶冶に精勵し、優秀なる成績を以て同校を卒業。昭和五年藤武吾兵衛氏の養子となる。同年養父吾兵衛氏病歿するや、亡跡を繼ぎて家督を相續す。

養父吾兵衛氏は、鹿兒島市山下町に多年にわたり質商を營とする傍ら、衆ねて吳服商を營みしが、質實にして堅實しかも商才に富み、始終顧客に親切懇篤にむかひ、特に人に接するに絶切、仁慈の襟度を備へしため、常に質舖の門前市を成すの盛況にて、舖員を同はず中途階級を問はず、大衆の信望を集めて會社を求める狀態は、常に和氣藹々たるものあり、氏の人格は其の實業方針に反映して、質舖をして眞に庶民階級の好個の金融機關たらしめ、世上屢々見受けらるる惡辣なる風情を店内にとどめず、明朗にして清新なる營業氣分の裡に、質舖の使命を達成せしめるは、衆に拔れに見るところにして近時の話柄として宣傳せられ、關係者にして氏の實業方針を學ぶもの多かりしといふ。

吳服商を營むに當りても、こゝにも本質實なる氏の性格が明確に反映し、輕佻浮薄にして華美を追ふが如き商品を避け、常に質實本位の堅實品多賣主義を守り、靜かに市民を啓蒙啓發するを期したり。商人にして新くの如く進取的にして精密なる思慮を有するものは、實に稀にして、氏が凡庸の一商人にあらざりしことを證して餘りありといふを得べし。

かくて藤武家の不關係なき實業の經營は、氏の非凡の人格と、卓拔せる商才により擧げられしが、入りて養子となり養父の業を繼ぎたる當主舊三氏も亦、養父に劣らざるの人格と商才をもつて、精勵克く營業の發展に努め、修得したる專門の新知識を傾けて、業務の改善刷新を圖り、充實の域に已に到達せる現業の隆昌に滿足の色を見せり。時代に適應せる新營業方針を示りては、眞摯なる經營を眞摯せしめたり。

青年實業家として嘱望せし修三氏は、惜しの實業界、吳服商の經營に當るとともに、擧かに國家的事業への參劃を企圖し、先づ鉱業を山林事業に伴ふべしとを決意し、衆を挽じて日豊山林株式會社の重役となり、重要役に就任せらる。

日豊山林は九州屈一の山林事業有望の地、氏が夙くより關係し、山林事業に手を染めしは、蓋し九州山林經界にとりても、今後の多事を約束されたるに等しく、氏の活躍期待の日は近きにあるべし。

氏はまた山林事業に特殊なる關心を有し、衆ねて東肥鉱材株式會社の監査役たりわが國に於ける鉱材事業は、近年其の發展著しく整備するに至りたるものありと雖も、いまだ生産量に於て多量の外材輸入を仰がざるものすらなきにあり、加へて國際情勢の急迫は、愈々に國内鉱材の增産を要求しつつあり、鉱材擴充を目標とする產業界各部門の活躍は目覺しきものあるも、鉱材產業に於ける劃期的飛躍も亦、國家の特望し期待するところにして、氏の如き青年實業人の奮起に俟つところ極めて多く、職場事業公の實踐に卒先して當に其の衝を當れつつある氏が、時局關聯の重職を兼任するの期は方に到來せりと謂ふべし。

山林事業、鉱材事業に千萬し、九州屈指の經界に於て重要視されつつある氏は、更にまた共同會社東綿株式會社の重役たり。會社業の經營は由來困難なる事業に屬し、巨大なる資本と優秀なる經營者を必要とするを例とせり。しかも今や物資需給の圓滑化を圖るため、會社業の施設整備を急務とし、全國同業者は競ひて使命の達成に邁進しつつある時、九州の一角にありて專攻の知識と、豐富なる經驗を以て、會社業界に貢獻し、指導的役割を演じつつある氏を見るは、鉱業界の爲めにも欣快に堪へざるところなり。

氏の關係業績に一貫せる關係あるは、氏の德實なる性格の一端を現はすものといふべきか。德實を國生の方針となすの士はまた擧ねて社會公共の念に富む。氏また其の例に洩れず、昭和十四年十月鹿兒島市立區史記念館建設費として金五萬圓を寄附したる際に依り、同十五年三月一日勅定の褐綬褒章を賜ふの光榮に浴したる外、日本赤十字社、軍人援護會等に私財を投じて、關係諸事業の達成に寄與したる功積紗からず。年齒未だ多くを加へざるに、善行多き氏の如きは異例とするに足る。

故人　青沼彦治氏

故人青沼彦治氏の二男、吉郎氏は石田電機材料部に勤めて英才の譽れ高く、故父に代つて一家を創立せしも、今又不幸氏に別れて心かりしかば父の遺子となり、明治廿五年七月故者を相續、遺業たる精

への參劃を志し、先づ雄志を山林事業に伸べんことを決意し、資を投じて日薩山林株式會社の重役となり監査役に選任せらる。

日薩兩國は九州隨一の山林事業有望の地、氏が・夙眼よく將來を達觀し、山林事業に手を染めしは、蓋し九州山林業界にとりても、今後の多幸を約束されたるに等しく、氏の活躍雄飛の日は近きにあるべし。

氏はまた山林事業に密接なる關聯を有する製材事業に深き關心を有し、兼ねて末弘製材株式會社の監査役たりわが國に於ける製材事業は、近年其の規模漸く整備するに至りたるものありと雖も、いまだ生産量に於て多量の外材輸入を仰がざるのやむなきにあり、加へて國際情勢の急迫は、偏みに國内製材の增産を要求しつつあり、資材擴充を目標とする産業界各部門の活躍は目覺しきものあるも、製材業界に於ける劃期的飛躍も亦、國家の待望し期待するところにして、氏の如き青年産業人の奮起に俟つところ極めて多く、職域奉公の實踐に卒先して常に其の範を垂れつつある氏が、時局即應の飛躍を遂行し、報國の至誠を披瀝するの期は方に到來せりと謂ふべし。

山林事業、製材事業に干與し、九州同業界に將來を嘱目されつつある氏は、更にまた共同倉庫株式會社取締役たり。倉庫業の經營は由來困難なる事業に屬し、巨大なる資本と優秀なる經營者を必要とするを例とせり。しかも今や物資需給の圓滑化を圖るため、倉庫業の施設整備を急務とし、全國同業者は競ひて使命の達成に邁進しつつある時、九州の一角にありて專攻の知識と、豐富なる經驗を以て、倉庫業界に君臨し、指導的役割を演じつつある氏を見るは、業界の爲め否國家の爲めにも欣快に堪へざるところなり。

氏の關係業域に一貫せる關聯性あるは、氏の健實なる性格の一端を現はすものといふべきか。健實を處生の方針となすの士はまた徹ね社會公共の念に富む。氏また其の例に洩れず、昭和十四年十月鹿兒島市立歷史記念館建設費として金五萬圓を寄附したる廉に依り、同十五年三月一日勅定の緋綬賽章を賜ふの光榮に浴したる外、日本赤十字社、軍人援護會等に私財を投じて、關係諸事業の達成に寄與したる功績尠からず。年齒未だ多くを加へざるに、善行多き氏の如きは異例とするに足る。

宮城縣多額納稅者、酒造業

藍、緋綬賽章受賞者

故 青沼彦治氏

慶應二年十一月二日生
宮城縣志田郡荒雄村鳴沼字長瀬

略歷

氏は宮城縣人青沼米治氏の二男、宮城縣志田郡荒雄村字鳴沼に生る。夙に石巻商業學校に學びて英才の聲れ高く、後分家して一家を創立せしも、令兄升治氏に嗣子なかりしかば其の業子となり、明治卅五年七月家督を相續、家業たる清酒、醬油、味噌等の醸造に從ふ。

青沼家の祖は國史に輝く一代の武將武田信玄に仕へて甲州青沼を領し、軍功赫々たりし青沼帶刀にして、信玄、勝頼二代に仕へしが、武田家滅亡とともに奥州に亡命し、慶安二年歿す。彦治氏は實に帶刀十一世の孫たり。

彦治氏の祖考喜七氏に至り出でて伊達家に仕へ大崎九郡における伊達家の食糧倉庫を管理し、兼ねて志田郡荒雄村の大黒正を命ぜられ、その後代々その職を經承す。氏の父君米治氏伊達家の米穀輸送係となり黒正を兼ねて德望あり、其の所有にかゝる土地及び資產は莫大なるものあり、既に近隣有數の資產家なりしが、氏の令兄にして養父たる升治氏に至りて米穀商を營み、のち淸酒の醸造を創業し、更に醬油、味噌をも醸造し、廣く縣下及び近縣に販路を擴めたり。

氏家業を繼ぐや益々家運の興隆をはかり、精勵倦むところを知らざりしのみならず、常に同業の仲展に意を用ひ、業界に寄與するところ尠からず、明治三十八年九月大崎三郡酒造同業組合長となり、同四十五年五月宮城縣酒造組合古川支部長に推さる。この間家業同業の發展に貢獻する傍ら、餘力を伸べて地方產業の開發に努力を投じ、夙に株式會社宮城銀行の監機に參與せしが、明治三十八年その取締役たり、同年五月古川馬車鐵道株式會社取締役に就任、ともにその重任にあること十餘年に及ぶ。

更に氏は志田郡々會議員、同副議長として地方自治の發展に資したる功績鮮少ならず、また荒雄村農會長たりしほか、各種の公職を歷任して、村治の發達に盡瘁せしところ極めて多し。

大正十二年八月恩賜財團濟生會へ金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十三年三月十五日勅定の緋綬賽章を賜ひ、さらに昭和三年十二月二十六日勅定の藍綬賽章を賜ふの光榮に浴す。

村民氏の德を千歲に傳ふるため荒雄公園に氏の銅像を建立す。當主は吉治氏、宮城縣多額納稅者たり。

宮城縣多額納稅者、酒造業

褒賞事蹟

青沼吉治氏

明治廿一年十一月廿五日生
宮城縣志田郡鹽竈村鹽沼字長瀬

略歷

氏は宮城縣人青沼彦治氏の長男、宮城縣志田郡鹽竈村鹽沼字長瀬に生る。宮城縣立古川中學校を卒へ、慶應義塾大學理財科に學ぶ。明治四十三年四月優秀なる成績を以て卒業するや、家業たる酒造業に從ふに先きだちて、醸造に關する專門的知識を吸收するため大藏省醸造試驗所長期ならびに短期講習會に入り、のち更に日本醸造協會東北支部醬油講習會に入りて研鑽を重ぬ。

父君彦治氏夙に家業たる清酒、醬油、味噌醸造業に精勵し家運を興隆せしめて宮城縣多額納稅者たりしのみならず、地方産業自治の發達振興に多大の功績あり、また社會公共に奉ずるの善行多く、藍綬褒章ならびに銀盃褒章を賜ふの光榮に浴す。村民近隣の德望高く、氏が功績を顯彰するため銅像を建立して永へに其の偉德を傳ふ。

昭和十一年父君襲遒するや家督を相續して家業を主宰し青沼家の主柱たり。最高の學を收め、しかも家業に資するため醸造講習會に入りて、關係專門知識を修得するに勉めたる氏の眞摯にして着實なる態度は、ずでに氏の全人格を物語るに足るもの。家業の興隆に精勵して、益々家門の名を高からしめ、父祖の名を辱しめざるのみならず、常に意を社會公共の寄與に用ひ、私財を投じて至誠を披瀝するの奇特の行爲夥からず、特に敬神崇祖の美風の振作昂揚に勉め、昭和三年八月村社天神宮社殿改築の擧あり、しかも輪奐頗る美觀なるを認むるや、これが新築を期し獨力もつて金貳萬圓を寄附、堂々たる社殿を竣功せしめて府民崇敬の的たらしめたり。斯くの如きはまた氏の人格の具現と謂ふべく、名利を遁はず實をもとむるの善行にして、同年十年十二月勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴したるは宜べなり。

氏は今や宮城縣酒造組合古川支部長、鹽竈村參會議員、愛國婦人會宮城縣支部鹽竈村相談役、鹽竈村社會教育委員、同更生委員、同恩賜會顧問、同學務委員、小作調停委員、古城體育會顧問、其の他多數の公職を歷任し、現に鹽竈村村會議員、同參會總代、同學務委員として區道實踐に遺憾なからんことを期し、地方屈指の名望家たるの地位にありて、又よく銃後國民の指導者的使命の達成に邁進しつゝあり。

藤井正氏

らず、特に護神機關の美員の振作基礎に勉め、昭和三年八月村社天神宮社殿改築の擧あり、しかも協奏願る貧弱なるを認むるや、これが新築を期し獨力もつて金貳萬圓を寄附、堂々たる社殿を竣功せしめて府民崇敬の的たらしめたり。斯くの如きはまた氏の人格の具現と謂ふべく、名利を遠ほすべくもとむるの善行にして、同年十年十二日勳定の褒獎狀を賜ふの光榮に浴したるは宜べなり。

氏は今や宮城縣酒造組合古川支部長、荒雄村農會總代、愛鄕會宮城縣支部荒雄村相談役、荒雄村社會敎育委員、同更生委員、同振興會顧問、同學務委員、小作調停委員、古城體育會顧問、其の他多數の公職を歷任し、現に荒見村村會議員、同農會總代、同學務委員として區道實踐に邁進なからんことを期し、地方屈指の名望家たるの地位にありて、又よく銃後國民の指導者的使命の達成に邁進しつゝあり。

紺綬褒章受賞者

榎本正氏

明治二十八年五月十五日生
住所　大阪市住吉区帝口町四〇二
営業所　大阪市南区久左衛門町
　　東京市京橋区銀座四

わが國に於けるカフエー經營を企業化し、頽々もすれば卑俗に流れ不健康にして明朗性を缺きたる業界をして健康にして衛生的且つ明朗たる娯樂慰安機關たらしめ、進んで個人にして情味豊かなる社交機關たらしめしものは、實にわが榎本正氏なり。

僅々十餘年の短期間にあつて、業界をして眞に文明社會に於ける必須の一機關たらしめ、世人の認識を是正し利用者の數を激増せしめたる功績は沒すべからざるものあるも、常に業界の品位向上に專念し、從業員の教養啓發に勉め、特に女子從業員をして、眞に婦人たるの品格を備へしむるに至りたる功勞は、わが國社會教育史上に特筆すべき一事實たり。

十餘年は瞬きに似たれど、氏の測知不能の努力は測知容易に能なしと得るところにあらず。氏が今日の大を成したる所以は、時代の推移を洞察するの明ありしと、基礎堅く業態と進行するの實性に富みたるにあり、しかも兄弟同族一體となりて、新業の發展に和衷の協力を致したる點はしき模範の結晶たるを看過するを得ず。

氏は福岡縣吉氏の長男にして北野中學校の出身。四男二女の長男たりしが長女勝子、二女富子ともに早世し、明二、三男三、美知夫三氏の長兄たり。

父榮助吉氏夙に大阪市にて飲食店を營みしが、偶々投機事業に失敗し家運一時衰退に遭ふ。母堂貴女の慧れ高く一家の悲運に憔悴することなく、四子の育成に勉めて家運の再興を期したるが、長男正氏堅く志を決するところあり、父祖を繼ぎてこれが再起をはからんより、他に新時代に適應せる新營業を創業して、家運を挽回するに如くものはなしと、大正十四年大阪市北區天神橋五丁目に、資本金壹萬圓會社を設立してカフエー業を開業し赤玉と號す。これ實に氏が今日榎本王國の主柱として業界に君臨するの端緒たり。

當時時代に於ける經營難は、創業說明なるものありしが、忍苦よくこれに耐へ、常に從業の興趣を期して奮闘する爲ら、業界の向上發展を新先し、一擧を得れば直ちにこれを實踐して獲得の實を示すを例とせり。

三度目た消夾雪するに及んで今見を扶けて能ひとところを知らざりしかば、赤玉の名は忽ちにして大阪市民の話柄に上るに至り、開店日につき多きを加へ盛況を極めたり。

一躍大盛況場裏の實位たる道頓堀に進出、次で同四年京橋に進出して、素晴なる新樣式のもとにカフエー界の覺醒方針を一新し、開業人士をして驚嘆たらしめたり。斯ち氏の企業の歴史は三期に分つを得べく、天神橋時代を榎本の準備期とすれば、道頓堀進出は企業化の第一期、東京開進はこれが第二期と謂ふべく、業態並々發展となるや業容を擴大し、京都市へも進出、進に昭和の初期に於て名實共に業界第一人者たるの地歩を確保するに至れり。

業界に文化的一色彩く營らしたるもの、また氏の創意に依るものにして、各種の娯樂施設を組織して、顧客の興趣と讃美を悦しましめ、娯樂機關たるカフエーに一段の精彩あらしめしは、わが國業界に於ける劃期的企畫と謂はざるべからず。

斯くて氏の事業は全國に發展し、其の統率下にあるものを示せば左の通り多數多能にわたり、特に創設を遂行して興行界進出の雄夢と示せる社目に値ひすべく、湘南の地に觀光施設建設の計畫あると共に、氏の仲間として已まざる企業計畫の一端を示すに足る。

大阪ヘヤパレー赤玉、銀座會館、グランドパレス、メトロポリタン（食堂）味のデパート美松（近代喫茶）雲龍地階紳士の喫茶、キユーパレス。東京ヘヤパレー赤玉、銀座ガーデン、銀座ガーデン、銀座ガーデン、銀座ガーデン（スタンド）松竹梅之酒藏（映畫館）全春映畫劇場。京都ヘ食堂（食堂）味のデパート美松（近代喫茶）銀座ガーデン

これら榎本資本による娯樂慰安施設と榎本プロックの營業所は、實に六千坪に上り從業員三千を擁し、日々吞吐する顧客の數、二萬七千餘人に及ぶと謂ふ。

今や氏は非常時局下にありて業界の模範に率劃し、業者の歸趨を認らしめ、常に報國の至誠を披瀝して職域奉公に專念し、また社會公共に奉するを念願とせるが、昭和十五年三月日本赤十字社大阪支部事業費として金壹萬圓寄附の慶に依り、同年十二月二日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰さるの光榮に浴す。

する傍ら、業界の向上策を研究し、一策を得れば直ちに之れを實践して垂範の實を示すを例とせり。

三弟また病次長するに及んで令兄を扶けて倦むところを知らざりしかば、赤玉の名は忽ちにして大阪市民の話柄に上るに至り、顧客日につぎ多きを加へ殷賑を極めたり。

昭和二年大阪歌樂街の首位たる道頓堀に進出、次で同四年京都銀座に躍進して、豪華なる新様式のもとにカフエー界の營業方針を一新し、兩都人士をして瞠着たらしめたり。即ち氏の企業の歴史は三期に分つを得べく、天神橋時代を搖籃の準備期とすれば、道頓堀進出は企業化の第一期、東京躍進はこれが第二期と謂ふべく、業禮益々強固となるや業容を擴大し、京都市へも進出、遂に昭和の初期に於て名實共に業界第一人者たるの地歩を確保するに至れり。

業界に文化的一色彩を色濃く齎らしたるもの、また氏の創意に依るものにして、各種の歌謡並に舞踊團を組織して、顧客の視覺と聽覺を悦しましめ、娯樂機關たるカフエーに一段の精彩あらしめしは、わが國業界に於ける劃期的企畫と謂はざるべからず。

斯くて氏の業績は念濃に膨脹し、其の統率下にあるものを示せば左の通り多數多岐にわたり、特に劇場を獲得し興行界進出の態勢を示せるは注目に値ひすべく、湘南の地に觀光施設建設の計畫あると共に、氏の伸展して已まざる旺盛なる企業計畫の一端を示すに足る。

大阪（キャバレー）キャバレー赤玉、銀座會館、グランドパレス、メトロポリタン（食堂）味のデパート美松（近代喫茶）美松地階紳士の喫茶、ニューパレス。東京（サロン）銀座會館、銀座パレス、メトロポリタン（食堂）味のデパート美松（近代喫茶）喫茶會館、銀座ガーデン、藏屋敷（スタンド）松竹梅之酒藏（映畫館）金春映畫劇場。京都（食堂）味のデパート美松（近代喫茶）銀座ガーデン

これら優本資本による綫業財安施設と優本ブロックの營業所は、實に六千坪に上り從業員三千を擁し、日々容吐する顧客の數、二萬七千餘人に及ぶと謂ふ。

今や氏は非常時局下にありて業界の重鎭に參劃し、業者の師表を謳らしめず、常に報國の至誠と犧牲奉公に專念し、また社會公共に率するを念願とせるが、昭和十五年三月日本赤十字社大阪支部事業費として金壹萬圓寄附の厚に依り、同年十二月二日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰さるるの光榮に浴す。

株式會社伊東信商店取締役社長、伊東紋服株式會社々長、愛國婦人會愛知支部評議員、日本赤十字社篤志看護婦會愛知支部評議員、同幹事

銃後奉公章受賞者

伊東あや氏

昭和十九年九月十三日生
名古屋市中區橦木町二ノ四

氏は代々尾州藩の典醫として名門を誇る中島家の女。祖父龍雄氏まで典醫を勤む。故父司馬氏は陸軍二等軍醫正にして、富山縣學事專門學校初代校長として、我國醫學界の權威たりき。

氏は幼にして夙に名門の子女たるにふさはしく、優雅にして而も嚴然たる風格を備へ、父母の慈愛と薫育に多幸なる環境裡に成育を遂げ、稍々長じて名古屋市立第一高等女學校に入る。

女學校に在るや學業優秀にして品行方正、才級の學高く、低にして良家賢母たるの資格あり全校の範たりき。明治三十五年三月學業を卒へて家庭に入り、修養を扶けて家政を見る傍ら、更に學藝數種を加へしが、同三十九年伊東家に嫁し、信二氏と婚姻す。

舊家伊東家の祖も赤見州藩士にして、先々代幸五郎氏實業界に入り、陸軍御用商人となる。先代卯ちあや氏夫、晋信一氏は、東京外國語學校に學び、家業に歸るや合名會社伊東信商店を設立、絲布商を創業し、精勵克く家運を興起し、自らも又中京實業界に重きをなし、名古屋絲絲布取引所理事長として盛名あり、伊東家の業績をして隆々不動たらしめしが、今日の盛運を見ずして逝く。

あや氏この間能く夫唱婦和を實踐して、一心二體の至誠をもつて、常に家業の管理に精勵し怠るところなかりしが、氏が如何に夫晋の業を鼓舞せしかは、大正七年早くも自らも伊東信商店の出資社員となりて、益々責任の一半を負擔せし事實に依りて明らかなり。

夫晋既くや昭和十一年四月合名會社伊東信商店代表社員となり、家業經營の第一線に立ち、同年七月家督を相續名實ともに伊東家の主權を完掘するに至れり。

夫晋在世中既に業容飛躍的に擴大し、伊東信商店は組織變更の必要に迫られあたるが、氏は家督を相續するや、業容の基礎と人的機構を擴充し、同十二年一月株式會社伊東信商店を設立、取締役社長に就任して益々家業擴作に渾身の努力を拂じ、更に同十四年伊東紋服株式會社を創立して取締役社長に就任、時局下にありて國策御用の重壓奉公に、擧國の赤誠を盡しつつあり。

氏の如く婦女として夫晋の業を扶けて內助の功あり、しかも夫晋歿後にありては、其の業を繼ぎ續々これを進展發せしめ、業績の著大强化を達成せし者は極めて稀有にして、まさに典型的女傑といふべきなり。

しかも氏は家業並に家政を顧るに精密、苟くも能率を忽せにせず、質素節約を勵行して資財を積み、社會公共に盡瘁するを以て、公人的使命となせり。氏の社會公共に擧じたる功績は到底少量の紙筆を以ては盡し盡きず、氏の任にある婦公職と寄附行爲を列記すれば、幸うじて其の一半を知るを得べし。卽ち昭和二年四月愛國婦人會名古屋市中區白川分區幹事長を囑託されしを第一歩として、同五年推されて中京婦人會委員、同十一年四月愛國婦人會名古屋市中區分會副長並に、同愛知支部評議員を囑託され、同五年月會特別有功章を拜受するの光榮に浴す。續えて昭和十五年に至りて同一月愛國婦人會名古屋市昭和區沙路分區長、同二月同昭和分會副長並に日本赤十字社篤志看護婦人會愛知支部評議員、同幹事に囑託され、同三月愛知縣少年保護婦人會昭和區支部副長を囑託さる。

續代を飾ひる當年上の業績を皆勤しつつ、しかも斯く多數の要職に在りて、夫々其の使命を完遂し得るは、氏の絶倫的赤誠の克く然らしむるものにして、寄附行爲に至りては又其の額すでに巨額に上れり。

昭和五年一月熱田神宮奉賛會に金壹千圓、同十二年四月名古屋市社會部に金壹千五百圓、同十四年四月愛國婦人會に金壹萬圓、同年七月愛知縣御器所警察署合併所建設費金として金壹千圓、同十五年三月新設名古屋市沙路小學校に備品費千圓のグランド・ピアノ、日本赤十字社に金壹萬圓を寄附せし外、昭和十一年十月には、亡夫信一氏の遺言に依り、時價百萬圓と評價されたる東山莊を名古屋市に寄附すると共に、これが維持費として金壹萬圓を寄附するなど、年々歲々にわたる善行は到底等當一棟の人物のよく追隨し得るところにあらず。典型的女傑たるにとどまらず、又以て洵に鄕女の龜鑑として推賞すべき偉材たるを失はず。

昭和十四年二月社團法人帝國婦人會愛知支部事業費として金壹萬圓寄附の廉に依り、同十五年六月二十九日勅定の紺綬褒章を賜ひ其の善行を表彰せらるるの光榮に浴す。

米田權一氏

明治五年八月十四日生
大阪市南區淸水新地六番町

米國會名會社々長、千日前寶塚少女劇場、新世界寶塚劇場、九條映劇場、梟尾映畫劇場、三和印刷所感謝社各種事業

紺綬褒章受賞者

略歷

舊家名門を以て知らるゝ米田家の祖は遠く淸和源氏の裔にして、攝家より出でたる大和國に住する族にして、且つ勤王家なる越智氏より分家す。

天資剛毅、剛腸俊銳、仁俠に富む米田權一氏は奈良縣の人吉田繼次郎氏の長男にして、同縣高市郡白橿村に明治五年八月十四日を以て生る。明治二十九年二十四才にして米田クニ子氏の養子となる。

明治三十一年以降實業界に率ずること十年、後之を辭し轉じて演劇興業に志し、米田合名會社を組織するに至るや自ら之が社長となり、能く大衆の興味を察し、其の嗜好を滿足せしめ、常に好評を得て業務を盛んならしめ大いに家業を興隆せしむ。

大正十年、鄕里奈良縣高市郡白橿村大字見瀨氏神社殿の修理、參詣道路の新設、戰歿者記念碑の建設等公共事業に進し又故正一位橘諸兄公（泉州大和川の開鑿、潴溉用水池、久米田池の開鑿其の他淸民救濟業を以て古く世に知らるゝ）の墓所たる久米田池畔の古墳、既に荒廢し里人公の德を思ふことの深きを痛感とし、大正十五年十一月六日、同志と共に墓前を淨め、祭典を執行して公の英靈を祀め、墓域の修理、神社の建設、奬學の開設等の資め、相謀りて財團法人橘會を起し、東奔西走只管之が完遂に努む。

昭和三年三月、日本赤十字社大阪支部病院建築費金壹萬圓寄附に依り、同五月勳定の紺綬褒章を下賜せらる。

職域本分に、報國の赤誠を披瀝しつゝあり

氏の如く友として夫君の業を扶けて內助の功あり、しかも夫君歿後にありては、其の業を繼ぎ續々これを進展興隆せしめ、業績の擴大强化を達成せし者は極めて稀有にして、まさに典型的女傑といふべきなり。

しかも氏は家業に家政を視るに精密、些くも放埒を勉せにせず、質素節約を躬行して家財を積み、社會公共に盡瘁するを以て、公人的使命となせり、氏の社會公共に盡したる功績は到底少量の紙數を以ては盡し難きも、名古屋市中區白川分區幹事長を嘱託されしを第一歩として、同五年推されて中京婦人會長たり、同十一年四月愛國婦人會名古屋市中區分會副長を嘱託され、同五年月會特別有功章を拜受するの光榮に浴す。越えて昭和十五年に至りて同一月愛國婦人會名古屋市昭和區汐路分區長、同二月同昭和分會副長兼に日本赤十字社第志看護婦人會愛知支部評議員、同幹事に嘱託され、同三月愛知縣少年保護婦人會昭和區支部副長を嘱託さる。

繁忙を極むる營業上の業務を督勵しつゝ、しかも斯く多數の要職に在りて、夫々其の使命を完遂し得るは、氏の誠私的赤誠の存る然らしむるものにして、寄附行爲に至りては又其の續すに上籍に上れり。

昭和五年一月熱田神宮奉贊會に金壹千圓、同十一年四月名古屋市社會部に金壹千五百圓、同十四年四月愛國婦人會に金壹萬圓、同年七月愛知縣御器所警察署合宿所建設資金として金壹千圓、同十五年三月新設名古屋市汐路小學校に價格貳千圓のグランド・ピアノ、日本赤十字社に金壹萬圓を寄附せし外、昭和十一年十月には、亡夫信一氏の遺言に依り、時價百萬圓と評價されたる東山莊を名古屋市に寄附すると共に、これが維持費として金壹萬圓を寄附するなど、年々歲々にわたる善行は到底尋常一樣の人物のよく追隨し得るところにあらず、典型的女傑たるにとどまらず、又以て洵に婦女子の龜鑑として推賞すべき偉材たるを失はず。

昭和十四年二月社團法人帝國婦人會愛知支部事業費として金壹萬圓寄附の廉に依り、同十五年六月二十九日勳定の紺綬褒章を賜ひ其の善行を表彰せらるるの光榮に浴す。

芦森鉄鋼所、日進倉庫各株式會社々長、大洋フエルト、田中ピストン・リング各株式會社重役、株式會社高岡製鋼所相談役

芦森武兵衛氏

明治二十年九月四日生

住所　大阪府豊能郡中豊島村岡山二三〇

事務所　大阪市東区北浜一ノ四五

略歴

父業を継承して其の後を継ぐ、高邁なる學識と優秀なる手腕を揮ひて、各種の事業に與かり、克く我が産業振興の一翼を固守し、多大の貢獻を國家に致しつゝある芦森武兵衛氏は、今や業績隆盛昇一方の雄として、益に大いに傾ふべき人材なりとす。

氏は大阪府の人、先代武兵衛氏の長男として、明治二十年九月四日、大阪市北區菅栄町に生々の聲を揚げ、後父君の後を承けて家督を相續するに方り、前名武治郎を改め襲名す。資性穎敏にして勤倹、幼にして既に眞摯を以て目せらる。學序を經て大阪高等商業學校に學び、明治四十一年優秀なる成績を以て業を卒へるや、父業を繼いで實業界に其の第一歩を印し、爾來眞摯不撓の努力精進を以て業界に着々地歩を占め、現時声望嘖々たる芦森鉄鋼所、日進倉庫各株式會社々長として、又實を擧へる外、大洋フエルト、田中ピストン・リング各株式會社取締役、高岡製鋼所相談役として業界に重きを爲しつゝあり。

公共の志に富み、昭和十二年四月、日本赤十字社大阪支部寄附金募集委員として、金一萬圓を寄附したる廉により、其の功を賞せられ、同年十月十六日、勅定の緑綬褒章を下賜せらるの光榮に浴せり。其の他恩賜財團済生會大阪支部へ金千三百圓を寄附物價へ金七千圓、滴洲國軍へ金五百圓を寄附したる外、各種公共事業へ私財を投じたること枚挙に遑あらず。

閨宰に歸依し、圓滿、温厚に多大の趣味を有す。家庭には賢夫人野畠吉氏の長女として情愛高き出身のソ＝夫人あり、長良貞機、内助の功顯る多し。三男茂夫君は京大經濟科に、四男弘君は關西大學に學れも在學中、其の他五男關治君、長女節子嬢、三女崎子嬢、四女久子嬢等ありて、溢々たる和氣堂に家庭に滿ち、其の前途の狀況に刮目すべきものあり。

氏は常に其の事業に就くに當り、情勢以て之を準るのみならず、公に率じては、克く其の分を盡し、萬民の範たるものあり、氏が各方面より多大の信仰を享けつゝある、宜に所以ありと言ふべし。

京都土地興業株式會社々長、相互証券會社監査役
大倉証取役員、日本綿花監事、日本興業會社
社會事業功勞者、勳六等

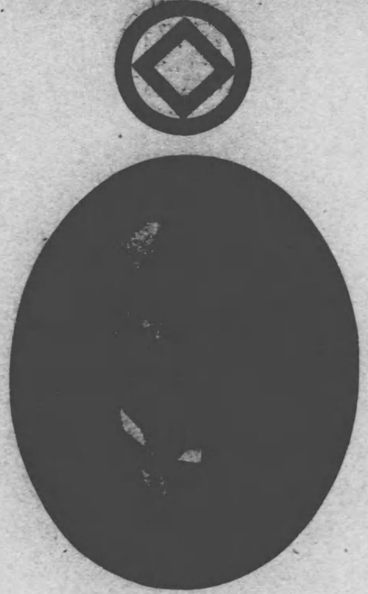
横田永之助氏

明治五年四月二十八日生

京都市下京區綾小路通烏丸東入ル金屋町二九九

略歴

本邦最初の活動寫眞上映者にして、日活の前身横田商會を創立し、映畫の輸入に、製作に、興業に、終始宣傳に多年の努力怠しからず、今日の如き映畫の全盛期を見るに至り、新



故、緑綬褒章受賞者

横田永之助氏

明治五年四月二十八日歿
京都市下京區高辻町參九十上ル龜屋町二九九

京都土地興業株式會社々長、相互證券會社
式會社取締役、日本活動寫眞、日本興業各株
式會社相談役、勳八等

略歴

本邦最初の活動寫眞上映者にして、日活の前身横田商會を創立し、映畫の輸入に、製作に、興業に、將亦宣傳に多年の努力怠しからず、今日の盛を映畫の全盛期を見るに至り、新界第一の功勞者として、廣く衆に其の盛名を謳はるゝもの、之を横田永之助氏とゝす。

當家は古くより京都に住し、代々元栗田宮家に仕ふ。先代横田掬津守豊成勤王の志厚く、維新に際して國事に奔走す。氏は明治五年四月廿八日、豊成の三男として生れ、後分れて一家を創立す。年十七歳を東都に負ひ、杉浦重剛氏の称好塾に學び、後東京高等商業學科に入り語學を專攻す。明治廿三年米國に留學、桑港パシフィックビジネスカレッヂに入り、同廿五年學成りて歸國す。同年市俄古に於て、コロンブス世界大博覽會の開催せらるゝや、京都府の囑託を受け、出品委員として再び渡米、任務を果して會期終了と共に、活動寫眞機械を携へて歸朝し、東京、大阪、横濱等に於て初めて映畫を公開す。實に本邦に於ける活動寫眞公演の嚆矢たり。氏は益に興業の前途有望なるに着眼す。時恰も巴里博覽會に際し再度京都市より出品委員を囑託せられて渡佛す。偶々英佛戰爭の突發するに會し、其の實戰映畫及び博覽會光景の實寫フイルムを携へ歸り、これを公開して好評を博す。益に横田商會を起し、活動寫眞の輸入を開始す。明治四十一年二條離宮附近にスタヂオを建設し、爲上松之助を主役とせる喜劇物の製作を試み、豫想外の好成績を收む。當時氏の成功を見て同業者續出し、寔然群雄割據時代を現出したるが、氏は大合同の必要を說き、遂に明治四十三年日本活動寫眞株式會社を創立す。圖來常務取締役、副社長を歷任し、昭和二年社長に就任、後辭して顧問に推さる。其の他個人の如き各種事業に進出し、業界一方の重鎭を以て稱せられ、又京都商工會議所副會頭に擧げられ、盡瘁する所大なり。

昭和二年十月十三日、多年本邦映畫の發達に力を致し、今や我國良映畫を輸出するに至り、國益を圖りたる功勞顯著なりとして勳定の緑綬褒章を下賜せられ、又京都府教育會外二箇團體事業費に、金一萬一千五百圓、京都府奥州後地方震災者救助費金一萬圓を寄附し、各勳定の緑綬褒章下賜の光榮に浴せり。

校、高橋縣側所相談役として業界に重きを爲しつゝあり。

公共の志に富み、昭和十二年四月、日本赤十字社大阪支部病院改築費として、金一萬圓を寄附したる縁により、其の功を銀せられ、同年十月十六日、勳定の緑綬褒章を下賜せらるの光榮に浴せり。其の他恩賜財團濟生會大阪支部へ金千三百圓帝室博物館へ金七千圓、滿洲國廳へ金五百圓を寄附したる外、各種公共事業へ私財を投じたること枚擧に遑あらず。

篤宗に歸依し、關善、運動に多大の趣味を有す。家庭には夙大府長野幹吉氏の長女にして俗愛高女出身のソヨ夫人あり温良貞淑、内助の功顯る多し。三男茂夫君は京大經濟科に、四男弘君は關西大學に孰れも在學中、其の他五男照治君、長女鈴子嬢、三女靖子嬢、四女久子嬢等ありて、孫々たる和氣堂に家庭に滿ち、其の圓樂の狀況に羨望すべきものあり。

氏は實に其の事業に孰くに當り、精勵以て衆を率ゐるのみならず、公に對しては、克く其の分を盡し、萬民の範たるものあり、氏が各方面より多大の景仰を享けつゝある、蓋に所以ありと言ふべし。

内貴清兵衛

京都瓦斯、大日本麦酒、日本電池、島津製作所、京都銀行、三菱倉庫各株式会社取締役、京都中央市場合資株式会社監査役、錦屋呉服店主

西陣織物商

錦綾紋章褒賞者

内貴清兵衛氏

明治十一年五月生

京都市中京区京極通御池上ル

略歴

西陣織物は特に京都の名産たるに止まらず、實に我邦特有の藝術的商業として、今や世界に其の名聲を博しつゝあり。然るに明治二十年前後より、各府縣機業地の發展に伴ひ、輸入て西陣織の類似品を製出して其の名を僭し、爲めに本場物の聲價を傷つくるのみならず、延いては西陣織物業者の生活を脅威するに至り。同業者自身も之が對抗策として、類似品を製出したる結果、由緒ある西陣織物の信用地を挽ふに至れり。故に代々京都に定住し、堅實商を營みつゝありし内貴家の先代清兵衛氏は、此の憂慮すべき狀態を見るや、西陣織物業者に檄告すると共に、敢然起ちて信用恢復の急先鋒となり、百方盡瘁、同業者を説めて粗製濫造を阻止し、偽織物類除の爲に特管尊身し、其の眞實の努力は遂に一度地に墮ちたる西陣織の聲價を恢復することを得たり。

現當主清兵衛氏は先代清兵衛氏の令嗣にして、氏の父眞吉三郎氏は商人たるを欲せず、研學以て身を官界に投じ、後京都市長に選任せられ、其の高邁なる識見と、卓越したる手腕とを以て、宜く市政を掌握し、同市商工業發展の爲めに盡瘁し、名市長として嘖々の令名を江湖に馳せたる人材なりき。氏は其の覺見として明治十一年五月を以て生れ爲に京都市立第一商業學校を卒へて、父眞の業を繼ぐ。明治三十一年先代卿ち眞父清兵衛氏病沒の後を承け、並に一代を隔てゝ家督を相續し、前名清之助を改めて二代目を襲名するに至る。爾來夏に家業の興隆に努め、殊に明治三十七八年日露戰役當時生絲相場の變動著しく、各地の機業家にして倒産相踵ぐ間に在りて、克く内貴西陣織物商としての老舗を維持し、又歐洲大戰後の反動期に際しても動搖することなく、爾來順進また順進、業績一層の發展を告げ、今や冒記の如き各會社重役に推され、京都實業界に於て偉大なる存在を示しつゝあり。

氏は夙る公共公同の念に厚く、昭和三年七月、京都市美術館建設費として、金一萬圓を寄附したる廉により、同年十月廿九日勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴したる外、各種社會事業に私財を投じたること枚擧に遑あらず。

錦綾紋章褒賞者

鈴木榊次郎氏

明治廿二年九月廿五日生

住所　名古屋市東區主稅町三ノ八

營業所　名古屋市熱田區伝馬町十三

松川絹糸株式會社取締役、京都織料株式會社監査役、合資會社鈴木石炭商店代表社員、鈴木織物株式會社々長

略歴

榊次郎氏は愛知縣の人、先代榊次郎氏の長男にして、幡豆郡一色町に生る。前名道一、大正三年先代の亡跡を繼ぎ家督を相續、榊次郎を襲名。

先代榊次郎氏は洛れに見る傑材にして、夙に名古屋市に出

鈴木榊次郎氏

松川燃料株式會社取締役、帝都燃料株式會社監査役、合資會社鈴木石炭商店代表社員、鈴木運輸株式會社々長

紺綬褒章受賞者

住所　名古屋市東區主税町三ノ八
營業所　名古屋市熱田區造内町十三

略歴

榊次郎氏は愛知縣の人、先代榊次郎氏の長男にして、幡豆郡一色町に生る。前名憲一、大正三年先代の亡跡を繼ぎ家督を相續、榊次郎を襲名。

先代榊次郎氏は稀れに見る傑材にして、夙に名古屋市に出で、石炭商を創業し、一般燃料類を取扱ふ外、故里一色町に貯氷場を設け、氷の貯藏をなす等、當時の世人が到底夢想をだに爲し得ざる先見的企業を起し、雄篇をして寧ろ冷笑せしめし時期ありしも、氏の非凡の卓見は時代の推移に伴ひ着々具體化され、企業化され、念速の速度を以て發展、業績また大いに好況を加ふるに至れり。

當主榊次郎氏は、年齢いまだ志學に達せざる少年期に於て慈父を喪ひたるも、己に祖先遺業の氣風に富み、少年にして克く家業を督するの才能を備へたり。亡父の多年にわたる奮闘努力によつて、業礎漸く堂堂たりとなりたる家業を繼ぎたる氏は、商次業容の擴張と充實に專念し、放膽にして而も機微を捉へるに鋭なる氏の商略は、多數にして複雜なる石炭業界ならびに燃料業界を風靡し、業績頓みにあがり、また同業界の信望を厚し、中京業界に重きを成すに至れり。

氏はまた代用燃料の改良向上に意を注ぎ、燃料統制に備へ松川燃炭株式會社の運營に參畫して、時局即應の職域奉公に邁進する傍ら、燃料運輸の圓滑を期するため、自ら鈴木運輸株式會社の社長として、運輸機構の合理化に獨特の才腕を揮ひ、實直なる運輸界の窮境打開に精勵しつゝあるが、氏の天資たる統率の力は、鮮やかなる實績となり、衆望更に加はり今や名實共に業界指導者たるの觀あり。

遺族慈落の氏は、私利に恬淡、所謂公益優先の理念に基き營業利益の大半を割きて國家に貢獻するを常とせり。即ち最近に於いては昭和十四年十二月、日本赤十字社愛知支部へ壹萬圓、名古屋帝大建設愛として壹萬圓、結核豫防協會へ貳萬圓、軍人援護會へ壹萬圓、紀元二千六百年奉祝會へ壹萬圓を寄附したる外、九七式戰闘機壹機を陸軍へ献納し、更に同愼兵郎へ五萬圓を献納する等善行擧しきものあり、昭和十五年五月十三日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

とを以て、克く市政を掌理し、同市商工業發展の爲めに貢献し、名市長として嘖々の令名を江湖に馳せたる人材なりき。氏は其の愛兒として明治十一年五月を以て生れ夙に京都市立第一商業學校を卒へて、父祖の業を援く。明治三十一年先代卸ち祖父清兵衛氏病歿の後を承け、益に一代を隔てゝ家督を相續し、前名清之助を改めて二代目を襲名するに至る。爾來夏に家業の興隆に努め、殊に明治三十七八年日露戰役當時生絲相場の變動著しく、各地の機業家にして倒産相續ぐ間に在りて、克く內貴西陣織物商としての老舗を維持し、又歐洲大戰後の反動期に際しても動搖することなく、爾來躍進また躍進、業績一層の發展を告げ、今や頭記の如き各會社重役に推され、京都實業界に於て偉大なる存在を示しつゝあり。

氏は頗る公共公同の念に厚く、昭和三年七月、京都市美術館建設費として、金一萬圓を寄附したる廉により、同年十月廿九日勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴したる外、各種社會事業に私財を寄したること枚擧に遑あらず。

緑綬褒章受賞者

大篠千太郎氏

明治四年十月二十五日生

略歴

我國に於ける工業の發達は、近年著しき足跡を印し、世界列國の間に伍して何等遜色なく、各種製品國内に充溢し、貿易亦實に盛況を極む。而して夫等一般工業の發達は、當然機械工業の進歩を招來し、精巧なる機械器具にして、我邦に於て製造し得られざるもの殆ど無く、曾只我邦のみに製作さるべき特殊のもの數十種を數へ、今や機械文明の勝利を謳歌しつゝあり。大篠千太郎氏は、自ら技術家として、多年機械製造及び經營に經驗を有し、關西に於て夙々たる名を聲する人材たり。

氏は大篠米藏氏の二男として、明治四年十月廿五日、長崎縣西彼杵郡深澤村に生る。頭腦明晰鐵腕にして、幼時より手工等を好み、物の型を作ることに無上の愉悦を感じつゝありし折、精々長ずるに及び、機械類を操作分解することに、深甚なる興味を覺ゆ。玆に於て進んで鐵工業に身を投じ、而も一工場に止らず、漸次各種の工場に轉々して、凡ゆる技術を修得し、其の温厚なる性情と優秀なる技術は、到る處衆人の認むる所となり、職長等に推され、大正七年遂に大阪鐵工所因島工場長に抜擢せらる。爾來督勵尊身事に當り、其の間技術方面のみならず、工場經營にも深き經驗を得たるが、其の堅實にして當を得たる經營振りは、意に他の追隨を許さず、職工の操縦亦巧妙を極め、氏の下に在る者、皆其の人格に心服し、感謝の類皆無なりしと言ふ。後其の職を退き、店を神戸市北長狭通五丁目に移し、株式會社根口機械製造所の取締役に就き、益々無比の才腕を揮へり。

責任感厚にして、人の師表たるべき人格を具へ、公共公同の志厚くして、夫等の事業に盡し、之を後援せること一再ならず。殊に愛鄉心深く、鄉里深澤村の爲に、多年尠からざる助力を加へ來りしが、大正十二年六月、母校たる岡村尋常高等小學校基本財産として、金二萬圓を寄附したる廉に依り、其の功を賞せられ、同十五年一月十五日、勅定の緑綬褒章を下賜せられ、一門の榮譽を輝かせり。

緑綬褒章受賞者

株式會社三國機工所取締役社長

田村源太郎氏

慶應三年十二月生

大阪市東淀川區三國本町

略歴

鐵工所の一職工より身を起し、赤手空拳、異常の勤勉と不斷の努力を以て、オリヂンス空氣壓縮機の世界的發明に成功し、今や業界の第一人者として推さるゝ田村源太郎氏の活歴史は、當に後進子弟を感奮興起せしむるものあるを覺ゆ。

氏は大阪の人田村村藏助氏の長男として、慶應三年十二月。

田村源太郎

株式會社三國鐵工所取締役社長

義、褒續賞章受賞者

田村源太郎氏

慶應三年十二月生

大阪市東淀川區三國本町

略歴

鐵工所の一職工より身を起し、赤手空拳、異常の勤勉と不斷の努力を以て、オリヂンス空氣壓縮機の世界的發明に成功し、今や業界の第一人者として推さるゝ田村源太郎氏の活歴史は、實に後進子弟を感奮興起せしむるものあるを覺ゆ。

氏は大阪の人田村兼助氏の長男として、慶應三年十二月、大阪市東區大川町に生る。生家は古くより、中之島一帶の倉屋敷諸方を一手に引受け、資産信用共に高きものありしが、明治維新の大變革に遭遇し、多年全盛を誇りたる同家も、忽ち瓦解するの悲運に遭ひ、續いて幼兩親に九歳の時、父君を喪ひ、爲に丁稚奉公に出で、或は少年船員に、或は行商に變轉極り無き數奇の生活を經りつゝ具さに世路の辛酸を嘗め、十六歳の時大阪鐵工所の人夫を志願し、後職工に進げらる。十九歳の時、偶々英國より始めて大阪砲兵工廠に渡來せる、機具無し汽艦の見學を許され、忽ち該汽艦の製法を會得し、明治十八年、獨立して同市西區三軒屋町に田村製罐所なる一小工場を設けて之が製造を開始し、爾來業運勃々として發展しつゝありしが、三十一歳の時、暴支配人の爲に謀られて、工場を閉鎖せざるべからざるに至る。振くて蒼然更生の道に就き、住友別子銅山に入り、或は鹿島因之島鉛業の建造に從事し、或は鹿山鎖の採鑛事業に參畫する等、波瀾萬丈の生活を經りつゝ、其の間獨學も空氣壓縮機の研究を怠らず、遂に同機の圓座物として、性能極めて優秀なる空氣瓦斯發生機を發明するに至り、同四十年現所に工場を開設し、後、其の能率に於て世界的の稱ある空氣壓縮機の完成を告げたり。氏の發明に係るオリヂンス空氣壓縮機は、其の後幾多の改良を加へられ、既に米、英、獨、佛、瑞等各國に特許權を有し、我政府に登錄の特許件數實に二十餘種を算す。而して其の利用事業、交通、土木建築、化學醸造、鐵工、造船の各方面に亘る。昭和九年個人經營の工場を株式會社三國鐵工所に改む。

昭和十年九月十八日、實業に於ける功を賞せられ、勅定の緒綬褒章を、又同六年乃至九年事變に軍人慰恤義金として一萬二千圓を寄附し、同十四年二月勅定の緒綬褒章を、又日本赤十字社大阪支部へ金一萬圓を寄附し、同十五年四月同篤志下賜の光榮に浴せり。

因島工場長に拔擢せらる。爾來粉骨碎身事に當り、其の間拔衛方面のみならず、工場經營にも深き經驗を得たるが、其の堅實にして富を得たる經營振りは、寔に他の追隨を許さず。職工の操縱赤巧妙を極め、氏の下に在る者、皆其の人格に心服し、感化の類皆無なりしと言ふ。後其の職を退き、店を神戸市北長狹通五丁目に移し、株式會社櫻口機械製造所の取締役に就き、斷妙無比の才腕を揮へり。

責性甚厚にして、人の師表たるべき人格を具へ、公共公同の志厚くして、夫等の事業に盡し、之を後授せること一再ならず。殊に愛鄕心深く、鄕里深瀨村の爲に、多年尠からざる助力を加へ來りしが、大正十二年六月、母校たる同村琴常高等小學校基本財産として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、其の功を賞せられ、同十五年一月十五日、勅定の緒綬褒章を下賜せられ、一門の榮譽を揮かせり。

名和助市

京都株式取引所取引員

褒賞受賞者　名和助市氏

慶應三年三月十七日生

住所　京都市下京區下柳原八坂鳥居前

營業所　京都市中京區車屋町御池通小路下ル

略歴

年少にして商業に志し、自ら望んで商家の丁稚奉公に入りあらゆる世路の辛酸に遭遇するも其の志を變へず。如何なる困苦にも其の節を屈せず、粉骨砕身、克く勤勉を尽いて、遂に成功の彼岸に達し、一流の富豪として京洛の地に盛名を謳せつゝある名和助市氏の如き、正に立志傳中に名を飾るべき人材にして、大いに推賞に値する一人たり。

氏は慶應三年三月十七日を以て、岐阜縣羽島郡八劍村の一農家に生る。夙に商業に志し、同郡内に於て生絲賣買を業とせる小島傳兵衛商店に商業見習として住込み、勤苦精勵克く主家の爲に盡し、二十歳を多く出でずして既に其の商才を認められて番頭の地位に昇進し、更に大いに爲す所あらむとする折柄、偶々日露戰役勃發し、戰後生絲界が前代未聞の不況に陷り、小島商店も一時閉鎖の已む無きに至り、爲に氏は誤を呑みて、三十年近く身を捧げたる主家を去り、勤續中貯へたる若干の資金を懐にして京都に乘込み、四條東洞院西入の地に株式取引店を創業して、苦心慘憺たる數年を經過し、明治四十二年漸く取引員たるの資格を得、爾來順風滿帆、資力の次第に充實すると共に信用益々加はり、更に二十年を經過せる今日に在りては、京都業界に於ける古參株として、元老の地位に坐するに至れり。夙に繁榮信用組合取締役、京都市證券株式會社取締役、京都取引所組合評議員及び同副委員長に推され、業界に多大の貢獻を致せり。

公共の念に厚く、昭和三年七月、京都市大礼擧行祝賀費として、金一萬圓を寄附したる處に依り、同年十月廿九日勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴せり。又同十五年一月には第十六師團へ高射砲一臺、其の代金として二萬七千五百圓を獻納したる外、岐阜縣八劍小學校講堂、同縣八劍村九所社本殿並に同村公會堂等の補築費を寄附し、同村より村内に氏の銅像を建立して其の德を表彰せらる。其の他日本赤十字社、恩賜財團濟生會、軍人援護會、愛國婦人會等に私財を寄附し、又神社佛閣に浮財を寄進せること枚擧に遑あらず。

努力の人たると共に、赤誠公の念厚き氏の如き、洵に衆民の龜鑑として推賞するに足る人物と稱すべし。

株式會社國方商店專務取締役

褒賞受賞者　國方新吉氏

明治十七年十月十七日生

住所　大阪市東區石町一丁目十四番地

營業所　大阪市東區備後町五丁目十五番地

略歴

香川縣大川郡長尾町に生る。父は長平氏、祖父は多平氏。共に其の名を極めて豐儀を選はしめるに充分なりと謂ふべし。名設自稱、國方新吉氏の姓名また豐饒にして、すでに飛躍性

株式會社國方商店取締役社長

紺綬褒章受賞者

國方新吉氏

明治十七年十月十七日生
住所　大阪市東區石町一丁目十四番地
營業所　大阪市東區備後町五丁目十五番地

略歴

香川縣大川郡長尾町に生る。父は長平氏、祖父は多平氏。共に其の名極めて豊儀を重はしめるに充分なりと謂ふべし、名設自明、國方新吉氏の姓名また豊儀にして、すでに飛躍性に富む。いまだ志學に達せざる少年の身をもつて、商都大阪に出で實業家を志したる進取性は、氏の姓名より受くる印象を明確に裏書し、氏の面目躍如たるものあり。明治三十三年上阪して輸入雑貨商川亟商店に入る。氏の立志傳的人生行路の第一頁は、かくて一小店員としての活躍に始まる。明治三十八年日露の役に召されて偉勳を樹て、勳八等に敘せらる。大正四年主家在勤十五ヶ年にして獨立、レース問屋の經營に從事することゝなりしが、常に海外貿易事情を具さに調査研究するとともに、必要なる專門的知識の獲收に勉め、世界的商人たるの修養を怠らざりき。昭和五年意々時期到來、北米合衆國ならびに英領カナダを視察、大いに見聞を豊かならしむるとともに、秘かに期するところあり、歸朝後經營方針を刷新し、販路の擴張に邁進、業績頓みに好成績を加へ、氏の業界における地歩また牢固たる基礎を築くに至れり。昭和十一年さらに佛領印度支那、シャム等を視察し、早くも南進經濟發展の方略を確立し、越へて翌十二年株式會社國方商店を設立、取締役社長の重職に就任せり。わが國南進政策の遂行上佛印、蘭印の國防上ならびに政治的、經濟的地位ます〳〵重大性を加ふる時、先見の達識によつて、具に今日あるを豫期したる氏の差配は非常時局經濟戰の世界的進撃において、輝て輝しい偉力を發揮するものと期待さる。しかも國家の干城として砲火を浴び、戰野を馳驅したる體驗は、時艱克服への熱意を約き、新呼制下における經濟戰士としての使命を堂々遂行するものと期待さる。

昭和十二年九月ならびに同十四年十一月社會事業施設費の寄附、神社佛閣への寄進により再度大阪府知事より賞狀を授けられ、昭和十四年九月鄉里に於ける社會事業施設費、教育事業費の寄附により、香川縣知事よりも賞狀を授けられたるが、昭和十三年十月日本赤十字社大阪支部事業費として金一萬圓を寄附したる件により、同十四年三月十四日紺綬褒章を賜ふの光榮に浴せり。

の次第に充實すると共に信用益々加はり、更に二十年を經過せる今日に在りては、京都業界に於ける古參株として、元老の地位に坐するに至れり。最に繁榮信用組合取締役、京都市證券株式會社取締役、京都取引所組合評議員及び同副委員長に推され、業界に多大の貢獻を致せり。

公共の念に厚く、昭和三年七月、京都市大禮奉祝事業費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、同年十月廿九日勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴せり。又同十五年一月には第十六師團へ高射砲一臺、其の代金として二萬七千五百圓を獻納したる外、岐阜縣八幡小學校講堂、同縣八劍村九所社本殿並に同村公會堂等の建築費を寄附し、同村より村内に氏の銅像を建立して其の德を表彰せらる。其の他日本赤十字社、恩賜財團濟生會、軍人援護會、愛國婦人會等に私財を寄附し、又神社佛閣に淨財を寄進せること枚擧に遑あらず。

努力の人たると共に、赤本公の企厚き氏の如き、洵に業民の龜鑑として推賞するに足る人物と稱すべし。

細田吟藏氏

明治十三年一月六日生
兵庫縣多可郡鎌井庄村鳥野部

略歴

細田家は通稱百五十年に及ぶ舊家にして、當主吟藏氏は四代目、先代藏藏氏の長男。代々農を業とし、夙に德望高かりしが、吟藏氏幼時より期するところあり、教育家たらんことを志し、初等教育を卒るや師範學校に學び、明治三十四年卒業、直ちに兵庫縣多可郡中村尋常小學校に奉職す。

爾來轉々轉任すること數囘、しかも通算の地にあらざる中村小學校に奉職するに至りたる氏は、二級の教育に包まれつゝ、教壇に立ちて子弟の德育に渾身する傍ら、更に學と德育を怠らず、理想的教育家たらんことに勉めしかば、子弟ならびに父兄の景仰厚く、中村小學校に在職すること實に滿九ヶ年にして、早くも中村第二尋常小學校の校長に擧げらる。其の赴任の速やかなることは、異例となすべく、以て氏の如何に信頼厚かりしかを證するに足る。時に明治三十九年のことなり。

中村第二小學校々長の榮職に就くや、教育家として育英事業に眞金を盡すと共に、一村の教學行政に參畫して、民心の振作、自治行政の發展に寄與するところ尠からず、多大の功績をのこして大正八年三月退職、農業に從ふ。

鎌井庄の地は農業地として兵庫縣下に其の名高き西脇に接し、當時織業熱の旺盛あるを看取したる氏は、農業をもつて地方産業たらしめんことを期し在來西脇を中心とする織業が內地向け織物を主としたるを、海外輸出向け織物に轉向せしむるを目的として新工場を設立、他機百數十臺をも新調、即刻ならびに織綿を貸與して、新業の發展大に奔走し、興業部落をも勸誘指導し、特産織物の生産高を增加せしめ、地方産業として眞々たる地歩を築かしめたり。

農事にも熱心に從ひ、他に有望なる副業もなく、財政豊かならざりし鎌村も、氏の指導啓蒙により繭業に轉じ、養蠶を打開して再生の生業に就くを得たり。

しかも氏の眞價を傳ふる最後は、前述を總括する個人にして、國內同業者中、六割は本縣を使用すると云ふ。氏の功績また偉大なりといふべし。

昭和十二年十二月、多可郡松井庄村社會事業基金として金壹萬圓寄附の際に依り、同十三年四月二十三日勳定の榮譽を賜ふの光榮に浴す。

井上商事株式會社々長、綿布加工品輸出商

井上宗一氏

明治十七年八月二十五日生
住所　大阪市住吉區帝塚山南ノ町三ノ二二
電話所　大阪市東區安土町三ノ一八

略歴

氏は岐阜縣人磯野八三郎氏長男、井上家に入り婿養子となる。井上家は江州石部の出身、先代故常次郎氏に依りて家業

井上商事株式會社々長、綿布加工品輸出商

綬褒賞章受賞者

井上宗一氏

明治十七年八月二十五日生

住所　大阪市住吉區田邊ノ町三ノ二二

番館所　大阪市東區安土町三ノ一八

略歴

氏は岐阜縣人磯野八三郎氏長男、井上家に入り婿養子となる。井上家は江州石部の出身、先代故常次郎氏に依りて家業創まる。

江州人は由來實實にして商道に秀で、他郷に出で獨立立ち名を成して、實業界に雄飛するもの尠からず。先代故常次郎氏も亦其の一人にして、大阪市における江州出身者中の傑物たるを失はず。

幼にして既に大阪に出で商業に從事せんことを志し、稚嚢先輩の立志傳等を耽讀して青雲の志を伸べんことを期したりしが、稍々長じて上阪の機を得、勇圖獨立獨歩立志成功道の第一歩を踏み出すことを得たり。

綿布加工品が、辛うじて內地の需要を滿すに足るの貧弱なる狀態にありし當時、氏は生産增加の促進と、販路の海外擴張による新業の發展を期し、關係取引工場の育成を計いて、產業發展の目標を海外進出に置くべきを强調、自らも亦率先して自家營業機構を整備擴充して、海外進出に備ふるところあり、更にまた加工品の品質改良を助成して、外國製綿製品を驅逐するに勉めるなど、氏の先覺者的努力は新業の進展に多大の效果を齎らすと共に、家業の隆盛また日に加はり、當々の業績を擧ぐるに至れり。

江州出身者にして一代よく財を成し名を立つる者多しと雖も、氏のごとく滅私奉公の理念に基きて、家業の國家的使命を認識し、業界進展の爲めに、擧身の努力を投じたるものは尠し。

養父の家業を繼ぎたる宇一氏また、父祖の遺志を尊重し、常に私利に走るを戒しめて、業界の發展に勉めて父名を擧しめず、時局の影響に因りて家業の經營に一段の努力を要するとき、精勵恪勤苦勞遂行の態度に缺くなし。

飾ら夙に小學兒童の體位向上に深き關心を持ち、これが關係施設の擴充に盡瘁したること尠からざりしも、昭和三年大阪市立小學校中プールの設備あるもの極めて少なきを遺憾とし、同年七月同市田邊尋常小學校にこれが建設費並に同校運動場整理費として金壹萬貳千圓を寄附せし廉に依り、同四年八月十六日勅定の緋綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

し、商業機構の整備擴充に努めたる氏は、機業をもつて地方産業たらしめんことを期し在來西陣を中心とする機業が內地向け綿織物を主としたるを、海外輸出向け織物に轉向せしむるを目的として新工場を設立、機臺百數十臺をも新調、原料ならびに機械を貸與して、新業の發展擴大に奔走し、隣接部落をも勸誘指導し、特產織物の生產高を增加せしめ、地方產業として堂々たる地歩を築かしめたり。

概ね農に從ひ、他に有望なる副業もなく、財政豊かならざりし當村も、氏の指導奬勵により機業に轉じ、窮境を打開して再生の生業に就くを得たり。

しかも氏の營業に係る織機は、精巧を極め機能調る優秀にして、郡內同業者中、六割は本機を使用すると云ふ。氏の功績また偉大なりといふべし。

昭和十二年十二月、多可郡松井庄村社會事業基金として金壹萬圓寄附の廉に依り、同十三年四月二十三日勅定の緋綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

松本健次郎

九州鉄道㈱、玄洋汽船㈱、若松築港㈱各株式会社重役、明治石炭㈱、豊国鉱業㈱、九州水電㈱、明治鉱業㈱、筑豊興業㈱各株式会社ノ長ニ、北海大鉱業㈱、帝国大学、日本銀行ニ歴任、日本郵船㈱、㈱帝国ホテル、三井信託㈱各株式会社及第一ムラ会社五会社ノ取締役、安川電機製作所、明治鉱業㈱、帝国鉱業開発㈱各株式会社監査役、明治鉱業㈱、安川第五郎氏ノ後ヲ受ケ同社ノ各株式会社ノ代表社員

緑綬褒章受賞者

従六位勲四等　松本健次郎氏

明治三年十月廿日生

戸畑市中原千七十一番地

略歴

男爵安川敬一郎氏の二男に生れ、帝国大学土木科卒業後父松本姓を冒す。父逝くや、父の遺業に、又兄鶴は教育事業に多大の貢献を捧げつゝあるもの、これを松本健次郎氏と為す。

氏は明治三年十月廿日を以て生れ、幼年期を過ぐ。明二十年創立の福岡中学を卒へて、神戸市外人経営の私立学校に英語を学び、更に東京専門学校卒業後渡米の途に入りて、英語と商事を修む。明廿四年二月、米国に渡航してペンシルヴァニア大学に学ぶ。之より先明二十二年十二月、一年志願兵として、歩兵第十二聯隊に入営、翌年十月除隊となり、明廿七年陸軍歩兵少尉、明三十三年中尉に、明三十七年十一月日露戦役に参加し、大本営付を命ぜられ、明三十八年七月大尉に昇進す。後に米国官業を学べて帰朝するや、実父翁父の経営せる炭鉱管理の任に当り、同時に門司に於て石炭販売業に従事す。即ち門司石炭販売同業組合副組合長、若松石炭運送行、明治倉庫、若松築港㈱、帝国鉱物各株式会社重役たりしが、現時同各会社の社長及び社重役として、豊富に積大なる勢力を占め、従名を聞はれつゝあり。

氏は教育事業に多大の関心を有し、明治四十年七月高等教育普及の目的を以て、実父と協力、戸畑市に明治専門学校を設立し、又大正六年九月日本有数国政諮問機関枢密顧問官として、米国に差遣せられ、功勢鋒からず。

公共の企画る厚く、社会事業其の他に寄附を致したること枚挙に遑あらず。大正十二年九月、関東大震災救護費として金参万五千圓を寄附したる為により、明治二十年二十八日勅定の緑綬褒章並に之に附すべき銀盃を下賜せられ、昭和六年乃至九年迄の間に亘し、鉱業開発資金に金参万円を寄附し、尽ねて篤志を表彰せらる。洵に一代の光栄といふべし。

株式会社野村義商店取締役社長、勲六等　野村義三郎君
株式会社、大日本製薬株式会社、株式会社堂島大薬房各取締役、三田薬品製錬所、廣栄株式会社各監査役、二巴合名会社代表社員

緑綬褒章受賞者

勲六等　鹽野義三郎氏

明治十四年十一月十五日生

住所　池田市建石一、九三六
営業所　大阪市東區道修町三ノ一二
試験部　大阪市西淀川區浦江町上二ノ四七
工場　大阪市西淀川區海老江下三ノ四九
同　兵庫縣川邊郡小田村今國前一九二

株式會社鹽野義商店取締役社長、鹽野義兵衛
株式會社、大日本製藥株式會社、株式會社堂
島大藥房各取締役、三田藥品製造所、廣榮株
式會社各監査役、二巴合名會社代表社員

義、褒賞授與受賞者

勳六等　鹽野義三郎氏

明治十四年十一月十五日生

住所　池田市建石一、九三六
營業所　大阪市東區道修町三ノ一二
試驗部　大阪市西淀川區姫里江町上二ノ四七
工場　大阪市西淀川區海老江下三ノ四九
同　兵庫縣川邊郡小田村今圖第一九二

略歷

我國製藥業界の覇者として聲名ある鹽野義三郎氏は大阪府の人鹽野義一氏の長男にして、大正九年父君隱居に依り家督を相續し、前名正太郎を改め、父君の前名たりし義三郎を襲名す。

父君義一氏は大阪東區道修町藥種商鹽野吉右衞門氏の二男に生れ明治七年分家獨立して漢藥の販賣業を創始せしも、時代の要求は漸次洋藥に傾きつゝあるを看取し、斷然漢藥を捨てゝ洋藥專門の營業方針に改め、同二十一年商品の規格を劃一すべく試驗會社を創立せり。これ實に後世隆盛を極むるに至りし大日本製藥株式會社の前身たり。更に氏は同社創立と相前後して研究所を設立、洋藥の製造に着手するや研鑽倦むところを知らず、遂に輸出藥の屑よりカヒーネを、製鹽副産物たる苦汁よりブロームを製出するに成功す。本邦に於ける洋藥製造の嚆矢たり。次で廣榮合資會社を組織して沃度工業の先鞭をつけ、明治四十年製藥工場、研究所を新設、歐洲大戰に依り洋藥輸入杜絶するや、頓みに業域を擴張して精勵克く本邦製藥界に飜歩を揚げしめ、輸入防遏の嶮難を築けり。其の功績顯著なるに依り大正十三年勳定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

父君を繼ぎたる義三郎氏は、拮きなき業績を護るに忘りなく、家業の伸張に精勵する傍ら、大阪藥種仲買商組合組長、同藥種卸商組合議員會議長、內閣醫藥制度調査委員、大阪藥事專門學校理事長、其の他業界關係公職に歷任して、斯業の發展に資するところ尠からず、社會公共關係の公職また多岐にわかれ、日夜率公の至誠を披瀝しつゝあり。

昭和六年十一月七日勳定の緑綬褒章を、同十一年十二月廿三日同飾版壹個を、更に同十三年二月十四日同飾版を賜ひ、光榮に浴すること三度に及べり。この外陸海軍大臣より功勞章を授與される等受賞枚擧に遑なし。

褒賞受章者

故 黒田重助氏

嘉永二年一月十四日生
京都市下京區富小路三條下ル

略歴

抑々黒田家の由緒を温ねるに、當家は代々京都に定住し、祖先を大黒屋兵衛と稱して法衣商を營み、創業以來繁々として百五十年の歴史を有し、明治年代に入りて黒田の姓を名乘り、重助氏を以て五代を算す。主として知恩院派の法衣用達を勤め、同業者中唯一の舊家として、亦柯宗關專門の法衣商として知名の家柄たり。

茲に小傳を叙せんとする重助氏は、嘉永二年一月十四日、尾張國丹羽郡丹陽村傳法寺の農家三宅磯人氏の次男として生る。資性機敏にして頗る商才に富み、夙に商業に志あり。即ち稍々長ずるに及びて京洛の地に出で、先代黒兵衛氏の家に商實見習として入り、多年主家の爲めに率先して多大の信頼を得、遂に懇望せられて黒田家の養子となり、後先代の病歿するに及び家督を相續す。當時の養家は業務の範圍極めて狹く資産亦多からず、爲に氏は業務の發展を策し、自ら各寺院を訪れて註文を聞き、夜は深更に至るまで作業を行ふ等、日夜精勵し、遂に大繁榮を來したる一方、日清戰役後產業界は頓に隆盛となり、各種事業の勃興を促し、爲に黒田家の所有に係る田畑宅地等は年と共に其の價格騰貴し、隨つて其の地代が最も大なる收入として計算せらるゝに至り、此の機に乘じて更に各所に土地を購入し、茲くて明治四十年頃までに、其の間僅かに十年餘にして巨萬の富を積むに至れり。

茲くの如くにして、氏は其の産を成すと共に、社會的地位も從つて擡み、同業者の間に重きを爲すに至り、農に法衣同業組合長に推されて、業界に多大の寄與を致し、又公同組合長、衛生組合長等の公職に就きて貢獻する一方、各種の公共事業に對して、該に陽に援助すること頗る多かりき。就中七十七歳の喜の字の賀宴を開くに當り、京都慈善會へ參圓の金員を寄附し、昭和三年七月には、御大典奉祝事業資金一萬圓を寄附し、同年十一月一日、勳定の褒賞下賜の榮を擔へり。其の他日本赤十字社、海員救濟會、京都教育會等に力を致せり。

農に隱退して養子太市郎氏に家業を引ね、餘かなる餘生を送りつゝありしが、昭和六年五月八十三歳の天壽を以て、溘焉として逝けり。後昭和八年太市郎氏夫妻亦相踵いで歿し、現時京都府相原彙次郎氏の四男龜四郎氏入りて養子となり、七代目重助を襲名、能く家業を護りつゝあり。

株式會社富岡製紙所々長

紺綬褒章受賞者

國東照太氏

明治二十年一月一日生

高松市花吉町一四二番

略歴

氏は高松の人國東長太郎氏の長男。國東家は代々製紙を以て業とし、氏の祖父特吉手すき製紙の創業す。當主照太氏は手すきの名は製紙工場より出でたるものにして、其の傳統を誇る獨特なる工程によりて製造されたる和紙は、極めて優美精巧にして、同地の名産たるを失はず。

父業を繼ぎたる氏は、古くも美き傳統の精神を沒却せざると共に、能率增進を目標とする手すき工程に依る和紙製造の機械化を企圖し、慨意にして精密なる研究の結果、遂に業志を貫徹して生産能率の向上を結成、生産高を上昇せしめて適良つ品質の優秀を以て益々聲價を高め、業務益々擴大、業績頓みに良好を加へ、手すき和紙をして終下製紙業界の王座を占めしむるに至れり。更に氏は製造工程の機械化を達成したるに滿足せず、原價方法の合理化を實施し、能を示して業界の革新を促進し、新業の發展に寄與するところ尠からざりしのみならず、東歐大川郡津田町に大東製紙所を新設して、和紙の海洲圖進出を企圖し益々業績を伸べて計畫の具體化を期し、遂に夏時を開拓して和紙大陸進出に先驅をつけ、洋々たる國策事業の將來に一大光明を與らせり。

氏は株式會社富岡製紙所、大東製紙所を主宰するのみならず、非凡なる商才を揮つて、其の關係する事業の業績實孔なり。即ち高松機船倉庫監査役として其の經營に參與し、新興高松港の仲展と海陸運輸交通界に貢獻し、今や高松財界の重鎭として重きを成せり。

百貨店の經營は學術文化的使命を持つものにして、其の經營の任にあたるもの、使命たるや重大なり。實に文化的使命を有するのみならず經濟的使命もとより重大にして、殊に非常時下にありて其の任重々重し。從つて百貨店を主宰するものは經濟人たると同時に文化人たることを要す。氏の如きは蓋し最適の逸材と謂ふべきなり。

昭和十五年三月日本赤十字社香川支部事業費として金壹萬圓を寄附したる慶に依り、同年九月二十七日勅定の紺綬褒章を賜はの光榮に浴す。

最も大なる收入として計算せらるゝに至り、此の機に乘じて更に各所に土地を購入し、忽くて明治四十年頃までに、其の間僅かに十年餘にして巨萬の富を積むに至れり。

忽くの如くにして、氏は其の產を成すと共に、社會的地位も從つて進み、同業者の間に重きを爲すに至り、曩に法衣同業組合長に推されて、業界に多大の寄與を致し、又公同組合長、衞生組合長等の公職に就きて貢獻する一方、各種の公共事業に對して、陰に陽に援助すること頗る多かりき。就中七十七歲の喜の字の賀宴を開くに當り、京都慈善會へ多額の金員を寄附し、昭和三年七月には、御大典奉祝事業費金一萬圓を寄附し、同年十一月一日、勅定の紺綬褒章下賜の榮を擔へり。其の他日本赤十字社、海員掖濟會、京都教育會等に力を致せり。

曩に隱退して養子太市郎氏に家業を委ね、靜かなる餘生を送りつゝありしが、昭和六年五月八十三歲の天壽を以て、遺憾として逝けり。後昭和八年太市郎氏夫妻亦相踵いで歿し、現時京都府相原筆次郎氏の四男龜四郎氏入りて養子となり、七代目重助を襲名、能く家業を護りつゝあり。

木村作五郎氏

明治十一年六月十二日生
大阪府東成郡天王寺村二百三十九番地

略歴

大阪市立商業學校を修了し、高等小學に進みし氏は、不幸にして歳前後に耐へざるの故を以て、修業二ケ年にして進學を斷念せしも、向學の志抑へ難く、書籍購讀の傍ら家業を勵みつゝ、專に獎學を修得すること二ケ年餘、頗る明敏なる氏の擧學事業は克く學識を博め、遂に商業を繼ぐたちしめたりといふ。

大正十年二月實父逝去するや家業を相續し、幼名傳三郎を改めて、作五郎を襲名す。木村家は祖父の代忽代々長崎港居留地八番の委託貿易を業とし、當字帶刀の家柄にて、日野屋作五郎の名は、氣骨稜々たる大阪商人の代表的人物として知られ、父祖の氣風仕運絲として子孫に傳はり、傳來の家業は勿論の一途を辿りたるも明治初年神戸港開港さるゝや時流の機を見るに敏なる氏の實父は家業を廢して貸金業を創め、漸次業務を擴大して、貸地貸家業を營むるに至れり。

父祖を繼ぐに忠實なる氏は、時勢の進展につれて營業方針を改革し、明和六年二月十一日、紀元節の佳日を卜して合資會社を創立、資本金壹千壹百餘萬圓を擁するの業體を確立せり。日野屋作五郎の家名を辱しめざるのみならず、益々家門に輝きあらしめつゝある氏の德望は實に驚くべきものがある。幼にして歳親、正規修學の途を遂ぐるを得ず、しかも獨學獨歩克く今日の大を成し得たるは、父祖の營業として基礎の堅固なるものの存するありたりと雖も、氏の精勵努力の功も亦大なりと謂ふべく、以て實業界稀れに見るの苦勞家となすに足れりとす。

善性溫厚篤實、日蓮宗の信仰厚く、趣味として書畫を愛好し、時に山水を友として旅行を悅しむ。高潔なる氏の風格は勿論の高貴なると、宗教的自己修練の賜なるべし。

氏は夙に公共の念に篤く、大正十年關東大震災に際して逸早く義捐金貳千圓を寄附したるほか、大阪市大典記念事業費として壹千圓、軍事援護事業費として壹萬圓を寄附し、錄綬褒章氏の赤誠を披瀝するとともに、紀元二千六百年の佳辰を迎ふるや、奉祝基金として奈良縣へ壹千圓、橿原神宮基本財產として壹千圓をそれ〳〵寄附する等、善行枚擧に遑なし。昭和四年四月日本赤十字社大阪支部病院建築基金として壹萬圓寄附の廉により同年五月七日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

岡田勢一氏

明治二十五年八月一日生
住所　大阪市大正區泉尾松之町三ノ二七
營業所　大阪市西區川口町三五

略歴

一介の職工より身を起し、獨學研鑽、沈淺艦船引揚工事に關與し、進に其の方面の第一人者となり、更に海運界に進出して、關東廳築港事業の第一線に活躍しつゝあるもの、之を岡田勢一氏と爲す。

氏は明治五年八月一日、鹿島郡鹿島神宮門前村に生る。幼

株式會社岡田組社長

岡田勢一氏

明治二十五年八月一日生

住所　大阪市大正區泉尾北之町三ノ二七

營業所　大阪市西區川口町三五

略歷

一介の職工より身を起し、獨學研鑽、沈沒艦船引揚工事に關與し、終に其の方面の第一人者となり、更に海運界に進出して、關覺業陣營の第一線に活躍しつゝあるもの、之を岡田勢一氏と爲す。

氏は明治廿五年八月一日、德島縣麻植郡半島村に生る。幼時家貧にして、正規の修學を許さず、爲に他家に奉公或は職工として年期修業の傍ら、修學研究に勵み、沈沒船引揚工事に從事し、二十七歳にして技師となり、大正九年主家の業務縮小に際して獨立、玆に岡田組を創立、船舶解體、沈沒船引揚を業とす。大正十五年二月大阪市木津川尻に船舶解體の営業工場を建設、昭和二年同尻築川尻に第二工場、同四年木津川尻船町に第二工場を設け、滑次設備と技術工員の充實を圖れり。時恰も世界的海運不況、船腹過剰時代にして、鐵鋼資源に乏しき我國に於ては、之等解體船に由りて、其の資源を得ることを有利としたるにより、我解體船事業は頓に勃興し、英米伊等各國と鋼を爭ふに至り、鐵鋼の自給自足、輸入防遏の國策に寄與する所頗る大なりき。此の間更に神奈川縣鶴見に分工場を設置し、大阪の三工場を合して使用從業員二千名、一ヶ年の解體能力十數萬總噸に達せり。玆くて昭和六七年頃には、我國の解體事業は世界第一位を占め、十餘年前に解體せられたる鐵船數百萬噸に上る。昭和十年岡田組に船舶部を新設し、船舶運航營業を併せ經營するに至り、同十二年十一月株式會社に組織を變更し、傍系事業として東京に興業海運株式會社、大阪府大津町に和泉製鋼株式會社を設立し、又三重縣に出谷銅山を經營す。支那事變勃發以來、船腹の一大不足を告ぐるや、當社は優秀なる技術と完璧の設備を總動員して、內外各海洋に於ける沈沒船引揚に當り、大いに其の功を收めつゝあり。

夙に帝國軍人後援會事業資金として一萬圓を寄附し、昭和十四年八月廿三日勅定の紺綬褒章を下賜せらる。其の他德島縣忠靈碑建設費に三萬圓を寄附せる外、各種社會事業等に私財を投ずるもの百餘件、其の金額實十萬圓に上る。以て其の公共の志の如何に深厚なるかを想見するに足るべし。

會社を創立、資本金壹千壹百餘萬圓を擁するの業體を確立せり。日野屋作五郎の家名を恥しめざるのみならず、益々家門に輝きあらしめつゝある氏の得意想像するに難からず。幼にして虛弱、正規修學の途を進まず、しかも獨學獨歩克く今日の大を成し得たるは、父祖の遺業として基礎の堅固なるものの存するありたりと雖も、氏の精勵努力の功も亦大なりと謂ふべく、以て業界稀れに見るの苦闘家となすに足れり。[illegible]

喪性溫厚篤實、日蓮宗の信仰厚く、趣味として書畫を愛好し、時に山水を友として旅行を悅しむ。高雅なる氏の風格は趣味の高尙なると、宗教的自己鍛錬の賜なるべし。[illegible]

氏は夙に公共の念に篤く、大正十年關東大震災に際して逸早く義捐金貳千圓を寄附したるほか、大阪市大典記念事業費として壹千圓を寄附、事變勃發や海軍協會資金として壹千圓、軍事援護事業費として壹萬圓を寄附し、紘後國氏の赤誠を披瀝するとともに、紀元二千六百年の佳歳を迎ふるや、奉祝基金として奈良縣へ壹千圓、橿原神宮基本財產として壹千圓をそれ〳〵寄附する等、善行枚擧に遑なし。昭和四年四月日本赤十字社大阪支部病院建築基金として壹萬圓寄附の擧により同年五月七日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

神田勝次氏

明治廿一年十月七日生
兵庫縣加古郡高砂町北本町

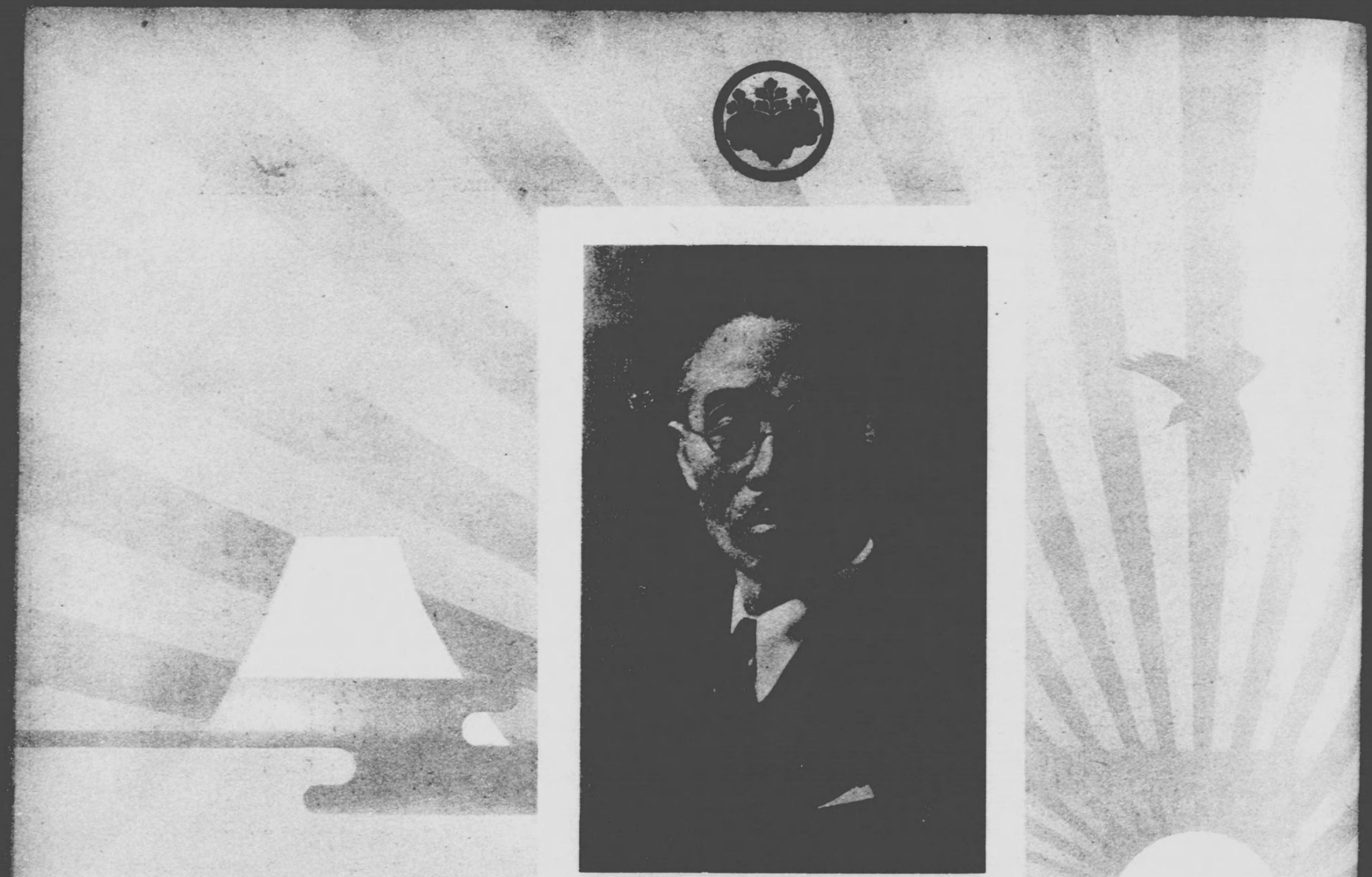
略歴

年齢尚かに十八歳の年少にして銀行界に入り、勇者の勤勉と努力とを以て、着々其の地位を進め、新界の内外実業一として精通せざるなく、業界の生字引を以て稱せられ、今や兵庫縣下に於ける有数の銀行家として、各方面より多大の尊敬と信頼を享けつゝあるもの、之を我が神田勝次氏其の人となりとす。

氏は兵庫縣飾磨郡御國村字國分寺久蔵源太郎氏の四男として、明治二十一年十月七日を以て生れ。先代神田榮藏氏の養子となり、其の家を継ぐ。神田家は兵庫縣加古郡高砂町の名家にして、氏は五代目の當主たり。先代は高砂銀行の創立者として、多年其の經営を勤め、鄉黨の間に信望厚き人なりき。勝次氏は夙に銀行家を志し、明治廿八年實業に身を投じ、精勤忠實、其の明敏の質と闊活なる手腕とを認められ、易易として支配人となり、更に重役に抜擢せられ、同行の爲に重き貢献る大なりき。後神戸銀行と合併するや、推されて經濟顧問の重職に就き、一層の努力を以て、益々業界に重きを爲すに至り、昭和十五年春、推されて取締役に就任し、以て今日に至れり。尚ほ播磨瓦斯株式會社監査役、播丹鐵道株式會社相談役を歴任す。一方自治方面に進出し、大正六年高砂町會議員に選出せられ、爾来今日に至るまで二十餘年の長きに亙りて鄉黨、以て町政の爲めに多大の努力を拂ひ、其の他登記期期鄉會議員、同參事會員として郡政にも勢かちざる貢献を爲し、又大正八年以來所得稅調査委員として現在に至る。

氏は社會公共の念厚く、昭和四年八月兵庫縣加古郡高砂町役場建築費として、金一萬二百二十五圓を寄附したる處を以て、昭和五年四月十一日、勅定の緑綬褒章を下賜せらるゝの光榮に浴したる外、尚ほ自治功勞者として兵庫縣知事より表彰状並に金杯を贈られ、其の功を賞せらる。其の他公私の團體を始め、外種の社會事業、公益事業に對して、私財を投じたること尠からず。

宗教の信仰は丸に三ツ柏にして、其の宗教は淨土宗、氏は圓善、鵬山に趣味を有す。家庭には、きみ夫人の外、妻子正雪（大正七年生）あり。夫人は妻父榮藏氏の長女にして、温良貞淑、賢夫人として聞ゆ。又正雪は加古川中學を經て、關大卒業後神戸銀行に勤務す。



河合龜太郎氏

中央物資會、臨時物資調整委員會、國民勤力聯盟會
中央防空委員會、大日本防空協會、化學工業品物價專門委員會
醫藥品價格形成專門委員會各委員、東京農事專門學校財團、財
團法人佐々木研究所各理事、日本文化中央聯盟、財團法人結核
豫防會各評議員、河合研究所、河合醫院所各所長、

監修叢書受賞者

藥學博士 河合亀太郎氏

明治九年六月八日生

住所 東京市中野區野方通二ノ二七
勤務所 東京市中野區住吉町
函館工場 北海道函館市

わが藥學界の誇れる河合亀太郎博士は、靜岡縣の出身、靜岡縣濱名郡中瀨村に生る。幼にして英才の譽れ高し。精々長じ家を負ふて東京に出で、藥學を修む。當時わが國における藥學界は、いまだ嶄く藥學の學問を脫するも究極せる教育機關尠く、多くの青年學徒は概ね獨學にひとしき研鑽を積み、藥學の登龍門たりし國家試驗に登第するもの、また稀めて尠少なりき。

氏もまた當時の青年學徒の例に洩れず、幾多の困苦艱難を克服して獨學し、明治二十七年早くも國家試驗に合格す。氏の年齡漸く十九歲の時なり。

十九歲は當今にありては、中等教育を修了した丁度の一書生たるに過ぎず。今日のごとく完備せる教育施設に惠まれたる現代と雖も、國家試驗たるの資格を得んには、隨當の論を遂るとするも三ケ年の日月を要せざるべからず。氏が幾倍かに十九歲にして當々社會に頭示するに足る資格を得たるは、氏の非凡の秀才にして、また勤勉力行の士たるを應してな任ありき。

由來人生行路にありて、一つの關門を突破せば、これに安んじて更に飛躍するの途を拓くに勉勵せざるを常となす。非凡の士と雖も小成に安んずれば、大成を期し難し。氏の如き英才も一個の國家試驗として藥劑に店舖を張ること不可なりしならん。

不斷の研究ありてこそ進歩あり、進歩ありてこそ大を成す。氏の不斷不撓の精勵による研鑽は茲に偉大なる結實となりて、氏に榮光をあらしめたり。即ち昭和八年藥學博士の學位を授與さる。

これよりさき氏は東京市中野區住吉町に河合研究所を、鳴水所區綠町に河合醫院所を設立して、探遠なる學識と實意なる研究を基礎に、幾多の新藥を創製實現し、新藥の普及に努めると共に社會の福利を增進し、國民健位の向上を助長せしむるところ多かりき。

昭和九年日本藥劑師會々長の榮譽につき人望大いに加はる。同十二年歐米藥學界を歷訪し、夏に一段の見聞を博して歸朝に貢獻するところ甚大なり。そのわが國藥學界に貢與せし功績極めて顯著なるものあり。昭和十五年十一月十日、勅定の藍綬褒章を賜ひ、功勞を顯彰せらるるの光榮に浴す。

氏は今や河合研究所、河合醫院所ならびに北海道函館市の函館工場を、藥學術界の陣營として、最終事業に絶大なるのみならず、中央物資會、國民勤勞奉公會、化學工業品物價專門委員會、醫藥品價格形成專門委員會の顧問として、新興の進軍に勉め、國家事業の遂行に協力して遺憾なきを期す。夏に氏は國民體力審議會、中央防空委員會、大日本防空協會各委員たり。非常時局下にありて國民體力の向上、防空思想の昂揚を必要とする今日より急なるはなき時、氏の如き人材が藥學を傾倒して學問の至誠を披瀝するあるは、國家の幸ひと謂ふべきなり。

氏は常に藥學界における後輩たるにとどまらず、また熱誠訪問學の權威たり。結核豫防會評議員たる氏の見識に俟つべきもの尠しとせず。結核豫防會を援助し、結核撲滅に多大の效果を齎らすの日ちかきを信じて疑はず。

氏はまた先哲財を投じて藥學研究振興の完實に資したる美擧尠からず。東京農事專門學校財團理事として同校財政の基礎を鞏固ならしめ、東京藥學專門學校、京都帝國大學藥學科へ、それぞれ金壹千圓を寄附して、斯學の研究を奬勵するなど、奇特の行爲枚擧に遑あらざる中に、東京市本所區高等女學校へ金壹千圓を寄附せし善行は、氏が常に女子教育の振興に深き關心を有する證左にして、特筆するに値ひす。科學振興の必要須臾の時、氏も亦藥學界の重鎭として期するところあるべく、今後における活躍また刮目して見るべきものあるべし。

實となりて、氏に榮光をあらしめたり。卽ち昭和八年藥學博士の學位を授與さる。

これよりさき氏は東京市中野區住吉町に河合研究所を、同本所區綠町に河合製藥所を設立して、深遠なる學識と貴重なる研究を基礎に、幾多の新藥を創製發賣し、斯界の發展に資すると共に社會の福利を增進し、國民體位の向上を助長せしむるところ多かりき。

昭和九年日本藥劑師會々長の榮職につき人望大いに加はる。同十一年歐米藥學界を視察し、更に一段の見聞を博して斯界に貢獻するところ甚大なり。そのわが國藥學界に寄與せし功績極めて顯著なるものあり、昭和十五年十一月十日、勅定の藍綬褒章を賜ひ、功勞を顯彰せらるるの光榮に浴す。

氏はまや河合研究所、河合製藥所ならびに北海道函館市の函館工場を、藥學報國の陣營として、鵬城奉公に餘念なきのみならず、中央衞生會、藥局法調査會、醫藥制度調査會、化學工業品物價專門委員會、醫藥品價格形成力審議會、中央防空委員會、大日本防空協會各委員たり。非常時局下にありて國民體力の向上、防空思想の昂揚を必要とする今日より急なるはなき時、氏の如き人材が蘊蓄を傾倒して報國の至誠を披瀝するあるは、國家の幸ひと謂ふべきなり。

氏は嘗に藥學界における權威たるにとどまらず、また豫防醫學の權威たり。結核豫防會評議員たる氏の見識に俟つべきもの尠しとせず。豫防會を推進し、結核撲滅に多大の效果を齎らすの日ちかきを信じて疑はず。

氏はまた私財を投じて藥學研究機關の充實に資したる美擧尠からず。東京藥學專門學校財團理事として同校財政の運營に卓拔せる手腕を發揮し、同校の發展をしてますます高からしむるに與つて大いに力ありたるのみならず、日本藥劑師會へ金壹萬圓を寄附し、同會の財政的基礎を鞏固ならしめ、東京藥學專門學校、京都帝國大學藥學科へ、それぞれ金壹千圓を寄附して、新藥の研究を奬勵するなど、奇特の行爲枚擧に遑あらざる中に、東京市本所區高等女學校へ金壹千圓を寄附せし擧行は、氏が嘗に女子敎育の振興に深き關心を有する證左にして、特筆するに値ひす。醫學振興の必要缺くべからざる時、氏も亦藥學界の貢獻として期するところあるべく、今後における活躍また刮目して見るべきものあるべし。

株式會社山中兵右衛門商店社長、元江東電鐵株式會社取締役、
衆多個約役者、元日野町長、勳六等

紺綬褒章受賞者

山中兵右衛門氏

明治二十五年七月十七日生
滋賀縣蒲生郡日野町大字大窪一〇一一

山中家は其の祖遠く藤原氏に出で、當主兵右衛門氏に至るまで直系三十三世、實に一千餘年連綿たる名家なり。德川七世の孫内令人右近衛府生光德、惟高親王の御子三品小倉宮實王に從ひ近江國に來り住せしが、其の子龍人式部小丞光衡は延喜十三年八月功に依り甲賀郡山中鄕を賜ひ圖來山中を以て氏となす。是すなはち山中家の元祖たり。後十一世を經て男子なかりしかば佐々木六角元老忠泰朝の孫綱光を迎へ女に娶す。由中家の家紋四つ目なるは佐々木氏に因緣深からざるを物語るものなり。

山中家の祖は世々蒲生氏に仕へて各所に轉戰軍功を樹てしが、領久の時會津百萬石の領主氏鄕に復落家臣去る者多かりしかば、領久また自ら弓術を棄てて町人となり、油商業として辛うじて綿口を浸ぐこととなれり。領久の孫第二十六世初代兵右衛門氏は實永元年二十二歳にして志を立て、今鄕の縁家より綿二駄を借り受け最終關東の地を目指して行商の旅に上れり。斯くて百里の道を往復すること實に十四箇年の長きにわたりしが、氏の勤倹力行は遂に關ひられ享保三年六月膳州御關場に出店を創設し奥羽、太物、繰貨、雜貨を取扱ふこととはなれり。これ實に今日山中家の隆盛の基礎をなすものにして、初代兵右衛門氏はまさに山中家中興の祖たり。

二代兵右衛門氏に至りて益々繁榮ならびに水口藩主加藤家の御用繰綿となる。三代兵右衛門氏の時寛政十二年御關場に關繰場を新設し、文政二年福州湯上村に關繰店を開設す。四代兵右衛門氏の時天保七年江州南條村なる豐浦關繰場を分家山中與兵衛氏より引受け、明治八年精製製造をも營むるに至る。嘉永三年沼津に關繰買賣店を開設、繁榮益々增大して家運更に隆盛を加へしが、五代兵右衛門氏の晩年は時勢も明治維新の變革にして關所の關係廢かならず、流入續行爲めにして一般商賣浮沈の激甚に彷徨し、加ふるに主家復古により領主を失ひ、全く自由競爭場裏實力を以て闘ふさるべからざるに至る。しかもこの重大轉換期に直面して明治二年五代兵右衛門氏卒然として逝く。齡僅かに五歳の幼主を擁して山中家はまさに危機に遭ひしが、店員克く眼識を與奪して事かの落ずなきを得せしめたり。先代の遺德の然らしめたるに因ると雖も、店員の主家に仕へる忠實なるまた推賞するに足れり。

初代兵右衛門氏十八歳にして夭折、幾に名家の相續人缺ぐしかば、明治十六年關村關日野村より妻子を迎法、二代安太郎氏となり。然れども同氏に配するに三代兵右衛門氏の實關より直系を引く四實の孫を以てせしかば、其の子孫皆々と山中家の血統を繼ぐを得たり。

二代安太郎氏克く屋業を守り、特々奥羽の得向ありたる關係を挽回し、明治四十四年滋賀縣多額納稅者の列に加はる。山中家第二の中興の祖と稱よべきなり。

二代安太郎氏の次男健次郎氏夙に實家商關大學に學び、大正六年卒業を卒へるや家業に從事して家業に努力同十年父實政後家督を相續し、前名を襲して兵右衛門の名を再び復活襲名す。即ち當主三十三世六代兵右衛門氏なり。

氏は實性溫厚篤實にして名家の主たるにふさはしき溫雅の風格あり。智德ともに備はり德望頗に高し。父業を繼承するや家憲を遵守して家風を振さらんことに勉め、しかも時代推移沈潤して商次業容の改善革新に勉め、大正十二年關東地方大震火災、昭和五年伊豆地方震災の二度の災厄に際り各地各店ともに積極的打擊を蒙りしも、拮据精勵直ちに復興の實を擧げ、大正十三年新たに東京に關繰買賣店を增設し、昭和六年御關場における兵藏太物店を廢して同地に關繰場を移轉、以て營業種目を關繰油脂買賣に統一せり。昭和七年時勢に應みて大いに飛躍を期するところあり。經營關店を總括統合して株式會社山中兵右衛門商店を設立す。今や業界未曾有の難局に直面すると雖も羽津市上土町に本店を構へ、據するに關西關御關場町御關場支店、同縣蒲山村南條伊豆支店、神奈川縣小田原市池上小田原支店、東京市關東區前三丁目東京支店を以てし、業務の擴ぎなきを期するとともに、また國策順應の方途を講じて職域奉公に萬全を期しつつあり。

氏が社會公共に奉ずるため私財を投じたる美擧多き中に、大正十年十一月滋賀縣蒲生郡日野町基本財産として五分利國庫債券額面壹萬圓及び同縣立日野高等女學校建築費として金壹千六百七拾圓を寄附せし廉に依り、昭和三年十二月二十四日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

川崎兼三氏

初代兵右衛門氏十八歳にして夭折、遂に名家の相續人絶えしかば、明治十六年隣村朝日野村より養子を迎ふ、二代安太郎氏なり。然れども同氏に配するに三代兵右衛門氏の愛嬢より直系を引く四世の孫を以てせしかば、其の子孫堂々と山中家の血統を繼ぐを得たり。

二代安太郎氏克く祖業を守り、稍々蚕微の傾向ありたる家運を挽回し、明治四十四年滋賀縣多額納稅者の列に加はる。山中家第二の中興の祖と謂ふべきなり。

二代安太郎氏の次男健次郎氏夙に東京帝國大學に學び、大正六年學業を卒へるや家居父君を扶けて家業に努力同十年父君歿後家督を相續し、前名を廢して兵右衛門の名を再び復活襲名す。即ち當主三十三世六代兵右衛門氏たり。

氏は資性温厚篤實にして名家の主たるにふさはしき温雅の風格あり、智徳ともに備はり徳望夙に高し。父業を繼承するや家憲を遵守して家風を濳さざらんことに勉め、しかも時代推移に順應して漸次業容の改善革新に勉めも、大正十二年關東地方大震火災、昭和五年伊豆地方震災の二度の災厄に罹り各地各店ともに致命的打撃を蒙りしも、拮据精勵直ちに復興の實を擧げ、大正十三年新たに東京に酒類販賣店を增設し、昭和六年御殿場における吳服太物店を廢して同地に酒造場を移轉、以て營業種目を酒醬油販賣に統一せり。昭和七年時勢に鑑みて大いに將來を期するところあり、經營諸店を總括統合して株式會社山中兵右衛門商店を設立す。今や業界未曾有の難局に直面すると雖も沼津市上土町に本店を構へ、擁するに靜岡縣御殿場町御殿場支店、同縣富山村南條伊豆支店、神奈川縣小田原市池上小田原支店、東京市淺草區藏前三丁目東京支店を以てし、業務の擴ぎなきを期するとともに、また國策順應の方途を講じて職域奉公に萬全を期しつつあり。

氏が社會公共に奉ずるため私財を投じたる美擧多き中に、大正十年十一月滋賀縣蒲生郡日野町基本財産として五分利國債參額面壹萬圓及び同縣立日野高等女學校建築費として金壹千六百七拾圓を寄附せし際に依り、昭和三年十二月二十四日制定の褒授賞章を賜ふの光榮に浴す。

緒綬褒章受賞者

川邨兼三氏

明治十二年十一月生
西宮市川添三十二番地

氏は京都府の人平井敏五郎氏の三男、明治十二年十一月京都市に生る。稍々長じて山岡家に入嗣せしことありしが、のち更に川邨利兵衛氏の養子となる。

養父利兵衛氏は夙に大阪財界に盛名あり、各種事業に關係して大阪商工業界の發展に貢献したるところ頗る多し。

明治の中葉に至りて、綿絲布の需要とみに增加するや綿花の需要また急激に暴增し、綿花關係事業に手を染むるもの多かりしが、氏も亦内外綿花株式會社の創設に奔走して功績あり、同社成立と同時に樞機に參畫して重役たりき。

當三氏幼にして俊敏、英才の譽れ高かりしが、初等教育の課程を卒るや、大阪市立商業學校に學ぶ。優秀なる成績を以て同校を卒業、上級の學統に入るを斷念して、直ちに實社會の試練に身を投ずることとはなれり。

益し深遠なる學術の蘊奥を究むることの必要なるは論を俟たずと雖も、實社會に入りて直ちに修練を積むことの、尚遙にありてはまた大名を成すの捷徑たるべきを確信せしめたるは、氏の積極的性格によるものと謂ふべし。

明治三十一年内外綿花株式會社の青年社員となりたる氏は、養父の重役の地位にあるに鑑み、自らを持するに極めて愼嚴、苟しくも言動を忽せにせざるのみならず、精神克く社務に勵み、模範社員たらんことを期せり。

當時内外綿花はいまだ草創時代にして、基礎いまだ全からず、組織整頓また緊急の域に進せざるの狀態にありしかば、氏の職務にして實直なる態度は、忽ち認めらるるところとなり、若壓よく先輩同僚を拔きて、斷然頭角を現すに至れり。

氏夙かに期するところあり、幹部社員の員數組織機構の大體革の事あるや、所信を敢遲して自らの意見を具體化せしめ、内外綿花の根本的改善の確立に多大の功績あり、非凡の識才と相俟つて漸次重進福要の地位に就く。

氏は持論として綿花事業の大陸進出を主張すること久しかりしが、遂に時機到來して明治四十三年十二月社命により支那に駐業することとなれり。

爾來昭和二年に至るまで前後二十年間を支那大陸に於り、この天津、上海、青島ならびに滿洲各地に内外綿花工場を建設し、あるひは紡織併展の最高金額を擧立するなど、同社の大陸進出に與つて大いに力あり、實に同業界外進出は氏を以て嚆矢となす。

氏は曾に内外綿花の國際事業に貢献したるのみならず、曾に實業の大勢と大陸の將來を考慮して、資本投下の素地確立に專念し、金融問題を顧慮しては米作增地の基礎を勵行し、電氣興業の計畫を樹てては水力電氣事業を起し、揚子江の河水を利用して大發電所の建設計畫を樹つるなど、先進滿外國實本の推行調歩する中にありて、わが國威を宣揚せしこと甚大なりき。

當時内外綿花の社長は、先代岡部彦太郎氏なりしが、昭和二年後進に途を拓くため同社を辭し悠々自適の生活に入る。

氏の在支二十年間の中、その過半は上海に在り、從つて上海居留民間にありて重きをなし、同胞の向上發展に貢するところまた多く、就中氏は居留民子弟の教育に留意し、教育施設の擴充に不斷の努力を投じ、私財を投じたること一再にとどまらざりしが、大正十一年九月上海居留民團教育基金として、金壹萬圓を寄附せし縁に依り同十四年十月二十四日勅定の褒奬狀を賜ひ、其の善行を表彰せらるるの光榮に浴す。

この外日本赤十字社、恩賜財團軍人後援會、同潤生會、神社佛閣等へ寄附せしこと枚擧に遑あらず、現に日本赤十字社有功社員たり。

明治三十三年北清事變に從軍して功あり、從軍記章ならびに一時金貳百圓を賜ふ。

今や氏は餘生を趣味生活に送らんとす。その感懷想像するに難からず。造圓、盆栽、その他風雅の途を悦じむこと專らにして、和歌、詩作、墨蹟に長じ、精靈に至りては竹石畫伯に師すること十餘年に及び、すでに素人の域を脫す。半甫と號す。後年にして精靈を極めたるにより、この雅號あり。

風光明媚なる西宮市川添の居宅にありて、風流を友としつつ過古を顧みる氏の胸裡に、映ずるものは果して何ぞ。波瀾萬丈の健鬪史に坐ろ感慨なきを得ざるは當然なるも、初志を貫徹して安きに居るは、堅忍篤實努力の賜なりとの結論に到達するを信じて疑はず。

嗣子厚行氏は阪大工學部出身の俊材。

八十島誠之

緒綬褒章受賞者

故 八十島誠之氏

明治三十七年十一月生
東京市芝區白金臺町一ノ七一

氏は澁澤子爵家の代表者として、わが國財界に令名ありし八十島親徳氏の二男として、明治三十七年十一月東京市芝區白金臺町に生る。澁澤榮吉子名づけ親たり。子自ら擇ばせし命名書に「中庸曰誠者天之道也誠者人之道也是稱而所以命名斯兒也」とあり。仍ち誠之の名生る。

父君親徳氏は、伊勢國宇和島藩士にして、維新の達人たりし八十島行藏氏の二男、幼にしてすでに俊邁、夙に時代の大勢を達觀し、屢々子として進言する國策に徴み、大いに將來成すあらんことを期し、東都に出でて商業の學を修めんことを志せしが、武將一徹の厳父行藏氏は、商業の學を以て素町人の學と做し、容易にこれを肯ぜざりしが、向學の志旺盛なりし親徳氏は、凡ゆる手段と口舌を用ひて厳父を說得し、漸く十七歳にして東京に出づるを得、東京高等商業學校に入學せり。

同學にわが國における經濟學の泰斗關田徳三氏をはじめ、幾多の俊才ありしも、性來聞聞明晰にして勤勉なりし親徳氏は、常に優秀なる成績を擧げ、關田氏とは首席爭ひをなし、在學中席次三番を下りしことなかりしといふ。明治二十六年拔群の成績を以て同校を卒業するや、聖二十七年勲積重遠博士の推薦によりて澁澤家に入り、支配人助役となり覺ぬるに澁澤子爵秘書の重職を以てせり。澁澤子初めて親徳氏に面接せし時、斯くの如き有能の士を、澁澤家が終生使用することは、國家のため惜しむべきことなりと激稱せりといふ。親徳氏の凡庸の器にあらざりしことを證ふに足るべし。

澁澤家に入るや澁澤子と意氣投合し、所謂以心傳心一心同體の觀あり、從つて澁澤子の信認極めて厚く常に子の代表として各種事業の視察に參畫し、實業界に雄飛するに至れり。

關東澁澤家に在ること二十餘年、浅野セメント、澁澤倉庫、日本貯蓄共他多數大會社の取締役として、非凡の才腕を揮ひしが、大正九年男子の最盛期ともいふべき五十歳を一期として、流行性感胃に胃され急性肺炎を併發し、前途なほ多くの事業を餘して急逝す。

澁澤子の悲嘆これより大なるはなく、當時子は親しく靈前に立ちて、兎も生ける者に對するが如く「子はすでに舍げ會澁の人々をして號泣せしめたり。洵に親徳氏の急逝は、實に澁澤家の損失たるのみならず、また國家の大損失たるを失はざりき。

齢之氏遺父の企圖に體ふや、その遺志を伸べて大正九年六月東京市、東京商科大學友父祖の故山宇和島市へ教育事業費として夫々金壹萬圓を寄附す。大正十四年十月二十四日勅定の緒綬褒章を賜ふの光榮に浴したるは、この發行を嗣彰せられたるによるものなり。

氏は父祖の血を繼ぎ幼にして英邁、小學時代よりすでに俊才の譽れ高く、中學に進むや特に英語に長じ、また音樂を愛好するに至り、就中その經濟は學友間に定評あり、かつて英國人教師、英國國歌を唱ひ得る者ありやと促したるに、全級數一人としてこれに應ぜんとする者なかりし中にありて、忽然氏は學友の眼線を浴びて起ち、堂々明快なる發音と正確なる節奏を以て、英國國歌を高唱し、英國人教師を感激せしめ、感謝の辭を連呼せしめたりといふ、氏の英語に堪能なりしと音樂に長じたるを證するに足るものにして、今なほ當時の學友間における逸話たり。

優秀なる成績をもつて中學校を卒業するや、先考の厳訓を志し東京商科大學に受驗し、競爭極めて激甚なる難關を突破して、堂々入學の榮冠を獲得す。關東弦々學業に勵み、父君に劣らず卓拔せる成績を擧げ、大いに其の將來を待期せられしが、不幸學業未だ全からざるに先だちて、徴兵猶下騒擾に罹り、醫術を盡して治療せしも、遂に衆人の力及ばず、昭和二年一月二十四歳にして逝く。結實を見ずして夢なくも散りたる純情の花にも比すべく、可惜英才を天折せしめたるは惜しみてもなほ餘りありと謂ふべし。

氏生前一論文を成すあり「我をして宰相たらしめば」と題す。その内容勞資協調を強調し、資本家の資金萬能主義を排撃し、勞働者の靴俏浮薄なる闘爭を戒しめたるものにして、氏がすでに一家見を有し、將來を期するところありたるを知るに足るべし。

當主八十島親義氏は氏の令弟にして、親徳氏の三男たり、明治四十年十一月の出生、昭和二年逝之氏の亡跡を繼ぎて家督を相續、昭和六年慶應大學經濟科の出身、第一銀行社員たり。

平野十三氏

損失たるを失はざりき。

誠之氏慈父の急逝に遭ふや、その遺志を伸べて大正九年六月東京市、東京商科大學友父祖の故山宇和島市へ教育事業費として夫々金壹萬圓を寄附す。大正十四年十月二十四日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴したるは、この善行を顯彰せられたるによるものなり。

氏は父祖の血を繼ぎ幼にして英邁、小學時代よりすでに俊才の譽れ高く、中學に進むや特に英語に長じ、また音樂を愛好するに至り、就中その聲樂は學友間に定評あり、かつて英國人教師、英國國歌を唱ひ得る者ありやと促したるに、全級誰一人としてこれに應ぜんとする者なかりし中にありて、忽然氏は學友の視線を浴びて起ち、堂々明快なる發音と正確なる調律を以て、英國國歌を高唱し、英國人教師を感激せしめ、感嘆の辭を連呼せしめたりといふ、氏の英語に堪能なりしと音樂に長じたるを證するに足るものにして、今なほ當時の學友間における逸話の逸話たり。

優秀なる成績をもつて中學校を卒業するや、先考の母校を志し東京商科大學に受驗し、競爭極めて激甚なる難關を突破して、堂々入學の榮冠を獲得す。爾來孜々學業に勵み、父君に劣らず卓抜せる成績を擧げ、大いに其の將來を待期せられしが、不幸學業未だ全からざるに先だちて、槇隔膜下腦炎に罹り、醫術を盡して治療せしも、惜英才を夭折せしめたるは惜しみてもなほ餘りありと謂ふべし。

氏生前一論文を成すあり「我をして宰相たらしめば」と題す。その内容勞資協調を强調し、資本家の黄金萬能主義を排撃し、勞働者の輕佻浮薄なる闘爭を戒しめたるものにして、氏がすでに一家見を有し、將來を期するところありたるを知るに足るべし。

當主八十島親義氏は氏の令弟にして、親徳氏の三男たり、明治四十年十一月の出生、昭和二年誠之氏の亡勝を繼ぎて家督を相續。昭和六年慶應大學經濟科の出身。第一銀行社員たり。

緑綬褒章受賞者

平野十三氏

住所　岩手縣和賀郡黒澤尻町一七九
事務場　岩手縣和賀郡岩崎村地内
事業所　岩手縣和賀郡黒澤尻町一七九

明治十三年十月三日生

幼にして其の環境に寡まること薄く、しかも克く悲運と艱苦に耐へて挫折せず、不屈不撓の精神を續けて初學を貫徹せるわが平野十三氏のごときは、浮薄軽佻に流れ勝ちすれば非常時局の翻弄を缺き、建設放逸にして馴かも自らを省みることなき、一部青少年徒輩を訓戒するに、最も適切なる活資料たり。

氏の當時の足跡は到底涙なくしては、これを讀みるを得ず、血涙もて綴られた氏の過去は、幸ひにして今日の成名を以て償ひ得るものありと雖も、今日を成すに至る刻苦勤勉の努力は到底凡庸の企及し能はざると、氏こそ眞實の立志傳を飾るに足る偉材にして、波瀾曲折を極めたる氏の人生行路は、また一篇の名創作を、成すの素材たり。

氏は岩手縣和賀郡黒澤尻町の出身。幼にして進取の氣に富み、果敢の眞あり、學業また優秀にして同僚朋輩のむかきに至れり。

初等教育を中途にして廢するのやむなきに至る悲運は、幼にして父母を喪ふの不幸にも比すべく、無情の運命は氏の人生第一歩を誤まり。

學業と牧畜は宛備せる教育機關に就きて獲ふを最も便とするも、また現場以て實地を研鑽するの途なかるべからず、半途小學校を退きたる氏は、深く意に決するところあり、細口の資を得るに不斷の努力を投ずる傍ら、餘暇を得し、知識の涵養と心身の鍛錬を怠らざりき。

明治三十四年氏滿く二十歳にして岩手縣和賀郡湯田村寺之巣金山に鉱夫たり。實に氏が將來鉱業を以つて従業と爲其の基の眞價を把握し得るものにあらず。金山にみける鉱業また容易の業たらず。粗食に甘んじ鉱業の時を創き、鉄鉱一個の至誠をもつて遂に服する者にして、はじめて頭角を現はし衆に關めらるゝものなり。

氏同金山に勤務すること實に十數年。大正六年辭して去る。すでに氏に期するところありたればなり。爾ふ十數年間にわたる血汗とともにありて眼ふことを知らざりし辛酸と優勝の經驗は、率手たる自信となりて獨立自營の確信を得せしめたるものにして、しかも氏が實ちに鉱業を創業せずして、自重以て時機を待つに慎重なりし態度は、氏の經營方針を物語るに足るもの。

特筆して好績を擧ふること實に、遂に大正十二年五月岩手縣和賀郡岩崎村に於て石膏採鉱業を創始す。斯業たるや普通の営業を以てすれば鉱鉱業、石炭鉱業等に比して小規模を想像せしむるものあるも、其の使命の重大な鉱脈において最して他鉱工業と甚等あるにあらず、其の經營また非凡の才能を要するものにして、鉱業界多年の經驗に加ふるに特殊の技術と識見を有するものにあらざれば、到底事業の成功を成就し得ざるを過例となす。氏が今日の盛業を築ち得たるは氏の卓越せる技術的才能と、經營管理を第一主義となす實業家的手腕に秀でたるに因ると雖も、過去十數年間常乙黒金山において練成したる貴き體驗の賜たるを失はず、氏にとの刻苦の體驗なかりせば直ひは今日の大を成し得ざりしやも保し難し。

業經營よ業團に豊績甚々仲間を率手や、氏は業務の餘暇を割まて社會公共に奉ぜんことを期し、先づ推されて昭和四年四月黒澤尻町々會議員たり。町治の伸張に貢し諸施設の擴充整備に、教育の振興に、産業の開發に寄與すること十年に垂んとせしが、昭和十三年四月病を得るに及んで遂に辭す。町會議員時に在ること九ケ年其の功績卓しきものあり、町を擧げて氏の再起を待望しつつあるは宜べなりと謂ふべし。

氏はまた私財を投じて社會公共に奉ぜんとするところ夥から手、昭和八年十一月黒澤尻町育英基金として金壹萬圓を寄附したるほか、昭和十二年七月以降チエ夫人と連名にて陸海軍への献金貳萬壹千圓に上り、さらに同十四年四月和賀郡育英資金として金五千圓を寄附する等奇特の善行多き中に、昭和九年四月黒澤尻町育英基金として金壹萬圓を寄附し嚴に依り、同十四年四月十三日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

なほ教育勅語煥發五十年に際しては、教育事業に盡瘁せし嚴に依り、表彰せらるゝの光榮に浴したり。

濱田三郎氏

氏其の業の眞髓を把握し得るものにあらず。金山における就業また容易の業たらず、粗食に甘んじ銃牀の時を制き、表裏一體の至誠をもつて業に服する者にして、はじめて頭角を現はし衆に認めらるゝものなり。

氏同金山に勤務すること實に十數年、大正六年辭して去る、すでに氏に期するところありたればなり。數年間にわたる血汗とともにありて想ふことを知らざりし研鑽と體驗の連續は、牢乎たる自信となり獨立自營の確信を得せしめたるものにして、しかも氏が直ちに鑛業を創業せずして、自重以て時機を待つに愼重なりし態度は、氏の建實方針を物語るに足るもの。

待機して好機を覗ふこと數年、遂に大正十二年五月岩手縣和賀郡岩崎村に於て石膏採掘鑛業を創始す。斯業たるや普通の常識を以てすれば鑛業、石油鑛業等に比して小規模を想像せしむるものあるも、其の使命の重大な經驗に加ふるに特殊の技術と識見を有するものにあらされば、到底事業の伸張を成就し得ざるを通例となす。氏が今日の盛業を贏ち得たるは氏の卓拔せる技術家的才能と、穩健着實を第一主義となす實業家的手腕に秀でたるに因ると雖も、過去十數年間驚之巢金山において集積したる貴き體驗の賜たるを失はず、氏にこの刻苦の體驗なかりせば或ひは今日の大を成し得さりしやも保し難し。

業礎愈よ鞏固に業績益々伸展を來すや、氏は業務の餘暇を割きて社會公共に奉ぜんことを期し、先づ推されて町會議員たり。町治の伸張に資し諸施設の擴充整備に、敎育の振興に、産業の開發に寄與すること十年に垂んとせしが、昭和十三年四月病を得るに及んで遂に辭す。町會議員職に在ること九ケ年其の功績輝しきものあり、町を擧げて氏の再起を特望しつつあるは宜べなりと謂ふべし。

氏はまた私財を投じて社會公共に裨益するところ尠からず、昭和八年十一月黒澤尻町育英基金として金壹萬圓を寄附したるほか、昭和十二年七月以降チエ夫人と連名にて陸海軍への獻金貳萬壹千圓に上り、さらに同十四年四月和賀郡育英資金として金五千圓を寄附する峰奇特の善行多き中に、昭和九年四月黒澤尻町育英基金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十四年四月十三日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴したり。

なほ敎育勅語壽境盃五十年に際しては、敎育事業に盡瘁せし廉に依り、表彰せらるゝの光榮に浴したり。

熱海市参与員、同市学園組同、静岡県方面委員、同司法保護
委員、伊豆山温泉旅館組合長、相模屋主人、故勲徳

紺綬褒章受賞者

濱田三郎氏

明治二十二年十一月二十二日生
静岡県熱海市伊豆山六〇一

氏は静岡県人、静岡県熱海市伊豆山に生る。濱田家は熱海市伊豆山草創當時より連綿たる舊家にして、當主三郎氏を以て七三代となす。代々温泉旅館相續人を輩出して夙に盛名あり。一族に知名の士多し。杉村楚人冠氏は三郎氏の義兄なり。

氏父祖の業を繼ぎ相模屋主人として精勵努りなく、ますます家門の榮光あらしむると共に、常に伊豆山の發展伸張に意を用ひ、其の治績歴々からず。徳望自ら備はり現に伊豆山温泉旅館組合長たり。

温泉郷伊豆山の發達また偉多の曲折あるも、古くも床しき傳統の体力により、今なほ全國に冠絶するものあり。しかも近代文化の進展に伴ひ、漸次面影を一新し、清新なる風光に接せられて、文化施設の充備を見たるは、地元有志の不斷の努力に因ること論を俟たざるも、濱田三郎氏の如き人物の存在するありて、愛鄉の熱意と公共的精神を發揚して、協力すところなかりし能はなりと謂ふべし。

今や熱海は市制を實施するの光榮を荷ぐ。その全盛なる發展の裏面には幾多の功勞者ありと雖も、わが濱田三郎氏を以て第一人者となすに吝かならず。熱海市創施行副委員長として真奔西走せし氏の活躍は、熱海市長の絲生氏れんとして得べからざるものなるべし。

氏は常に温泉旅館業者の一人として地方發展に誠實の精魂を投ずるのみならず、夙に擧されて熱海市參與員、静岡青年會議員、静岡縣方面委員、同司法保護委員たり。教育の振興に、青年の指導に、慈善の事業に卒先身を挺して社會の進運に奔命する至誠の發露は、まさに衆望の標徴となすに足る。

氏は社會公共に奉ずるの念厚く、數神社組の念に富み、熱心に關東大震災の直後關社伊豆山神社の復興のことあるや復興委員長たり、また同社昇格期成會長として奔走し、同社復興事業の完成と同時に、國幣小社に昇格せしめ、同社遷宮に際しては遷宮委員長を依嘱され、同社附屬伊豆山信徒講社副社長を委ねるに至る。

私財を投じたる幾部に至りては枚挙に遑あらざるも、其の顯多額に上るもののみを擧ぐるも、なほ左の通り多きに上る。

大正十一年四月より昭和十二年に至る間において伊豆山神社へ寄進せし淨財の額壹萬參千圓に上り、これよりさき大正八年十二月熱海町立熱海尋常高等小學校增築費として金壹千圓を寄附せしを初めとして、昭和三年九月日本赤十字社へ金壹千圓、同八年八月伊豆山温泉先覺碑社費寄附として金壹千圓、同十二年四月帝國軍人後援會へ金六百圓、同十三年四月熱海市役場より伊豆海岸遊歩道開拓工事費として金壹千圓、同年七月帝國飛行協會静岡地方本部へ金壹千圓、同年九月伊豆山神社へ金壹萬圓、同十五年五月財團法人結核豫防協會静岡支部へ金壹千圓、同七年六月伊豆山温泉協會島境防護洋工事費として金壹千圓、同年十月軍人援護事業費として金壹萬圓をそれぞれ寄附せしほか、昭和十二年より伊豆山信徒講社會館新築工事費の寄附をなし、すでにその額壹萬八千餘圓に達す。更に一般公共事業への小額寄附は、また壹萬數百圓に上れり。

これらの善行により表彰受賞の光榮に浴したること、また枚挙に遑あらざるも、その主なるものを挙ぐれば左の如し。

昭和三年十一月數神組織の變により、同四年一月日本赤十字社より、同年四月ならびに同八年二月には數神組織神社奉仕の功勞により、同十四年市制實施の功勞により、同十五年九月三度數神組織神社奉仕の功勞により、同年十月軍人援護事業の功勞により、それぞれ表彰せられ受賞したるほか、同年十一月大日本飛行協會總裁宮殿下より表彰狀を賜ふの光榮に浴す。

銃中昭和十四年七月十七日勅定の紺綬褒章を賜ひ、淨財寄附の奇特の行爲を表彰せらるるの光榮に浴したるはたゞに氏の光榮たるのみならず、由緒正しき濱田家二門の榮光たるを失はず。

温泉旅館の業は概ね遊覽保養の人士を迎ふるを通例とせしが、戰時日本にありては、また別個の重大使命を負擔するに至れり。即ち戰線の第一線にありて戰傷榮轉を負ひ、あるひはまた病に倒れたる傷痍軍人の餘後保養所たるの重責を有す。温泉郷と雖も敏感たる自戒と自省を必要となすに至りし今、氏の如き時局の認識を誤らず、國家に奉ずるの熱意に燃ゆる士が、卒先同業を指導鞭撻して新たなる使命の遂行に遺憾なきを期しつつあるは幸ひなり。

氏が新たなる企畫のもとに更に温泉鄉熱海をして再飛躍せしむるの日近きを期待してやまず。

土地家屋貸付業

紺綬褒章受賞者

橘 與一氏

明治十一年二月七日生

大阪市住吉區南田邊東之町五ノ三九

略歴

氏は三島郡吹田町木下直三郎氏の二男として生れ中學校を卒業するや田邊町の地主として富豪として同地方は素より大阪市内にまで、其の名を轟ろかしたる橘家に入つて養子となり、明治三十九年十二月家督を相續し、同四十一年七月京都帝國大學法科大學を卒業す。

氏は公共慈善の念に富み、諸種の社會事業、教育事業等に率先自ら資を投じて盡力するところ尠くなからず、その德望は一町の仰慕するところとなり。後大正九年十二月、其の德望は遂に町民の熱誠なる要望によつて田邊町長に選任されたり。在職中町の福祉のため日夜を擧げて精勵努力し、教育設備、道路改築、衞生設備、其の他諸種の町治に貢獻したる功績枚擧に遑あらず。

氏が屆任の田邊町を發展繁榮せしめんとする熱心は異常のものにして、新たに家屋を建築せんが爲に土地の借入を申込むものあれば低廉なる地代を以て之を貸し與へ、道路及び下水溝等の設備は自ら進んで完全なるものを作り借地者をして直接建築費以上の負擔無からしむるに務めたり。その結果借地者は益々增加し、住宅の建築が續々として現はるゝと共に之に伴つて小商店の建築となり、數年ならずして田邊町は異數の盛觀を呈するに至れり。

而して大正十三年頃大阪市に隣接町村を編入して大大阪市を建設せんとの議起るや、氏は田邊町將來の發展のために有利なることを認めて、之が實現に盡力せり。大正十四年四月、編入の實現を見るに至つて町長の職を退き、其の後は擧されて住吉區敎化委員となり、現在に至る。

夙に公共の念厚く、氏はその編入實施前大正十四年三月二十三日、その町長たりし置土產として、當時の大阪府東成郡田邊等尋常小學校就學資金として、金一萬五千圓を寄附せし廉により、同年十月廿四日勅定の紺綬褒章を賜ふ。

さき大正八年十二月熱海町立熱海尋常高等小學校增築費として金壹千圓を寄附せしを初めとして、昭和三年九月日本赤十字社へ金壹千圓、同八年八月伊豆山溫泉走湯神社建築費として金壹千圓、同十二年四月帝國軍人後援會岡地方本部へ金壹千圓、同年九月伊豆山神社へ金壹萬圓、同十五年五月財團法人結核豫防協會靜岡支部へ金壹千圓、同年六月伊豆山溫泉場海岸堤防護岸工事費として金壹千圓、同年十月軍人援護事業資金として金壹萬圓をそれぞれ寄附せしほか、昭和十二年より伊豆山須自動車道路開鑿工事費の繼續寄附をなし、すでにその額壹萬八千餘圓に達す。更に一般公共事業への小額寄附は、また壹萬數百圓に上れり。

これらの善行により表彰受賞の光榮に浴したること、また枚擧に遑あらざるも、その主なるものを擧ぐれば左の如し。

昭和三年十一月敬神崇祖の廉により、同四年一月日本赤十字社より、同年四月ならびに同八年二月には敬神崇祖神社奉仕の功勞により、同十四年市制實施の功勞により、同十五年九月三度敬神崇祖神社奉仕の功勞により、同年十月軍人援護事業の功勞により、それぞれ表彰せられ受賞したるほか、同年十一月大日本飛行協會總裁宮殿下より表彰狀を賜ふの光榮に浴す。

就中昭和十四年七月十七日勅定の紺綬褒章を賜ひ、淨財寄附の奇特の行爲を表彰せらるるの光榮に浴したるはたゞに氏の光榮たるのみならず、由緒正しき濱田家一門の榮光たるを失はず。

溫泉旅館の業は概ね遊覽保養の人士を迎ふるを通例とせしが、戰時日本にありては、また別個の重大使命を負擔するに至れり。卽ち戰線の第一線にありて戰傷榮譽を負ひ、あるひはまた病に倒れたる傷痍軍人の餘後保養所國家に奉ずるの熱意に燃ゆる士が、率先同業を指導鞭撻して新たなる使命の遂行に遺憾なきを期しつつあるは幸ひなり。

氏が新たなる企畫のもとに更に溫泉鄕熱海をして再飛躍せしむるの日近きを期待してやまず。

株式會社日和商會取締役社長、貿易商

紺綬褒章受賞者

小畠元三郎氏

明治二年六月七日生

大阪市西區江戸堀南通一丁目四四番地

略歴

抑々小畠家は遠祖清原武創に出づ。武則出羽に在りて、源頼義安倍貞任を討伐するに方り、招かれて戦功あり、鎮守府將軍に任ぜらる。武則の子武衡、寛治五年、永後三年之役に戦死す。其の子武圀父の死に遭ひ、幼少なりしを以て丹波國船井郡に遁れ始めて小畠姓を名乗り、八郎と稱す。是小畠家の始祖なり。其後代々を經て守隆建武の亂に南朝に從ひ、泉州堺にて戦死す。守隆より十二世を經て正明に至る。正明、太郎兵衛と稱し、船井郡の領主伊勢守吉親に仕へ、其の子正俊參州吉田城主松平伊豆守に從ひ、船井郡摩氣村大字宍人に住す。それより數世を經て龜右衛門に至り、丹羽國多紀郡雲部村西本庄に歸農し、地主農として庄屋役を勤め、苗字帶刀を許さる。龜右衛門文化三年十月卒す。其の子庄右衛門より又兵衛、正左衛門、正治郎を經て、先代政助に至れり。

氏は政助氏の愛兒として明治二年六月七日を以て生る。資性聰敏頴悟、同十七年家督を相續す。同廿三年大阪市立高等商業學校を卒業後東都に出で、煙草製造並に輸入商木村商店に入り支配人として敏腕を揮ふ。同廿九年米國に赴き、主要都市の商工業を視察して歸る。同卅三年煙草業村井兄弟商會に入り、東京工場長に擧げらる。後煙草專賣法實施に因り、同商會の解散と共に閑地に就き、其の間支那大陸を巡遊し、各地の商業を視察す。明治卅八年大阪に於て日和商會を設立し、主として卷煙草用紙、竹パイプ、紙吸口、洋紙等の輸出入を營み、その取引は主として支那を覇者とす。當時恁かる特殊の品目を取扱ふものは寡少にして、氏は此の方面の第一人者を以て稱せられ、業界に重きを爲す。昭和三年株式會社に組織を改め、爾來業勢益々隆々として今日に至れり。現時日印協會評議員たる外、大阪貿易協會其の他十餘の業務關係團體、大阪倶樂部、清交社、交詢社等の社員たり。

茲に日本赤十字社大阪支部へ金一萬圓を寄附し、大正十五年勅定の紺綬褒章を、後又同病院へ金一萬圓を寄附し、昭和五年同飾版を下賜せらるゝの光榮を擔ひたる外、軍人後援會等に私財を投じ、又忠勇顯彰會幹事、日本赤十字社、日本海員掖濟會、帝國軍人後援會、海軍協會各有功社員として盡瘁する所頗る大なり。

元貴族院議員

紺綬褒章受賞者

故　從五位勳四等　**岡谷惣助氏**

嘉永四年二月七日生

株式會社岡谷商店社長、日本貯蓄銀行頭取、日本商工會議所、名古屋商工會議所各議員、愛知縣聯合青年團副團長

紺綬褒章受賞者

從七位　**岡谷惣助氏**

明治二十年八月十九日生

住所　名古屋市中區經子町五〇

營業所　名古屋市中區錦町一

略歴

岡谷家は代々笹屋と號し鋼線商を營み、寛文九年創業以來

岡谷惣助

故　従五位勲四等　岡谷惣助氏

嘉永四年二月七日生

緑綬褒章受賞者

株式会社岡谷商店社長、日本貯蓄銀行頭取、
日本商工會議所、名古屋商工會議所各議員、
愛知銀聯合青年團副團長

緑綬褒章受賞者

従七位　岡谷惣助氏

明治二十年八月十九日生

住所　名古屋市中區經子町五〇

會議所　名古屋市中區廣小路町一

略歴

岡谷家は代々笹屋と號し綿織商を營み、寛文九年創業以來二百數十年に及ぶ。尾張藩侯より上士を以て遇せられたる家柄なり。先代故岡谷惣助氏實業界に身を投じ、中京財界の重鎮として重仰され、商工業の發展に寄與したるところ偉大なるものあり。就中七寶製作事業の研鑽に於きては其の功績顯著なるものあり、七寶陶器今日の聲價あるは氏に負ふところ大なり。明治二十九年十二月十九日勅定の緑綬褒章を賜ひ、其の功勞を顯彰されたるは宜べなりと謂ふべし。

當主惣助氏は先代惣助氏の長男、大正十五年一月家督を相續して家業を繼ぎ、岡谷合資會社、岡谷保險合名會社を主宰する傍ら、中京財界に進出雄飛して大正元年以來名古屋商工會議所議員に列し、商業部長として活躍、昭和二年同副會頭に推され、同八年遂に同會頭の重職につき、中京實業界の第一線に立つて克く其の伸張發展に務め、今や日本商工會議所並に名古屋商工會議所顧問として、戰時經濟の確立に國家的使命を遂行しつつあり。氏の機に參與する諸會社は多數多岐にわかれ枚擧に遑あらざるも、現に岡谷商店社長、日本貯蓄銀行頭取、其の他の重役として中京財界の巨頭たるを失はず。先代惣助氏の輝しき足跡を其の儘に、父名を恥しめず只管直進しつつあり。氏はまた公共事業に盡瘁するところ頗る多く、夙に赤十字社有功社員、日本海員掖濟會特別會員たりしが、大正十二年關東震火災救援費として金壹萬圓寄附の廉に依り、昭和四年十月二十三日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴し、昭和二年若宮八幡社改築費として金壹萬圓寄附の廉により同五年六月七日勅定の緑綬褒章飾版壹個を、更に同六年五月名古屋公會堂建築資金として金壹萬圓寄附の廉に依り同飾版壹個を、昭和十二年十一月熱田神宮奉贊會事業費として金壹萬圓寄附の廉に依り同十四年五月八日同飾版壹個を賜ふの光榮を重ねしが、其の後に於ける寄附また多額にして其の額三十數萬圓に上れり。寄特の士多しと雖も、氏の如きは又稀れなり。

都市の商工業を視察して歸る。同卅三年煙草業村井兄弟商會に入り、東京工場長に擧げらる。後煙草專賣法實施に因り、同商會の解散と共に閑地に就き、其の間支那大陸を巡遊し、各地の商業を視察す。明治卅八年大阪に於て日和商會を設立し、主として卷煙草用錫紙、竹パイプ、紙巻口、洋紙等の輸出入を營み、その取引は主として支那を舞臺とす。當時尨かる特殊の品目を取扱ふものは其れ稀にして、氏は此の方面の第一人者を以て稱せられ、業界に重きを爲す。昭和三年株式會社に組織を改め、爾來業勢益々隆々として今日に至れり。現時日印協會評議員たる外、大阪貿易協會其の他十餘の業務關係關體、大政倶樂部、清交社、交詢社等の社員たり。

嚢に日本赤十字社大阪支部へ金一萬圓を寄附し、大正十五年勅定の緑綬褒章を、後又同病院へ金二萬圓を寄附し、昭和五年同飾版を下賜せらるゝの光榮を擔ひたる外、軍人後援會等に私財を致し、又忠勇顯彰會幹事、日本赤十字社、日本海員掖濟會、帝國軍人後援會、海軍協會各有功社員として盡瘁する所頗る大なり。

ケーアル護謨、金剛山ゴム各株式會社々長、平野炭酸瓦斯、龍野電鉄各株式會社監査役

緒綬褒章受賞者

淺井柳三氏

明治十八年四月廿四日生
大阪市北區堂島濱通二丁目四番地

略歴

夙に商業を以て身を立てんことを志し、年少僅に十三歳にして兩親の膝下を離れ、大阪に出でゝゴム製品商店に入り、艱苦精勵すること十餘年、後獨立して其の運命を開拓し、遂にゴム工業界に名を成し、之が一方の雄たるに至れる淺井柳三氏の半生は、立志傳中の一頁を飾るに足るものあり。茲に後進子弟の範として、推賞に値する人材と言ふべし。

淺井家は岐阜縣羽島郡に於て、父祖の代より農業を營む。氏は利作氏の三男として、明治十八年四月二十四日を以て生る。十三歳の時大阪に出で、東區淺路町のゴム製品、玩具類商として名ある吉川專助氏の店舗に入り、十年一日の如く、精勵恪勤克く店務に努め、廿六歳の時に至るや、獨立して大阪市北區東野田一丁目三十番地に工場を設置し、ゴム風船、ゴム靴業創の製造を開始す。爾來拮据經營、幾度か廢業の危機を加ふると共に、人力車のゴム輪、自轉車荷車のタイヤ等を製作するに至り、大正九年二月組織を變更して、資本金二十五萬圓全額拂込のケーアル護謨株式會社を創立、自ら取締役社長として經營の衝に當り、其の生産品にして共同販賣會社へ納入する額のみにても年額六拾萬圓内外に及び、業績隆々として今日に至れり。其の他金剛山ゴム會社々長たる外、平野炭酸瓦斯、龍野電鉄各會社監査役として重きを爲し、又曩に大阪ゴム工業組合理事長及び日本ゴム工業組合聯合會副理事長として、ゴム工業界に多大の貢獻を致せり。

氏は實に其の事業に忠實勤誠にして、業界に竭す所鈔からざるのみならず、國家奉公の念顧る厚く、去る昭和二年より同九年まで櫻宮神社氏子惣代、同四年より同九年まで大阪府櫻宮方面委員並に櫻宮小學校教育會委員として多大の努力を致し、昭和十四年十二月には、日本赤十字社大阪支部事業費として、金一萬圓を寄附したる廉により、同十五年六月一日勅定の緒綬褒章下賜の光榮を擔へり。

家庭にはきぬ夫人との間に、四男一女あり。夫人は溫良貞淑の聞え高く、愛國婦人會、國防婦人會に在りて、銃後に盡しつゝあり。夫妻相並びて公に率ずること斯くの如きは、當代稀にみる所にして、隣人の景仰を享けつゝある、洵に所以無しとせず。

名古屋商工會議所議員、岡本工業株式會社々長、株式會社シヤ忠ホテル取締役社長、納屋商事株式會社取締役、鳥羽繊維株式會社相談役、日本檢出自動車販賣、田川商會、蹊田商會各株式會社監査役

緒綬褒章受賞者

岡本松造氏

明治九年三月三日生
名古屋市昭和區御器所町大字地村五番地

略歴

緑綬褒章受賞者

岡本松造氏

明治九年三月三日生

名古屋市昭和區御器所町大字地村五番地

名古屋商工會議所議員、岡本工業株式會社々長、株式會社シナ忠ホテル取締役社長、樹原商事株式會社取締役、旭製械株式會社相談役、日本輸出自動車販賣、田川商會、藏田商會各株式會社監査役

略歴

多年獨創の考案に係る自轉車の製作に從事し、年産額實に十數萬臺に上り、其の品質に於て、將又、其の製造能力に於て、本邦第一位を示し、更に飛行機部分品、兵器の製作に從事し、其の製品の優秀なるを認められて、陸海軍指定工場たるの榮譽を獲得し、今や業界に於て、恰も富嶽の群峰を拔いて聳立するが如く、盛名國内を壓するの概あるもの、之を岡本工業株式會社と爲す。

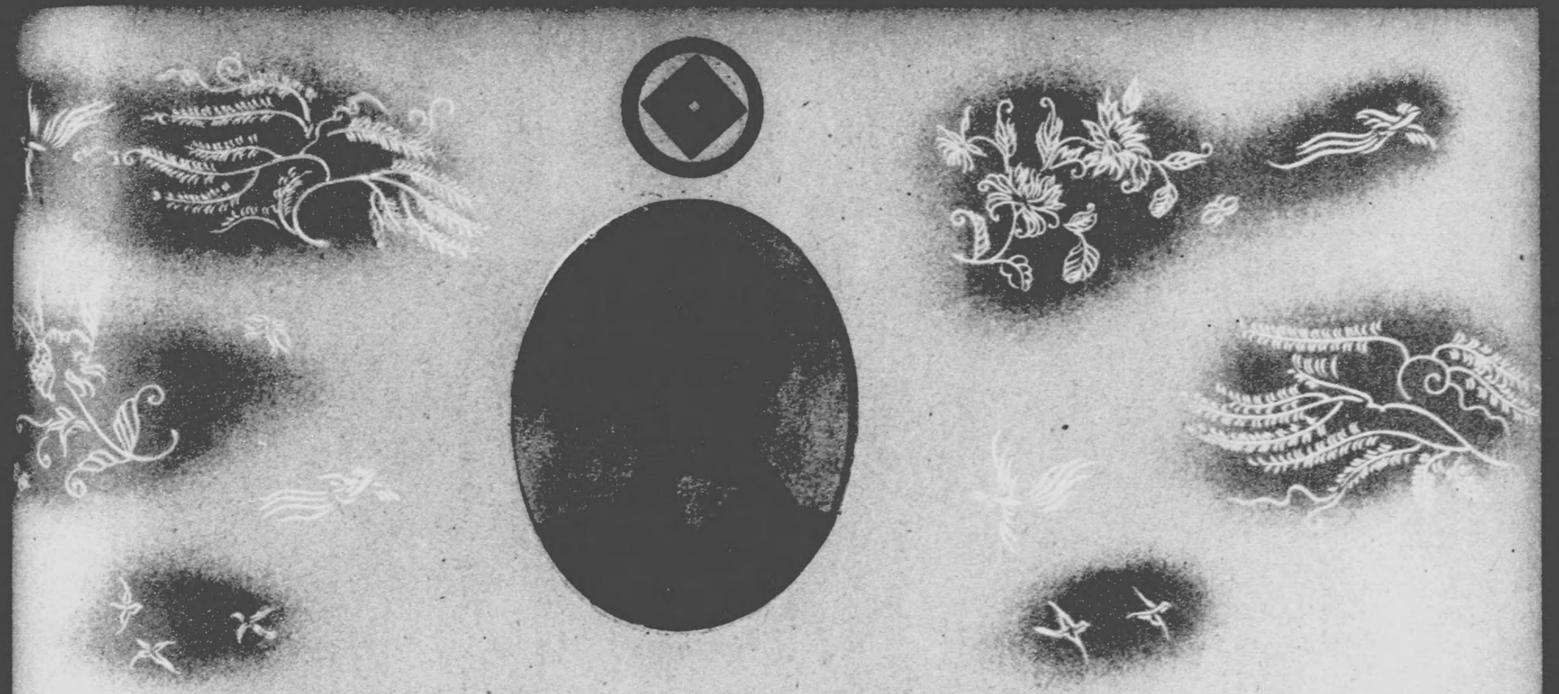
當社の經營者にして社長たる岡本松造氏は、明治九年三月三日を以て、奈良縣磯城郡上之鄕村に、先代半四郎氏の長男として生る。夙に鄕黨に普通學の課程を終了したる後、直に家業に於て機工業を營み、後明治三十一年名古屋市に移住して、建築用金具製造を開始し、翌三十二年更に自轉車部分品の製造に着手し、同卅五年に至り、自轉車部分品の製作より出發して得たる獨創の考案に成る優良なる自轉車を完成す。同四十二年歐洲に渡航し、各國の諸工場を歷訪して、實地を研究歸朝するや、爾來工場設備の改良を圖り、製作極に改善されたる製品は、滿天下の耳目を聳動し、岡本式自轉車の名聲全國を風靡するに至れり。爾くて大正八年株式會社岡本自轉車製作所を創設、又岡本航空機株式會社を起して、飛行機部分品の製作を開始したるが、後之を合併し、千三百萬圓の巨資を擁する岡本工業株式會社を創設して自ら其の社長となり、之を主宰する外、前記各會社の重役として、中京の事業界に君臨するに至れり。又大正五年七月貿易品共進會委員を囑託せられたるを始め、名古屋勤業協會理事、名古屋自轉車組合名譽會長、商事調停委員、愛知縣工場評議員、其の他各種の公職に推され、盡瘁する所極めて大なり。

昭和二年十一月、天皇陛下御軍特別大演習御統監として愛知縣に行幸遊ばされたる御砌、工業功勞者として拜謁を賜り、又同三年十一月十七日、實業に精勵し業民の模範たるべき故を以て、勅定の緑綬褒章下賜の光榮に浴せり。

して今日に至れり。其の他金剛山ゴム會社々長たる外、平野炭酸瓦斯、能勢電機各會社監査役として重きを爲し、又曩に大阪ゴム工業組合理事長及び日本ゴム工業組合聯合會副理事長として、ゴム工業界に多大の貢獻を致せり。

氏は實に其の事業に忠實熱誠にして、業界に竭す所鈔からざるのみならず、國家奉公の念頗る厚く、去る昭和二年より同九年まで櫻宮神社氏子總代、同四年より同九年まで大阪府櫻宮方面委員並に櫻宮小學校教育會委員として多大の努力を致し、昭和十四年十二月には、日本赤十字社大阪支部事業費として、金一萬圓を寄附したる廉により、同十五年六月一日勅定の緑綬褒章下賜の光榮を擔へり。

家庭にはきぬ夫人との間に、四男一女あり。夫人は溫良貞淑つゝあり。夫妻相並びて公に奉ずること斯くの如きは、當代稀にみる所にして、隣人の景仰を享けつゝある。洵に所以無しとせず。



元京都取引所理事長

褒賞受章

故 伊藤直四郎氏

慶應元年二月三日生
京都市上京區烏丸通下長者町上ル龜前町六〇

略歴

近江は、甲斐と東西相並んで、古來實業界に人物を輩出するを以て名あり。京阪地方に於ける豪商の出身地を調査するものは、滋賀縣人の多數なるに、何人も一驚を喫するなるべし。元京都取引所理事長たりし故伊藤直四郎氏の如き、亦同縣出身者中出色の人物たり。

氏の生家は、代々醫師所業に仕へ、滋賀縣滋賀郡膳所町大字中庄に居住す。慶應の後、先考官右衛門氏出でゝ京都に移り、北野神社の神官を勤むゝ氏は其の次男として、慶應元年二月三日膳所に生る。夙に商業に志し、傳手を求めて商人の業を習ひ、長ずるに及んで獨立店舗を開き、米穀株式仲買、其の他凡ゆる方面に觸手を伸ばす。委性溫厚にして而も商才に富み、健實の裡に經綸の機略を藏し、又頗る沈着にして、百折不撓の意氣を以て、指揮經營に當り、幾多の辛酸を嘗め浮沈を重ぬるも毫も其の志を屈せず。遂に克く成功の彼岸に達し、後京都取引所常務理事の重任を擔ひ、更に推されて理事長の椅子を占め、新界に多大の貢獻を致し、京都實界の大立物として、偉大なる存在を示したりき。

一面公共の念に厚く、各種の社會事業に寄し、之に私財を致せしこと尠からず。就中昭和二年六月、鄕黒なる滋賀縣膳所町の社會事業費として、金一萬圓を寄附したる縣により、其の功を錄せられ、同三年六月六日勅定の褒賞を下賜せられ、家門の榮譽を輝かせり。

斯の如く氏が各方面に力を致し、成功者として、又篤行家として稱へらるゝに至りたるは、素より其の天賦の英才と、國家奉公の念厚きに由る所なりと雖も、亦其の品行方正にして、玉の如き人格に加ふるに堅忍不拔、如何なる困難にも挫折せず、爲に多くの人々より絶大なる信用を得たるに由る所尠からず。昭和六年六十七歳を以て長逝せる洵に邦家の爲に惜むべく、又悼むべしと雖も、其の德行は永く後進子弟の模範たるに足るものありと言ふべし。

滿壽未亡人は京都の府人大原幸右衛門氏の二女、明治十四年十二月を以て生れ、氏に嫁するや溫良貞淑、內助の功頗る多く、賢夫人として其の譽高し。

林 圓 藏 氏

立物として、又多士濟々たる滋賀縣出身實業家中の第一人者として、偉大なる存在を示したりき。

一面公共の念に厚く、各種の社會事業に寄し、之に私財を致せしこと尠からず。就中昭和二年六月、鄕里なる滋賀縣當所町の社會事業費として、金一萬圓を寄附したる厚により、其の功を賞せられ、同三年六月六日勅定の紺綬褒章を下賜せられ、家門の榮譽を輝かせり。

斯の如く氏が各方面に力を致し、成功者として、又篤行家として稱へらるゝに至りたるは、素より其の天賦の英才と、國家奉公の念厚きに由る所なりと雖も、亦其の品行方正にして、玉の如き人格に加ふるに堅忍不拔、如何なる困難にも挫折せず、爲に多くの人々より絶大なる信用を得たるに由る所尠からず。昭和六年六十七歳を以て長逝せる洵に惜むべく、又悼むべしと雖も、其の德行は永く後進子弟の模範たるに足るものありと言ふべし。

滿壽未亡人は京都の府人大原嘉右衞門氏の二女、明治十四年十二月を以て生れ、氏に嫁するや温良貞淑、內助の功顯る多く、賢夫人として其の聞高し。

綠綬褒章受賞者

故從六位 林 國藏氏

弘化三年九月十日生
長野縣埴科郡平野村平野五二一

岡口銀行統轄大阪店々主

紺綬褒章受賞者

林 國藏氏

明治十六年四月五日生
住所 東京市牛込區市ヶ谷甲良二〇
勤務所 東京市日本橋區町宝四ノ三

故林國藏氏は先代倉太郎氏の長男。倉太郎氏夙に天保年間登録と稱する麻織を製造し京都、岐阜地方に販賣せり。これ實に信州生絲の國外移出の嚆矢たり。爾來斯業の將來を觀察洞察して、不斷の努力を投じて斯業の改良發展に餘念なく、其の功績偉大なるものありしが、明治十九年逝く。

先考の遺業を繼ぎたる故國藏氏は其の遺志を伸ぶるに專念し、父君在世中に創立したる同家にとり最初の機械製絲工場たる天龍製絲場を基礎として益大發化する傍ら、夙に明治十二年時恰も海外輸出は日進月歩の好況を示し、就中生絲の需給顯る有望なるに拘らず、開港者の製法區々にして一定の生絲を得る能く、當業を維守せんか海外貿易に一大悲觀を見んとするや、斯業の前途また暗澹たるものあるべきを憂慮し、自ら率先して共同荷造、檢査法を採用生絲品位の標準化と向上を期し開明社を創設、同十七年共同荷繰所をも設置、社長たること二十有餘年に及ぶ。斯くて明治四十二年事業上の都合により第一、第二工場を廢して專ら第三工場に全力を集注、釜數一千一百釜に及ぶに至りしも、大正六年事業の發展と監督化を計るため岡谷製絲會社と合併し、業界發展の基礎を確立せり。

氏は製絲業に專念する傍ら、明治二十四年東京市日本橋區馬喰町に絲商店を開設、同市淺草區八幡町に絲商製造所を設置し、絲器の輸入販賣の大志の達成に邁進せんことを期す。同二十九年絲商大製糸製造販賣の免許を得るや、店舗を日本橋區本銀町に移し業務の擴張を圖り、宮内省より特に絲商火熨一切の御用を命ぜられ、また諸官省の御用達を命ぜらる。同四十年陸軍省被服廠用繰業其の他火工部の製造を開始し、國内自給自足の大計を樹つるや、特に指定せられて充實擴きを命ぜられ内地及び滿鮮地方の發達、製絲、水力電氣事業工事に便すること多大なりき。大正七年に至るや北海道函館市に支店を開設、同十年更に滿見滿にも支店を設置、同十二年大阪に進出して同市西區京町堀通に支店を開設するや、同時に斯業一切の直接出入を開始して堅實なる營業方針のもと、着々事業の發展を遂げしめ今日の基礎を確立す。

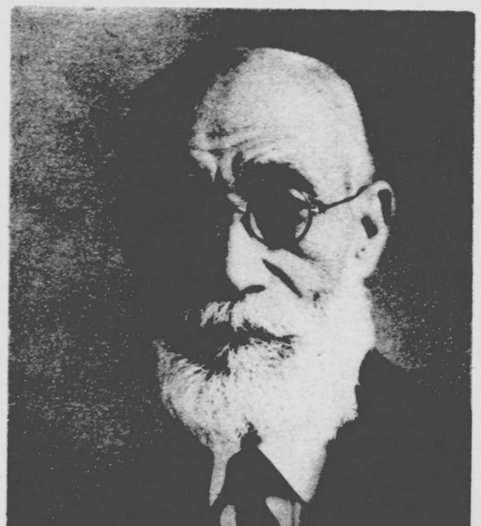
氏は夙生を通じて製絲の改善に盡瘁し、また絲商火熨製造販賣を發營して國家社會に貢獻せしのみならず、常に社會文化の發達に意を用ひ、岡谷郵便局の設置に、製絲業者絲料買入の合理化に、交通の發達に粉基するところ頗る少なからず、その功績顯著なるものあるに依り、明治二十四年早くも勅定の褒賞を賜ひ、其の功勞を顯彰せらるるの光榮に浴す。爾來受賞表彰の光榮に浴すること枚擧に遑あらざるも、明治四十年一月二十七日大日本蚕絲會第二回總會において總會伏見宮殿下より積年蚕業に盡瘁せる廉に依り表彰せられ金牌を授與せらる。

斯くの如く林家は倉太郎氏の創業を伸展せしめて國藏氏無上の榮譽を揚ふに至りしが、また地方の名家として四隣の景仰厚く、大正二年二月埼玉縣下において騎兵幹部演習挙行さるゝに際し竹田宮殿下には同家の深谷住宅に御駐泊遊ばされ、同年十一月の大演習には久邇宮殿下、同大正十一年九月陸軍大學々生演習に伏拳王世鋼殿下御駐泊遊ばさる。林家の榮光洵に燦然たるものありと謂ふべし。

當主國藏氏は長野縣人宮澤直助氏の令弟、明治四十四年先代國藏氏の養子となる。

氏は夙に早稲田大學商科に學び、明治四十一年同校を卒業するや夏に研鑽を重ねて社會への進出を待ちしが、林家の養嗣子となるや、克く先代國藏氏を扶けて製絲業ならびに偉大なる發業たる絲商火熨製造販賣の發展に精勵して息まず、先代の卓抜せる識見と多年にわたる經驗に加ふるに、氏の新鮮なる新時代の學識を以て營業企劃の障害を時代に適應せしめ、改善伸展の方法を誤らしめざりき。明治の末葉より同家の經營事業が頓みに良好なる商勢をなし、業容また大いに擴大せしは、氏の父君を輔翼するの途よろしきを得たるためなり。

先代國藏氏の功績はすでに略述せるところによりてあきらかなるも、養父の遺志を繼ぎたる氏もまた社會公共に奉ずるの念厚く、其の奇特の行爲多き中に、就中長野商業學校へ金壹萬圓を寄附せし廉に依り、昭和二年二月三日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の篤行を表彰せらるゝの光榮に浴す。



吉岡美國氏

なりき。大正七年に至るや北海道函館市に支店を開設、同十年更に岩見澤にも支店を設置、同十二年大阪に進出して同市西區京町堀通に支店を開設するや、同時に新業一切の直輸出入を開始して堅實なる營業方針のもと、着々事業の發展を遂げしめ今日の業礎を確立す。

氏は終生を通じて製絲の改善に盡瘁し、また銃砲火藥製造販賣を兼營して國家社會に貢獻せしのみならず、常に社會文化の發達に意を用ひ、岡谷郵便局の設置に、製絲業者燃料買入の合理化に、交通の發達に稗益するところ尠少ならず、その功績顯著なるものあるに依り、明治二十四年早くも勅定の緑綬褒章を賜ひ、其の功勞を顯彰せらるるの光榮に浴す。爾來受賞表彰の光榮に浴すること枚擧に遑あらざるも、明治四十年一月二十七日大日本蚕絲令第二回總會において總裁伏見宮殿下より積年蚕業に盡瘁せる廉に依り表彰せられ金牌を授與せらる。

斯くの如く林家は倉太郎氏の創業を伸展せしめて國藏氏無上の榮譽を擔ふに至りしが、また地方の名家として四隣の景仰厚く、大正二年二月埼玉縣下において騎兵幹部演習擧行さるゝに際し竹田宮殿下には同家の深谷住宅に御駐泊遊ばされ、同年十一月の大演習には久邇宮殿下、同大正十一年九月陸軍大學々生演習には李王世子殿下御駐泊遊ばさる。林家の榮光洵に燦然たるものありと謂ふべし。

當主國藏氏は長野縣人宮澤直助氏の令弟、明治四十四年先代國藏氏の養子となる。

氏は夙に早稻田大學商科に學び、明治四十一年同校を卒業するや更に研鑽を重ねて社會への進出を待ちしが、家に精勵して怠らず、先代の卓抜せる識見と多年にわたる經驗に加ふるに、氏の新鮮なる新時代の學識を以て營業企畫の障害を時代に適應せしめ、改善伸展の方法を誤らしめざりき。明治の末葉より同家の經營事業が嶄みに良好なる飛躍をなし、發展また大いに擴大せしは、氏の父君を輔翼するの途よろしきを得たるためなり。

先代國藏氏の功績はすでに略述せるところによりてあきらかなるも、養父の遺志を繼ぎたる氏もまた社會公共に事ずるの念厚く、其の奇特の行爲多き中に、就中長野商業學校へ金壹萬圓を寄附し、歳に依り、昭和二年二月三日勅定の褒賞章を賜ひ、其の篤行を表彰せらるゝの光榮に浴す。

藍綬褒章受賞者

吉岡美國氏

文久二年九月二十六日生
兵庫縣武庫郡甲東村設上字新ノ地三六ノ四

關西學院のわが私學界に於ける地位は卒固たるものあり、特に中正穩健の學風と、師弟親和の美風は、他に多く其の比を見ざるところ、和氣藹々たる家庭的雰圍氣の中に、育成せられたる幾多の子弟は、今や凡ゆる領域に盛々の地歩を築きて、我國の至寶を以て讃せらるゝに至れり。

同院々是の第一項に左の如く制定しあり。

關西學院は純正なる基督教に基き、日本帝國の青年の知識、道德並に靈性を涵養するを以て目的となす。

即ち創立以後五十餘年にわたる永き間、恭始一貫儼然たるこの院是の實踐に俟りて、光輝ある學風は增ゝれ、有爲なる人材は育成されたるものにして、道德並に靈性の涵養を早くも重視したる點は注目に値ひすべく、同院出身者の總てが、智德共に備はりたる人士として、社會に歡迎さるる所以もまた此處に淵源するものと謂ふべく、研學を偏重し人格の陶冶を忽せにするを例とせし學園多き中にありて、智德兼備を目標となし得かも時流に適合するところかゝりし觀然たる關度は、以て敬服に値ひするに足る。

今や同學院は神戸市原田に於ける四十餘年の傳統を基礎として西宮市の北方に進出、高燥の佳地七萬坪を擁する綜合學園を建設して十年に備んとし、設文學部、商經學部、同專科の大學部、神學部、文學部の專門部の外、高等商業部、中學部を設備し、益々たる教育機關として貢獻するに至る。

神戸市の東郊として、田園の草木に圍繞されたりし原田の地に誕生せし同學院が、五十年の開年に俟りて、斯くも目覺しき飛躍を遂げたるは、時代の進運に伴ふ同學基礎の向上に俟ることは勿論なるも、また幾多人材の不斷の努力に俟つところ極めて多し。

わが吉岡美國氏の如きは、實に學院生みの親たり育成の慈母たり最文たる偉材にして、今なほ學院の名譽院長として、兎角大家族關西學院の家長たるの觀あるは、海に學院特有の風はしき盛事たり。

氏は京都市左京區の後皆吉岡美禪の長男にして京都御池屋敷に生る。幼にして慶應明治四年京都中學に學び、更に英學校に入りて英學、和漢の學を習得す。同校を卒業するや同十三年四月母校京都中學の助教諭を拜命し、同十八年迄奉職す。聽かに歲來を期したる氏は同年神戸に出で七月より兵庫ニュース社の一社員となりて翻譯に從事せしが、雄大なる抱負を抱く氏にとりては、翻譯の如きは到底久しきにわたりて耐へ得るものにあらず、一ケ年に滿たざるに先きたちて同社を辭して歲來の時機を待つことにせり。

待機の自適生活に入りたる氏は、英學の眞髓を究むるに餘念なく、この間米國宣教師ラハンバス氏の育英機關創設の企畫に參與す。これ實に氏が關西學院の主柱たるに至る端緒たり。

即ち明治二十一年七月、ランバス氏神戸市東郊原田郷に育英教育機關創設の敷地を求むるにあたり、氏はこれが買收名義人となり、地主と買收交涉を開始せしが、早くも米人の買收計畫あるを聞知したる地主は、僅々數ケ月間に地價倍額の昂騰を企て、容易に買收に應ぜざりしかば、氏は一計を案じ當時原田村の戸長たりし小川忠三郎氏の門を叩き、米人ランバス氏の雄大なる計畫を示し、學園の開設は又土地發展に資するところ尠からざるを說きて、買地主との特旋を依頼せり。氏の教育事業に對する熱意と至誠は、小川氏の奔走によりて漸く通じ、關係地に土地の買收を終り、茲の地に總設せられたるもの關西學院なり。

學院の總設竣成につくや、氏は益々その機會を得て英國に渡り、ヴアクービルト大學に學ぶ。時に明治二十三年なり。同二十五年卒業歸朝し、迎へられて關西學院長となる。學院長の重職に就くや、博愛無私の人格者として知られたるランバス氏を扶けて學院の充實に精勵して事日なく、日本教師の融和協調、校風の一新を圖り、學園たるの基礎確立に渾身の努力を惜しまず、更に學生生徒の啓發指導につきては細心の考慮を拂ひ、特に無批判なる西洋崇拜熱を排擊して日本精神を昂揚し、同電雜誌を發刊せしめて「正氣」と題するなど、尊重愛國の士氣を持すべきことを強調して、學風の根本を培養するに勉めたり。

爾來五十年餘にて平坦の進路を直進したるにあらず、幾多の波瀾曲折を打開し、創業の難に次ぐ守成の難きを玆く達成し、學園今日の盛觀を成就し、わが教育界に寄與せしところ極めて甚大なり。

昭和十四年十月十三日勅定の褒綬褒章を賜ひ其の功勞を顯彰せらる。

野田文次郎氏

氏は京都市住職吉岡美種の長男にして京都御池屋敷に生る。幼にして慧俊明治四年京都中學に學び、更に英學校に入りて英學、和漢の學を習得す。同校を卒業するや同十三年四月母校京都中學の助教諭を拜命し、同十八年茲奉職。秘かに渡米を期したる氏は同年神戸に出で七月より兵庫ニュース社の一社員となりて飜譯に從事せしが、雄大なる抱負を抱く氏にとりては、飜譯の如きは到底久しきにわたりて耐へ得るものにあらず、一ケ年に滿たざるに先きたちて同社を辭して渡米の時機を待つことにせり。

待機の自適生活に入りたる氏は、英學の蘊奥を究むるに餘念なく、この間米國宣教師ラハンバス氏の青英機關創設の企畫に參與す。これ實に氏が關西學院の主柱たるに至る端緒たり。

即ち明治二十一年七月、ランバス氏神戸市東郊原田部に青英教育機關創設の敷地を求むるにあたり、氏はこれが買收名義人となり、地主と買收交涉を開始せしが、早くも米人の買收計畫あるを聞知したる地主は、僅々數ケ月間に地價倍額の昂騰を企て、容易に買收に應ぜざりしかば、氏は一計を案じ當時原田村の戸長たりし小川忠三郎氏の門を叩き、米人ランバス氏の遠大なる計畫を示し、學園の開設は又土地發展に資するところ尠からざるを說きて、對地主との斡旋を依頼せり。氏の教育事業に對する熱意と至誠は、小川氏の奔走により漸く通じ、圓滿なり、同二十五年卒業師朝し、迎へられて關西學院長となる。學院長の重職に就くや、博愛無私の人格者として知られたるランバス氏を扶けて學院の充實に精勵して事日なく、日本教師の融和協調、校風の一新を圖り、學園たるの基礎確立に渾身の努力を惜しまず、更に學生生徒の修養指導につきては細心の考慮を拂ひ、特に無批判なる西洋崇拜熱を排除して日本精神を鼓吹し、同雜誌を發刊せしめて「正氣」と稱するなど、學風振興の士氣を昂すべきことを勵調して、學風の根本を培養するに勉めたり。

爾來五十年間にて平坦の道路を直進したるにあらず、幾多の波瀾曲折を打開し、創業の難に次ぐ守成の難きを克く達成し、學園今日の盛觀を成就し、わが教育界に寄與せしところ極めて莫大なり。

昭和十四年十月十三日勅定の紺綬褒章を賜ひ其の功勞を顯彰せらる。

緑綬褒章受賞者

野田文次郎氏

明治十八年五月九日生
住所　香川県綾歌郡坂出町西庄
坂出工場　香川県綾歌郡坂出町西庄
高松工場　香川県高松市松島町
東京支店　東京都京町四十番地
岡山事務所　岡山市北二條町二十九番地

民族の仲現は人口の膨力によりて成就し得るものにして、今や東亞共榮圏確立の盟主たるわが國にありても、人口増殖對策に萬全を期しつつあり。人口増殖に伴ひて當然豫想となすは豊富なる資源の獲得にあり、殊に食糧資源の増産開發を以て最も緊要事となす。日滿支經濟の一體化、自由經濟より計畫統制經濟への轉換等重大國策が着々具體化せられつつあるは、これ總て豊富なる資源の獲得を主要目的となすに外ならず。

國内にありては食糧資源の開發増産に關する諸策すでに立案具體化され、其の成果大いに期待されつつあり、特に農村振興策につきては劃期的施策の實行を見んとしつつあり。農村の人口はわが國人口の大半を占むる現勢にして、農村振興對策の急務なるは言を俟たず。しかも近時農村に於ける勞力は著しく低下するの傾向にあり、これを補塡するにあらざれば振興ならびに増産の目的を達成し難し。農村勞力の補塡は人的補强を第一とするもまた機械的補塡の重要なることは當然にして、優秀なる農機の提供に俟つところ極めて多し。

わが野田興農賞審査會の如きは、眞に社會奉仕、共存共榮、職業關係の業績のもとに農村の振興に多年にわたり精進し、其の創出する優良にして堅牢なる諸農機は、農村勞力の補塡に絶大なる能力を發揮し、今や政府に於ても同興會諸農機の使用を奬勵するの狀態にあり。同興會は明治四十二年の創立にして、野田文次郎氏の個人經營たり。氏は香川縣綾歌郡林田村に生る。父は野田幸藏氏、幸藏氏農を業となし十六人の子女を儲く。文次郎氏は實に第十二子たり。氏七、八の頃實父は不幸の歿只中にありて、野田家また貧困の極に陷し家計を扶くるため十歳にして岡山市に遊り年期奉公に入る。十二歳にして歸郷し更に職工の徒弟となる。年期四ヶ年を終るや氏は早くも獨立の生計を營つるに至りたるにとどまらず、開發精神を引きとりてこれを扶養し、一層を發としつつも新生面の開拓に專念せり。氏幼少の頃より創意力に富み發明の方に秀でしが、爾來年期奉公中の一個數に暗示を得、農機「興農號」を考案して好評を博したるを端緒として、偉來の諸農機具の機械化に着目し、漸次研鑽改良を加へ、進むわが國に於ける農機の元祖を以て最稱せらるるに至れり。

時代の過遷につれ諸機の機具類多く動力化せらるるに鑑み、氏もまた諸農機の動力機械化を志し、不屈不撓倦むところを知らざる研究の結果、劃期的な設計を以て續々新農機を創作、其の實價を問ふところありしが、大正七八年の頃に至りて、愈よ其の眞價を認められ、全國農家より歡迎され、市場價値また大いに騰り、遂に社員數更の基礎を確立せり。

氏は曾て天星を感謝し『人を救へは我自身助かる』の信條を以て終始となし、經營方針の根本もこゝに置かんと期ふ。一個職人より身を起して今日の大を成すとともに、國家の興隆に資するところ多き氏の如きは、洵に立志篇中の逸材にして衆庶の模範たり。

創業以來絶ゆる間もなき發展を遂り、動力機械化とともに企業の一途を邁進し、今や職員三百數十名を擁し、其の職員全員に及び、第一工場にありては鋳物、鍛冶、自動販賣各機、ゴムロールを製作し、從業員三百五十名、第二工場にありては甲種品、部分品を製作、從業員二百五十名、第三工場にありては石油發動機を製作、從業員二百五十名の當々たる陣容を備へ、年産額發動機一萬臺、鋳物機二萬五千臺、脫穀機七千臺、普通機二千臺、ゴムロール十萬個に上る。各工場には福利的育成機關及び在郷軍人分會を設立して、職域奉公の萬全を期するとともに、銃後國民の精神の涵養に勉め、新舊職員の親睦融和に積極的施設の擴充に邁進しつつあり。

長くも先年明治天皇陛下ならびに久邇宮殿下の台臨を仰ふし、激勵の御言葉を賜ふの光榮に浴せり。

氏はまた財團法人日本農機工業組合理事として新業の發展に貢獻するところ多きのみならず、社會公共に奉ずるの念厚く、香川縣高松刑務所製作工場三棟並に道路建設費を寄附したるのみならず、引續き軍部へ貳萬圓を寄附する等奇特の行爲に富む。

昭和十五年五月日本赤十字社香川支部事業費として金壹萬圓を寄附したる廉に依り、同年九月二十七日勅定の褒授褒章を賜ふの光榮に浴す。

東京市江東機械商組合長、東京市本所區會議員、機械商

緑綬褒章受賞者

足立元三郎氏

明治七年十一月二日生
東京市本所區番川町三丁目四

略歴

氏は岐阜縣人足立伊三郎氏の二男、岐阜縣土岐郡笠戸村に生る。夙に青雲の志を伸べて東都において名を成さんことを期し、年齢僅か十餘歳にして單身上京し、職を砲兵工廠にもとむ。

氏は性來機械工具類を取扱ふを好み、將來機械商を以て身を立てんことを志し、斯くは砲兵工廠に入りしが、職工として身を工廠に投じたるのみにては、專門の技術に習練するは難し　粉骨砕身の努力をもつて、其の任務を遂行するとともに、餘暇を割きて關係書籍を繙き、勤勉怠ることなき鐵石心あるにあらざれば、到底一個の專門家的技術を修得することは能はず。

氏の如きは廢業の時間をさへ惜しみて勉學に精勵するのみならず、自らの血汗によりて得たる貯金は、これを貯蓄するに勉め、勤儉力行もつて他日を期するところあり、漸く社會に出でて一業を成し得るの自信を得るや、決然として同工廠を辭して獨立に出で、初志の貫徹に邁進することゝせしが、斯くの如きは實に凡庸の士の企及し得ざるところにして、氏が不屈不撓の精神を以て、萬難を克服し、遂に今日の大を成すの基礎を確立するに至りたる當時の健闘こそ、萬人が以て範となし學ぶに足るところ、氏もまた稀れに見るの傑物にして、實に立志傳を飾るの逸材たるを失はず。

氏は年來の宿望たりし機械商を創業し、業績愈々良好を加へ業礎の堅固なるを得るや、更に區政の刷新、自治の振興に深き關心を持つに至り、推されて本所區々會議員となるや、常に正論を吐露して區政の發展に寄し、その治績大いに見るべきものあり。また同業の信認を得て江東機械商組合長に選ばるゝや、多大の犧牲を拂つて業界の伸展に盡瘁し、衆望に報ひたるが如き、實に氏は實業家として非凡の才腕あるのみならず、政治的手腕にも秀で、今や業界の長老として重きをなせり。

昭和十五年八月東京市本所高等實踐女學校建築資金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十一月十四日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

農機（耘搭機）を考案して好評を博したるを端緒として、傳來の諸農機具の機械化に着目し、漸次研鑽改良を加へ、遂にわが國における農機の元祖を以て景仰せらるるに至れり。

時代の進運につれ諸般の機具類多く動力化せらるるに鑑み、氏もまた諸農機の動力機械化を志し、不屈不撓倦むところを知らざる研究の結果、獨創的な設計を以て續々新農機を製作、其の廉價を問ふところありしが、大正七八年の頃に至りて、愈よ其の眞價を認められ、全國農家より歡迎され、市場價値また大いに騰り、遂に降昌發展の基礎を確立せり。

氏は常に大恩を感謝し、「人を救ふには我自身助かるの信條を以て家憲となし、經營方針の根本もこゝに淵源せりと謂ふ。一介屠職人より身を起して今日の大を成すとともに、國家の興隆に資するところ多き氏の如きは、洵に立志傳中の逸材にして衆庶の模範たり。

創業以來概ね順調なる商勢を辿り、動力機械化とともに急激なる降昌の一途を邁進し、今や取引關係員三百數十名を擁し、其の販賣網全國に及び、第一工場においては耘搭機、麥搭、脫穀、自動脫穀各機、ゴムロールを製作し、從業員三百五十名、第二工場においては動機を製作、從業員二百五十名、第三工場においては石油發動機、ゴムロール十萬組に上る。各工場には模範的青年學校及び在鄉軍人分會を設立して、職域奉公の萬全を期するとともに錬後國民の滅私奉公精神の涵養に勉め、新體制創建のもとに各種時局的施設の擴充に邁進しつつあり。

畏くも先年朝香宮殿下ならびに久邇宮殿下の台臨を辱ふし、激勵の御言葉を賜ふの光榮に浴せり。

氏はまた財團法人日本農機工業組合理事として斯業の發展に貢獻するところ多きのみならず、社會公共に奉ずるの念厚く、香川縣高松刑務所製作工場三棟並に道路建設費を寄附したるのみならず、引續き軍部へ貳萬圓を寄附する等奇特の行爲に富む。

昭和十五年五月日本赤十字社香川支部事業費として金壹萬圓を寄附したる廉に依り、同年九月二十七日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

元廣島縣安藝郡熊野町々長、同産會長、農

緑綬褒章受賞者

故 伊藤忠兵衛氏

明治十一年四月五日生
廣島縣安藝郡熊野町

略歴

氏は廣島縣の人伊藤源兵衛氏の三男。伊藤家は農を業とせしも、忠兵衛氏風に地方自治の振興に身を投ずるを以て、終生の天業たらしむるの念願を有し、稍々長ずるに及んでは、常に地方開發の諸事業に參畫し、年少克く長老を凌發し、時代の進運に遅れざらんことを期せしかば、鄕黨氏の將來を囑望し、兄事して其の指導に從ふを例とせり。

農會長に推擧さるゝや、意を農本主義の昂揚に用ひると共に、害蟲を打破して農産物の増牧を期し、施肥の改良、耕作の改善、新種農作物の移入、副業の奬勵に勉めしかば、農村擧みに潤ひ、氏の努力漸く實果を結ぶに至れり。

更にまた選ばれて町會議員に當選するや、特に教育の振興に造詣し、小學校における設備の擴充を强調して、町民子弟の教育に遺憾なかしめ、熊野町初等教育施設をして、近隣町村の模範たらしめたり。

昭和四年衆望を擔ふて熊野町長に就任するや、町政の運營に非凡の政治的手腕を發揮し、町政の面目を一新せしめたるのみならず、自ら率先して、町役場新築を主張し、敷地附地を寄附する等、在職僅か二ケ年にして同六年退職せしに拘らず、其の在職中町の發展に寄與せしところ鮮からず、町民氏の功績を多として、町役場敷地内に頌德の記念碑を建立せしが、氏の如きは實に熊野町發展の恩人として、永へに町史に其の名をとどむべきの偉材なり。

氏は斯くの如く、社會公共自治發展に功績ありしのみならず、敬神崇祖の途に富み、神社佛閣に淨財を寄進せしこと一再にとどまらず、國町光敎坊經堂建立に際しては金四千圓、氏神々社へ石鳥居一基を寄進する等善行多く、大正十年三月熊野町有財産として土地七畝四歩を寄附せし廉に依り、同十五年十月十八日勅定の緑綬褒章を賜ひ、その善行を表彰せらるるの光榮に浴す。昭和九年八月歿す。

嗣子は實弟氏、廣島高等師範附屬中學校に學ぶ。父君歿後家督を相續。父君の衣鉢を繼ぎ昭和十四年十月熊野町長に選ばれ、尚又熊野町農會長、熊野町産業組合長、廣島昭和高等女學校理事長等に在任中にて、嚴父の遺志を伸べつゝあり。氏も亦善行多く、赤十字社廣島支部より有功章を授けらる。父子共に斯くの如きは極めて稀れにして、業庶の模範となすに足るべし。

石田友吉

黄綬褒章受賞者

故 石田友衛氏

文化八年五月十四日生

紺綬褒章受賞者

故 石田友吉氏

明治四年四月十二日生

新潟縣南蒲原郡加茂町上條三六〇八

略歴

故石田友衛氏は新潟縣人、新潟縣南蒲原郡加茂町に生る。由來加茂町は新潟縣下有數の繁榮地にして、多く半農半商を以て業となす。石田家は代々加茂町にて米穀肥料商を營み、地方屈指の資産家として知られしが、氏襲するに及んで父業を扶けて家業に精勵し、家運を興隆せしめるとともに、家を町政の伸展に用ひ、町會議員あるひは學務委員を歴任して、自治の發達、教育の振興に貢したるところ尠からず、同町今日の發展あるは、氏の努力に俟つところ多し。

氏はまた夙に社會公共に挙ずるの念厚く、加茂町に農村學校建設の議起るや、率先してこれが促進に奔走し、あるひはまた加茂神社の昇格に多大の努力を拂じて、その目的を達成して官幣社たらしめたるなど、吉特の善行枚挙に遑あらざるも、わが國海防事業の充實を期して資金基業の事あるや、進んで多額の金員を獻金せし廉に依り、明治二十年十二月二十七日、勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。明治三十年八月逝く。

故石田友吉氏は氏の長男、父業を繼ぎてます〳〵石田家を興隆せしめ、父祖の名を恥しめず、家門をしていよ〳〵榮光あらしむ。方に氏は石田家中興の祖として仰がるべく、曾に家業に不斷の精勵を怠らざりしのみならず、氏もまた先考の遺志を体べて社會公共に挙ずるの念厚く、昭和三年五月加茂町牛頭栗架設費ならびに木材利用研究所設置費として金貳萬八千圓を寄附せし廉に依り、同四年三月二十三日勅定の紺綬褒章と賜ふの光榮に浴す。昭和五年十月逝く。

當主友一氏は友吉氏の長男にして明治三十年六月の出生、昭和六年家督を相續、主として農業を營む傍ら、新潟瓦斯株式會社、三條瓦斯株式會社各取締役として、その機機に參畫し、地方殖産興業の發展に寄與しつゝある新鋭の實業家にして、現に新潟縣多額納稅者たり。

元京都商工會議所會頭

藍、紺綬褒章受賞者

故 稲垣恒吉氏

元治元年八月二十八日生

京都市松ヶ崎柳井田町一二

略歴

○昭和三年七月京都市大礼奉祝事業費として金壹萬圓寄附の廉に依り、同年十一月一日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○屑繭利用の方法を研究し、繰綿製機法を案出し、斯業に貢献せしところ尠からず、昭和三年十一月十七日勅定の

元京都商工會議所會頭

藍、紺綬褒章受賞者

故 稻垣恒吉氏

元治元年八月二十八日生
京都市松ヶ崎柳井田町一二

略歴

○昭和三年七月京都市大禮奉祝事業費として金壹萬圓寄附の廉に依り、同年十一月一日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○屑繭利用の方法を研究し、縮綿製絲法を案出し、斯業に實獻せしところ尠からず、昭和三年十一月十七日勅定の藍綬褒章を賜ひ、其の功勞を顯彰さる。

氏は稻垣藤助氏の二男として福井縣大野郡本郷村に生る。明治十三年三月京都に出で、近親たる稻垣藤兵衞商店に入り見習店員として鋭意商道の修得に專念、屢望されて同廿五年先代藤作氏の養子となり、後家督を相續して組業に從事し、生絲、羽二重、縮緬其他絹綿糸布の販賣に精勵し、販路漸く海外に及ぶに至る。同三十年個人の經營を改めて稻垣合名會社を設立して、業礎愈々堅固を加へたり。

氏は家業の隆昌に不斷の努力を投ずると共に、京都市産業界の發展にも深く留意し、其の裨益せしところ極めて多し。卽ち明治四十二年四月京都商工會議所議員に推されたる外、京都瓦斯株式會社の創設に參畫して、これが取締役たり、絹糸紡織株式會社取締役會長、京都市立商業學校、同商業實習學校評議員等其の關與するところ極めて多岐にわかれ、明治四十四年五月京都商工會議所副會頭に推され、身邊愈々繁劇を加へしが、更に昭和二年衆望を擔ふて同會頭に就任せり。

しかもこの間、揮身の努力を投じて屑繭利用の方法を研鑽し、遂に縮綿製絲法を案出して、斯業に貢獻するところ多く實絲界へ劃期的光明を與らせり。

斯くの如く氏は稻垣家に入りて以來、各方面にわたり活躍して倦むところを知らず、衆望自ら加はり、大正三年七月農商務大臣より歐洲戰亂中時局救濟に關する協議會に出席を命ぜられ、同年十月國産奬勵會評議委員に推薦せられ、また翌四年には日本赤十字社京都支部評議員を囑託ぜらるゝ等、公共の事凡そ關係せざるなく、京都市實業界の發展を助長せしめ、わが國産業の振興に裨益せし功勞多大にして、社會公共に奉ずること永極めて厚く、國家的實業家の龜鑑たりき。

故石田友吉氏は氏の長男、父業を繼ぎてます〳〵石田家を興隆せしめ、父祖の名を恥しめず、家門をしていよ〳〵榮光あらしむ。方に氏は石田家中興の祖として仰がるべく、實に家業に不斷の精勵を怠らざりしのみならず、氏もまた先考の遺志を伸べて社會公共に奉ずるの念厚く、昭和三年五月加茂町橋梁架設費ならびに木材利用研究所設置費として金貳萬八千圓を寄附せし廉に依り、同四年三月二十三日勅定の紺綬褒章と賜ふの光榮に浴す。昭和五年十月逝く。

當主友一氏は友吉氏の長男にして明治三十年六月の出生。昭和六年家督を相續、主として發業を營む傍ら、新潟瓦斯株式會社、三條瓦斯株式會社各取締役として、その幅機に參畫し、地方殖産興業の發展に寄與しつゝある新鋭の實業家にして、現に新潟縣多額納稅者たり。

大成博覧會大阪市支部副會長、關西會行副總裁
式會社取締役社長

勲五等瑞宝章受賞者

種田虎雄氏

明治十七年四月十五日生
住所　兵庫縣川邊郡小園村川面百戸
會社所　大阪市天王寺區上本町六ノ一

略歴

交通機關の發展完成は凡ゆる生産業に先驅するものにして國家經濟の原動力たることを明瞭し、克くその大理想を實現せしものに種田虎雄氏あり。

氏は故早藏の出身、大正市長町に生る。明治四十二年東京帝國大學法科大學政治科を卒業するや鐵道省に入り、爾來して鐵道畑氏に任ずらる。この間就米を歴覽することを得たるところ極めて多大にして、鐵道行政の權威者として民に敬仰あり。

明和二年五月會社を創し、同年九月大阪電氣軌道株式會社に入り、同十月專務取締役に就任。時の社長松本重太郎氏と共に力を盡して會社のひとゝころを知らず。同社今日の隆盛の基礎を確立せり。同十二年社長松本の逝去のあとを繼ひで社長の重責に當く、爲めての官を行電氣鐵道株式會社の社長たり。同十六年三月關東合併して關西急行電鐵株式會社を設立するや社長に就任す。

氏は民に公共第一主義を鐵道事業經營の主眼とし、大阪入社以來實に十數年玆々營々社業の伸展に邁進し、同業諸會社の合併統合並に運行し、わが國に於ける都市交通事業統制の先驅をなし、常に率先して無能の實を示し、以て同業を開發指導するなど、其の功績顯著なるものあり。今や總裁事業界に於ける時代的指導力たるの實位にあるのみならず、大阪實業會の重鎮に參畫して、關東興隆の使命達成に邁進しつゝあり。

氏はまた社會公共に寄與するの念厚く、さきに皇軍討國軍人援護會に金五萬圓を寄附したるをはじめとして、關東神宮青年道場建設費金參拾萬圓、神奈川縣立第一高等女學校建設費金參拾萬圓、奈良縣立高等女學校建設費金參拾萬圓、大阪國際飛行場並に防空飛行場設置費拾五萬を寄附せしほか、篤志家農の普及發達を期し參拾萬圓を投じて生駒山上に大グライダー場を建設するなど、寄附の行爲枚擧に遑あらず。

就中昭和十五年三月紀元二千六百年奈良神宮奉祝會運營金として金壹萬圓を寄附せし厚に依り、同十六年二月二十一日勅定の緒綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

株式會社市田病店取締役社長、機物問屋

紺綬褒章受賞者

市田彌吉郎氏

明治三十九年十一月十二日生
住所　京都市左京區南禪寺福地町二二
營業所　京都市下京區綾町通佛光寺上ル白樂天町五二二
同　東京市日本橋區新留町二ノ三
同　大阪市東區南本町三丁目

社の合併統合整備を断行し、わが國に於ける都市交通事業統制の先駆をなし、常に率先して垂範の實を示し、以て國業を誘掖指導するなど、其の功績顯著なるものあり。今や國道事業界における時代的推進力たるの實位にあるのみならず、大政翼賛會の幹部に參畫して、國家興隆の使命遂行に邁進しつつあり。

氏はまた社會公共に率するの念厚く、さきに恩賜財團軍人援護會に金五萬圓を寄附したるをはじめとして、橿原神宮青年道場竣成費金參拾萬圓、納原陸軍傷痍軍人療養所建設費貳萬圓、奈良縣立高等女學校竣成費參拾萬圓、大阪國際飛行場並に防空飛行場設費金拾五萬を寄附せしほか、就空事業の普及發達を期し參拾萬圓を投じて生駒山上に大グライダー場を建設するなど、奇特の行爲枚擧に遑あらず。

就中昭和十五年三月紀元二千六百年奈良縣奉祝會基金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十六年二月二十一日勅定の紳設褒章を賜はの光榮に浴す。

株式會社市田商店取締役社長、織物問屋

紳綬褒章受賞者

市田彌吉郎氏

明治三十九年十一月十二日生

住所　京都市左京區南禪寺鹿ヶ谷町二二

營業所　京都市下京區室町通魚屋町上ル白樂天町五二二

同　東京市日本橋區銀座町二ノ三

同　大阪市東區南本町三丁目

略歴

氏は株式會社市田商店專務取締役市田彌三郎氏の三男として生る。當時市田家は父祖の努力により、家運愈々隆盛の一途にありし折柄只中にして、祖父彌惣八氏の創業に係る京染吳服卸商は驚異的躍進を遂げ、明治三十七年京都、大阪兩都の二出張所を支店に昇格せしめたる實後なりき。

其の後に於ける彌吉郎氏の順調にして平和なる成長は、恰も市川商店の順風に乘る發展にも比すべく、即ち父君彌三郎氏及二代目彌一郎氏歿後代りて全店を統轄するや、市川商店の組織を時代に適應せしめて合名會社に變更すると同時に、需給關係を圓滑ならしむるため、京都支店を本店となし、機構の擴充整備を遂成し、大正五年新たに資本金壹百萬圓全額拂込を以て株式會社市田商店を創設して、合名會社市田商店の業務一切を繼承、同十年に資本金を三百萬圓に、更に昭和十一年六百萬圓に增資せし躍進振りは、業界稀有の事例にして、彌三郎氏が如何に非凡の士なるかを知るに足るべし。

今や株式會社市田商店の地歩は業界に牢固たるものあり、取扱商品また多岐にわたり、衆城の觀展見るべきものあり、絹綿布、洋反物、百貨の卸商として、販路は廣く海外にも及べり。

彌吉郎氏は昭和七年慶應義塾大學經濟學部を卒業し、一族の推擧により出でゝ本家たる市田彌一氏の後を繼ぎ、現在取締役社長として經營の首座に起ち、新鮮なる思想と國家的理念に基く氏の業績は、大いに期待されつゝあり。

昭和十三年十月、日本赤十字社京都支部事業費として金壹萬圓寄附せし善行に依り、同十四年十一月十五日勅定の紳綬褒章を賜ひ光榮を重ね、父君とともに紳綬褒章拜受者として家門に一段の榮光あらしめたり。

元北海道會議員、元衆議院議員

紺綬褒章受賞者

故 石黒長平氏

明治六年十月二十七日生
北海道空知郡岩見澤町七條四丁目ニ

略歴

○大正十三年三月及び同十一月岩見澤中學校建築費として金七千圓並に同校外一校道路敷地として二段二十一歩寄附の廉に依り、同十五年一月十五日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○昭和五年一月道路敷地七段九畝三歩を寄附せし廉に依り同六年十一月二十六日紺綬褒章飾版並盃を賜ひ、其の善行を表彰さる。

氏は新潟縣人石黒忠三郎氏の長男、新潟縣中蒲原郡小合村字大鳥に生る。明治二十四年父嘗に從つて北海道岩見澤町に移住。

未だ二十歳に達せずして新天地北海道に移住したる氏は、生氣溢剌たる意氣を以て父嘗を扶けて、岩見澤町並に江別町二ヶ所の開墾事業に從事し、孜々營々父業の隆昌を期したるが、明治二十八年開墾の事業一段落を告ぐるや、味噌、醤油の釀造業を創業す。新潟縣人にして北海道に移住せし者のうち釀造業を營みて大をなしたるもの鮮からざる中に、氏も又篤實先驅の例に漏ひて被等の最線を驀ぐることを得たり。業績愈々擧回となるや、同三十七年更に牧畜業を營營して、これが進展開發に資するところ多かりき。

家業の伸張に伴ひ他領又加はり、明治二十九年村總代に推され、村會議員を經て町會議員たり。敎育會副會長、商工會會頭、其の他多數の公職を經て、遂に同三十四年八月第一期北海道會議員に當選。大正二年岩見澤町長に推されしも固辭して受けず、專ら産業開發に精勵せしが、同五年八月再び道會議員に選ばれ、同九年八月三度當選、北海道政界に乘きを成すに至り、政界實業界を通じて道發展に資するところ鮮からず、同十二年五月衆望を擔ふて衆議院議員に當選す。

この間株式會社岩見澤鉄道會社長、其の他諸會社重役として殖産興業に邁進せしこと多く、また常に社會公共事業に至誠を披瀝してこれが達成に勉めしが、昭和十年十月東京の別邸にて逝く。享年六十三歳。

當主和平氏は北海道玉葱輸出販賣株式會社社長、其の他諸會社重役として信認厚く、岩見澤實業會副會頭其の他諸公職に在りて、非常時局下に於ける職域奉公に邁進しつゝある氣鋭の實業家たり。

多額納稅者、地主部門

紺綬褒章受賞者

今嶺秀貞氏

明治十四年二月十二日生
京都市上京區西三本木通切通田水町

略歴

一千年の古より、明治維新に至るまで、王城の地として、其の傳統文化を誇り來りし京洛の地は、山紫水明にして、名勝史蹟に富み、神社佛閣其の他觀るべきもの多く、工藝美術の淵叢たり。斯かる自然と人事の優秀なる環境に育まれたる

家業の林業に伴ひ地望又加はり、明治二十九年村會議員に推され、村會議員を經て町會議員たり。教育會副會長、商工會會頭、其の他多數の公職を經て、遂に同三十四年八月第一期北海道會議員に當選、大正二年岩見澤町長に推されしも固辭して受けず、專ら産業開發に精勵せしが、同五年八月再び道會議員に選ばれ、同九年八月三度當選、北海道政界に重きを成すに至り、政界實業界を通じて道發展に資するところ尠からず、同十二年五月衆望を擔ふて衆議院議員に當選す。

この間株式會社岩見澤信用實業組合社長、其の他諸會社重役として殖産興業に盡瘁せしこと多く、また常に社會公共事業に至誠を披瀝してこれが速成に勉めしが、昭和十年十月東京の別邸にて逝く。享年六十三歲。

當主和平氏は北海道玉葱輸出販賣株式會社社長、其の他諸會社重役として信認厚く、岩見澤實業會副會頭其の他諸公職に在りて、非常時局下に於ける職域奉公に邁進しつゝある氣鋭の實業家なり。

多額納稅者、地主農主

前綴寶掌受賞者

今嶺秀貞氏

明治十四年二月十二日生
京都市上京區西三本木通切通出水町

略歷

一千年の古より、明治維新に至るまで、王城の地として、其の傳統文化を誇り來りし京洛の地は、山紫水明にして、名勝史蹟に富み、神社佛閣其の他觀るべきもの多く、工藝美術の粹集たり。恰かる自然と人事の優秀なる環境に育まれたる京都人士は、概ね優雅温優の性を享け、書債を貴んじて、任俠の態なく、風格均に夠すべき人多し。茲に小傳を綴せんとするわが今嶺秀貞氏の如き、亦其の一人にして、大いに尊すべき人材なりとす。

氏は京都舊士族今嶺秀海氏の長男として、明治十四年二月十二日を以て、瓢々の聲を擧ぐ。實性温厚實直にして、祖先崇敬の念を遵守し、産を守りて父祖の盛名を辱めず、特に國民敎育に異常の關心を持ち、常に敎育奉公の赤誠を捧げて、其の施設の充實發展に貢獻せんことを期しつゝあるもの如く、又一面社會公共の爲に富み、之等事業の發展に力を致したること幾許なるを知らず。嚢に大正十二年四月京都市立日常小學校建築資金として、金一萬圓を寄附し、其の功を賞せられて、同十三年九月二十四日、勅定の紺綬褒章を下賜せらるゝの光榮に浴したる外、日本赤十字社京都支部へ金一千圓、財團法人病生會へ金五百圓、京都市敎育會へ同じく金五百圓、京都市立日常小學校へ金參百圓、又同校御眞影奉安庫建設費金として金一千圓をそれ〳〵寄附し、其の他各方面に私財を醵出し、公共に盡すこと斯くの如くなるが、其の家憲を執るに方りても、徒らに利慾に走らず、常に奉公の心を以て之に當り、數十年前より既に今日の所謂、先づ公益優先の觀念を以て實踐し來りたる點より觀ても、其の人物の如何に忠誠なるかを窺見するに足るべく、各方面より其の人格を信頼せられ、景仰せらるゝもの、洵に所以ありと言ふべし。

家庭にはとく夫人の外、養子秀成氏、梅代夫人、令孫尚子孃あり。夫人は温良貞淑にして、内助の功顯る多く、秀成氏は嚢に同志社大學に業を卒へて、現時鳥津製作所に在勤し、有望なる青年として其の將來を囑目せらる。一家圓滿の開運にして、和氣藹々たる氏の一家を知るもの、最も羨望する所なり。

市川文太郎氏

株式會社市川鐵工所取締役社長

精勤表彰受賞者

市川文太郎氏

明治三十二年八月十九日生
東京市深川區平井町三丁目一

略歴

氏は群馬縣の人市川常五郎氏の長男にして、群馬縣北甘樂郡月形村に生る。夙に獨立の精神に富み、學業また優秀、村長その將來を囑望すること切なりしが、遂に年少にして身を立て、抱負經綸つひに今日の大を成すに至る。まことに氏も亦立志傳中の異郷たり。

氏小學校在學中すでに朝するところあり、學業衆に勝れたりと雖も、進んで上級の學校に入るの資に乏し、學を屑くには他に途なきにあらず、衆に從ひてなほ其の餘暇を善用すればとて、直ちに社會に出でて一業を修得し、獨立して身を立て名を成すに如かずとなし、初等の課程を終了するや、勇躍志をたて、東京に上る。

氏の志すところ、將來工業家たらんとするにありしが、先づ適當の職を得がたく京橋區岩瀬電氣會社に入る。由來俊敏なる氏は、同會社にあること數年にして早くも獨立の機會をとらへたるが、斯くの如きは實に異例となすに足る。岩瀬電氣會社に職を奉じたるものにして、相當の名を成す者鮮からざる中に、氏は斷然頭角を擡き、しかも其の獨立の彼岸に達するの遽やかなりしは、到底他に比を見ざるもの、同輩先輩を敬若たらしめるもまた當然と謂ふべきなり。

蓋し氏は幼少にして深く決するところありし初志の實徹に邁進、不屈不撓の精神を以て辛酸苦闘を克服し光輝ある獨立自營の日の來冷るを唯一の悦しみとなして精勵倦むところを知らず、終實以て終始一貫主家に仕へたるものとして、獨立自營の日を迎ふること遽やかなりしは、斷じて偶然にあらざるなり。

大正七年岩瀬電氣會社を辭したる氏は、直ちに市川鐵工所を創立、これを主宰して孜々營々、經驗の知識技術に加ふるに獨創的積企業を以てし、業績益々良好を加へて業種益々擴圍となるや、株式會社に組織を變更して、自ら取締役社長たり。今や戰時下にありて重要產業部門の擔當者として、所期動員奉公に至誠を盡瘁し、その使命の達成に遺憾なからんことを期し、乘能の實を示して業界の範たり。

昭和十四年六月故皇月彩小學校講堂建築資金として金弐萬圓寄附の厚に依り、同十五年九月十日勅定の精勤表彰を賜ふの光榮に浴す。

精勤表彰受賞者

黒川鐵工所主、機械製造業

黒川四三二氏

明治廿六年十一月五日生
金澤市北安江町九八番地

略歴

年齢不惑に達せずして、早くも産業界に頭角を顯はし、今次支那事變の勃發するや、名譽の召集を受け、勇躍出征して各地に轉戰、縦々たる武勳を樹て、凱旋後は、多年軍人精神に陶冶せられたる健全なる思想を經とし、更に戰場に於ける絶體絶命の裡に得たる、生々しき體驗を緯とする國民精神を

黒川鐵工所主、機械製造業

褒賞受章記念

黒川四三二氏

明治廿六年十一月五日生
金澤市北安江町九八番地

略歴

年齢不惑に過ぎずして、早くも事業界に頭角を顯はし、今次支那事變の勃發するや、名譽の召集を受け、勇躍出征して各地に轉戰、幾々たる武勳を樹て、凱旋後は、多年軍人精神に陶冶せられたる健全なる思想を經とし、更に戰場における偉大なる體驗の裡に得たる、生々しき體驗を緯とする國民精神を青年に注入せんとする思想善導運動を起して、邦家の爲に忠誠の心を致しつゝあるもの、之を黒川四三二氏其人と爲す。

黒川家は舊幕時代、前田藩士たりしが、先代初三郎氏に至り商賈となり、米穀商を經營す。氏は其の三男として、明治三十六年十一月五日を以て生る。長じて鐵工業の將來殊も好望なるを洞察して其の業を起し、引拔シヤフト、唐シヤフト及び押ネジ等の製作に從事し、顧客指據經營に任じ、業績隆隆として擧り、現時金澤機械鐵工業組合役員に推され、今や第一流の業者として、同業者の間に重ぎを爲しつゝあり。今次事變に際しては、步兵軍曹として出征し、身命を鴻毛の輕きに比し、各地に奮戰大いに功を樹つ。現時帝國在鄉軍人會金澤第六分會副會長、金澤青年團後援會役員、金澤陸軍々犬訓練副長として日夜奔走盡瘁しつゝあり。之等各團體が常に好成績を擧げ、世上の好評噴々たる、氏等の犧身的努力に由るもの多しと稱せらる。

公共の念頗る厚くして、常に社會施設に多大の關心を有し昭和十四年十二月、金澤市社會事業費として、金一萬圓を寄附したる處に依り、其の功を錄せられ、同十五年六月十七日勅定の紺綬褒章を下賜せられ、家門の榮譽を輝かせり。其の他青年訓練所、青年團、國防婦人會、在鄉軍人分會等の事業を賛賞して、之に多大の力を致し、又此花小學校等に多額の金品を寄附し、其の額六千圓に及べり。

氏は居常國民思想の善導運動に多大の熱意を有し、一意其の運動の目的達成に邁進しつゝあり。當家の宗教は眞宗にして、家庭には慶父初三郎、母愛イス及び松枝夫人との間に一男三女あり。松枝夫人は石川縣人橋場五郎氏の次女にして溫良貞淑、克く家を治めて、內助の功診からず、賢夫人の聞え高く、清福洵に養むべき家庭たり。

も敢若たらしめるもまた當然と謂ふべきなり。

蚤し氏は幼少にして聊く決するところありし初志の貫徹に邁進、不屈不撓の精神を以て辛酸苦艱を克服し光輝ある獨立自營の日の來冷るを唯一の悅しみとなして精勵倦むところを知らず、誠實以て終始一貫主家に仕へたるものとして、獨立自營の日を迎ふること遠やかなりしは、斷じて偶然にあらざるなり。

大正七年岩淵電氣會社を辭したる氏は、直ちに市川鐵工所を創立、これを主宰して孜々營々、經驗の知識技術に加ふるに獨創的計畫を以てし、機續倉々良好を加へて業礎益々强固となるや、株式會社に組織を變更して、自ら取締役社長たり。今や戰時下にありて重要產業部門の擔當者として、所謂軍需工業公に至誠を披瀝し、その使命の達成に遺憾なからんことを期し、乘餘の實を示して業界の範たり。

昭和十四年六月故里月形小學校講堂建築資金として金貳萬圓寄附の擧に依り、同十五年九月十日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

元帥正四位、勲一等、功一級

故 侯爵 藤山雷吉氏

嘉永四年七月十八日生
北海道小樽市富岡町一ノ三二

略歴

○夙に北海道開拓に志め殖産興業に寄與せしところ尠からず、大正四年十一月十三日勅定の藍綬褒章を賜ひ、其の功勞を顯彰さる。

○大正九年九月恩賜財團濟生會へ金壹萬圓寄附せし廉に依り、同十年五月一日勅定の緑綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○大正十一年八月小樽市道路改修として土地二萬十五坪を寄附せし廉に依り、昭和二年五月二十日勅定の緑綬褒章飾版壹個を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○大正十二年九月關東大震災救濟費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、昭和四年一月二十六日勅定の緑綬褒章飾版壹個を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○昭和八年六月小樽市觀音崎設營として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同九年五月三十日勅定の緑綬褒章飾版壹個を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○昭和十二年三月小樽警察署へ金壹萬圓寄附せし廉に依り同十三年三月二十四日勅定の緑綬褒章飾版壹個を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○昭和十一年八月小樽市公會堂建設費として金壹萬六千圓を寄附せし廉に依り、同十二年十二月十一日勅定の緑綬褒章飾版壹個を賜ひ、其の善行を表彰さる。

故藤吉氏は秋田藩人古谷多兵衛氏の次男、十三歳にして渡道、松前にて商業を修行、のち小樽に移し綿糸問屋藤山雷藏氏の養嗣子となる。明治十一年妻父死後家督を相續し、海火災保險、銀行等を經營し、商業興隆に盡すところ多かりし偉勳の夙に著なり。明和十三年十月永眠、實弟杜良三氏たり。

氏もまた社會公共に率先する企厚く、昭和十一年八月納骨堂玉堤墓地設營として金七千圓を寄附せし廉に依り、同十五年五月二十九日勅定の褒狀を賜ひ、其の善行を表彰さる。

元株式會社大同洋紙店專務

緑綬褒章受賞者

故 乾 茂氏

明治二年五月十四日生
住所 京都市上京區小山堀池町二十六番地

略歴

紙の需要の多寡は、一國の文野を計るバロメーターと稱せられ、製紙事業の發達は、歐米先進國の歷史に徵するも瞭らかなるが如く、實に文化の發遲と相伴ふものにして、特に紙類殊に洋紙類が、吾人の日常生活に不可缺の品として、財界の景氣に左右せらるゝこと尠く、其の價格に著しき高低を見

元株式會社大阪洋紙店專務

紺綬褒章受賞者

故 乾 茂氏

明治二年五月十四日生

住所 京都市上京區小山堀池町二十六番地

略歷

紙の重要の多寡は、一國の文野を計るバロメーターと稱せられ、製紙事業の發達は、歐米先進國の歷史に徵するも瞭らかなるが如く、實に文化の發達と相伴ふものにして、特に紙類殊に洋紙類が、吾人の日常生活に不可缺の品として、財界の景氣に左右せらるゝこと尠く、其の價格に著しき高低を見ず、而も文化の發達に伴ふて、一定率の增加を示す傾向に在るは、實に紙が人類と密切なる關係に在るを物語る一證左たり。玆に小傳を叙せんとする故乾茂氏は、多年關西洋紙界の重鎭中井洋紙店、大阪洋紙店等の要職に在りて、洋紙賣買の實務に當り、斯界の內外表裏に精通すると共に、其の激務の傍ら洋紙の研究に沒頭し、業界に多大の貢獻を捧げたる人材たり。

氏は大阪府北河內郡津田村字野、小原茂平氏の長男として明治二年五月十四日を以て呱々の聲を揚げ、後乾家の養子となり、其家を嗣ぐ。養性溫厚篤實にして、頗る商才に富み、長ずるに及んで東都に遊學し、業成るや、關西第一流の洋紙商として斯界に君臨しつゝありし中井洋紙店に入り、刻苦精勵店務に執掌し、洋紙界の情勢に通ずると共に、之が研究に渾身の精力を傾け、其の研究より來る氏の洋紙に關する卓見は頗る傾聽に値するものあり、後株式會社大阪洋紙店の專務として經營の手腕を揮ひ、斯界の一權威として重きを爲しつつありしが、昭和十年十二月十八日、病を以て遽爾として長逝せり。

氏は生前淨土宗に歸依し、篤志として寄書、骨董を愛し、頗る高雅なる生活を送りつゝありしが、一面社會公共の念に厚く、昭和五年六月、大阪府北河內郡津田小學校移轉に際し數地買收費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、其の功を錄せられ、昭和九年十一月七日、勅定の紺綬褒章を下賜せらるゝの光榮に浴せり。又日本赤十字社京都支部、恩賜財團濟生會、淨土宗大本山黑谷光明寺經營の學校等の事業に巨資して、之に寄附を投じ、其の他各種の公共事業に盡したること、擧げて數ふべからず。

○昭和十一年八月小樽市公會堂建設費として金貳萬六千圓を寄附せし廉に依り、同十二年十二月十一日勅定の紺綬褒章飾版書簡を賜ひ、其の書行を褒彰さる。

故寧吉氏は秩田鯛人古谷多兵衞氏の次男、十二歳にして渡道、橫濱にて商業を修得、のち小樽に轉じ福島岡藩山貴藏氏の養嗣子となる。明治十一年家父病後家督を相續し、商業を營み大に發展、農業、地所、牧畜、採鑛、倉庫、鐵工、海運、銀行等を經營し、道內屈指の資產家として多かりし開拓功勞者なり。昭和十三年十月永眠、喪主は良三氏たり。

氏もまた社會公共に擧ずる念厚く、昭和十一年八月納骨堂玉垣建設費として金七千圓を寄附せし廉に依り、同十五年五月二十九日勅定の褒狀を賜ひ、其の書行を褒彰さる。

時計、ラジオ、蓄音器、電球、電池商

緒綬褒章受賞者

和泉眞氏

明治十六年十二月八日生

北海道留萌郡留萌町南山手通六一

略歴

氏は北海道後志國忍路郡塩谷村に生る。明治二十六年一家挙げて天塩國留萌郡留萌町に移住す。氏十一歳の時なり。

父君は主として時計を商ひ居たるが、氏も亦幼にして機械類を好み、科學に關係ある文獻を渉獵するを好めり。しかりと雖も、當時わが國に於ける科學は概ね幼稚なるものにして、時計の如きも其の需要極めて稀れにして、珍奇のものに屬するの程度なりき。

氏留萌町に移住して同町小學校に轉學するや、一段勉學に勵み新學友をして感若たらしむるの好成績を擧げ、優秀の成績をもつて小學校を卒業するや道立五稜商業學校に學ぶ。善し全道なる時代の逸運に御膺して、智德を養ひ以て堂々たる商人たることを期したるなり。

商業學校に學ぶや、專門の商業諸學を修得して宜りなく、傍ら小學校時代よりの偉習として科學書物の讀破を唯一の樂しみとなせり。爲に氏の科學的知識は日に月に進み、學友を刺戟啓發して全校に科學愛好熱を鼓吹するの狀態となれり。

抜群の成績を以て同校を卒業するや、明治三十八年十二月旭川第七師團へ一年志願兵として入營。軍隊生活に依りて一段心身の鍛錬を加ふ。

退營後家業を繼ぎしが、恰も日露の役の後を受けて國威大いに揚り、海外との交易頻みに加はり、北邊の地天塩留萌の町にも、新進文化の風潮急速度を以て浸潤し、電燈、電話の文明利器の恩寵に浴すること相つぎ、また蓄音器類の鉄鋼器の輸入夥入さるゝあり、電燈の普及化は遂に蓄電池の需要累増となり、一時計商たりし和泉商店も、これら文明文化の利器たる電球、電池、蓄音器類を取扱ふに至り、氏が幼よりして好んで獨學せし科學的知識の效用大いに效果を收め、爾來日に增し繁大し、業績また大いに良好を加ふるに至れり。特にラヂオの普及につれこれが需要增大し、和泉家の業績は急激躍進なき磐石の大を成すを得たり。

大正十三年九月留萌中學校設立資金として金壹萬五千參百圓を寄附せし廉に依り、同十三年勅定の緒綬褒章を贈ふの光榮に浴す。

緒綬褒章受賞者

従七位勲六等

岩崎豊治氏

明治十五年一月四日生

住所　大阪府泉北郡濱寺町字下八〇三ノ三

營業所　大阪市南區北綿谷町二一

略歴

父祖の志を承けて醫業に與はり、該博なる知識と巧妙なる技術を以て、患家より多大なる信賴を受け、今や華城杏林の第一流として推さるゝもの、之を岩崎豊治氏其の人と爲す。

抑々醫家は、侯爵太秀郷の遺裔、大職冠藤原鎌足公より出

藍綬褒章受賞者

從七位勲六等　岩崎豊治氏

明治十五年一月四日生

住所　大阪府泉北郡濱寺町字下八〇三ノ三

營業所　大阪市南區北綿谷町二一

略歴

父祖の志を承けて醫業に興はり、該博なる知識と醫妙なる技術を以て、患家より多大なる信頼を受け、今や華城杏林の第一流として推さるゝもの、之を岩崎豊治氏其の人と爲す。

抑々當家は、後奈良帝に至り城州岩崎に居を移せり。故を以て、其の父秀遠乾今井備中守と稱せしを、其の孫俊忠より岩崎を以て姓とす。爾來二十三代を數へて岩崎勘治氏に至る。是豊治氏の嚴父にして、曾て私立大阪慈惠病院醫學校長として令名高き士なりき。氏は其の長男として明治十五年一月四日を以て生る。幼にして天稟の英才を備へ、少年の頃大阪市裏區育英小學校に學び、傍かに高等科三年の課程を終りたるのみにて、父の傍に在り、獨學克く勉め、後慈惠病院醫學校に學ぶ。明治三十四年醫術開業試驗に合格し、同三十七年六月十日陸軍に醫見習官を拜命、同年十月七日繪軍軍醫となり、同十一月正八位に叙せらる。偶々日露戰役に會し幾多の功績あり、明治三十九年四月一日勲六等に叙し、單光旭日章を授けられ、金二百五十圓を下賜せらる。同四十年三月陸軍二等軍醫に進み、同五月從七位に叙せらる。後民間に下り、明治四十四年七月大阪市西區本田町通二丁目に性病科專門病院を開き、昭和十年三月現在の地に移轉し、爾來門前常に市を成すの盛況を續け、以て今日に至る。氏は其の多忙なる業務の傍ら、大阪府並に大阪市醫師會代議員、醫師會講話委員、防疫委員、救護委員等に推され、貢獻する所頗る大なり。又昭和七年天成會を創立して、自ら會長として、皇道及び皇敎を宣布すると共に、雜誌眞光を發刊し、大いに宣傳に努めつゝあり。

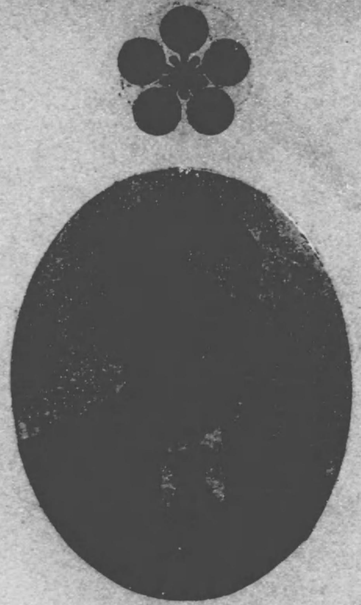
公共の念に厚く、昭和十五年二月、日本赤十字社大阪支部事業費として、金一萬圓を寄附したる廉により、同年六月一日勅定の藍綬褒章下賜の光榮を擔へり。

號を桃花と稱し、哲學の研究に於ては優に專門家の域に達するものあり。又漢元に趣味を有す。家庭には雫子夫人との間に、日大醫科出身、軍醫中尉として出征中の長男將伸氏の外、羽衣高女出身の汀、阿功、小學校在學中の岡子嬢あり。

清廉潔白に終ひべきものありと言ふべし。

いに揚り、海外との交易頻みに加はり、北邊の地天塩留萌の町にも、新進文化の風潮念遠度を以て浸潤し、電燈、電話の文明利器の恩惠に浴すること相つぎ、また蓄音器類の娯樂器の輸入移入さるゝあり、電燈の普及化は途に蓄電池の需要巢增となり、一時計畫たりし和泉商店も、これら文明文化の利器たる電球、電池、蓄音器類を取扱ふに至り、氏が幼よりして好んで獨學せし科學的知識の效用大いに效果を收め、業容日に增し擴大し、業績また大いに良好を加ふるに至れり。特にラヂオの普及につれこれが需要增大し、和泉家の業績は愈〻揚ぎなき磐石の大を成すを得たり。

大正十三年九月留萌中學校設立資金として金壹萬五千參百圓を寄附せし廉に依り、同十三年勅定の藍綬褒章を賜ふの光榮に浴す。



元大蔵省八幡出々張、阿東都府方面、仁和事
區學務委員

褒賞授與者

故 生嶋繁三郎氏

昭治十五年四月十五日生
京都市上京區一條通御前西入三丁目

略歴

多年父祖相繼いで京洛の地に定住せる由緒深き商家に生を享け、其の血液の裡に試々として湧る鄉土愛を傾注して、京都市の爲に盡瘁し、社會教育の方面に多大の功績を貽して、其の光輝ある一生を終りたる生嶋繁三郎氏は、京都の生みたる眞色ある人材として、故に大いに傳へざるべからざる一人

滿洲角丸證券株式會社々長、角丸商會專務取
締役、共同證券株式會社取締役

褒賞授與者

今井又治郎氏

明治六年八月五日生
東京市麹町區二番町二二ノ一

略歴

氏は千葉縣人今井新右衛門氏次男、千葉縣東金町に生る。

今井家は東金町に於ける屈指の舊家にして、代々近隣より徳望の名門として景仰されしが、新右衛門氏夫妻早世し、又治郎氏は幼にして孤兒の悲運に遭ふ。名門の子弟たる氏も縁邊の手によりて育成さるゝのやむなきに至れり。

しかれども幼時に於ける氏の悲境は、氏を厳錬するに最も適したる環境となり、不屈不撓の精神と獨立自尊の信念は、早くも當時に於て無意識裡に涵養されたるものにして、氏が今日證券業界に雄飛するの素地は、蓋く父母を喪ひたる時に築かれたりと謂ふも過言にあらざるべし。

氏稍々長ずるに及んで、最く近親の許にありて徒食するを潔しとせず、自活の途を拓かんことを志し、東京に出でて東京株式取引所仲買人岡本商店に入る。

蓋し雄心勃々たりし氏は、最も刺戟的なる株式市場を興畫となす意を遂んで、男性的なる飛躍を試みんと期したるなるべし。この意圖また氏の幼時に於ける環境の影響するところ多し。

幼にして父母を喪ひたる者多くは委縮して、其の天性を伸べ發きを例となすも、氏は名門の子弟として生れ、父祖の血を享けて常に勃然たる氣宇を失はず。明朗恬淡人に接して圓轉滑脱、自らを持するに謹慮なりしかば、株式仲買業の店員たるには最も適當し、主家の信望忽ちにして加はりしが、岡本商店に在ること數年にして、更に同業藤田商店に入り、奔放自在の商才を發揮し、其の活躍は業界注目の的となるに至れり。

獨立の機漸く熟するや、氏は角丸商會を設立して專務取締たり。また共同證券株式會社の組織に參與して取締役たり。證券業界に堂々の進歩を築くや、日滿支經濟一體化の將來性に鑑み、滿洲國進出を企て遂に滿洲角丸證券株式會社を創設して自ら社長の重職に就き、經濟界に於ける證券業の持つ重大使命の遂成に邁進しつゝあり。

昭和十一年五月、千葉縣東金小學校へ金百圓を寄附せし廉に依り、同十一年九月八日、勅定の紳綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

元大將軍八神社々掌、同京都府方面、仁和學區學區各委員

紺綬褒章受賞者

故 生嶋繁三郎氏

明治十五年四月十五日生
京都市上京區一條通御前通西入三丁目

略歷

多年父祖相續いで京洛の地に定住せる由緒深き舊家に生を享け、其の血液の裏に誠々として漲る鄉土愛を傾注して、京都市の爲に盡瘁し、社會敎育の方面に多大の功績を貽して、其の光輝ある一生を終りたる生嶋繁三郎氏は、京都の生みたる異色ある人材として、益に大いに傳へざるべからざる一人なりとす。

抑々生嶋家は、遠祖以來連綿として子々孫々相承け、當代にて第二十八代を算する舊家たり。繁三郎氏は、京都府士族生嶋眞樹氏の二男として、明治十五年四月十五日、祖生の地に生る。幼にして聰敏强悟、夙に郷校に學び、長じて職を京都市に奉じ、精勵恪勤にして怠ること無く、爲に其の誠實爲す有るを認められて、早くも同市上京區々役所稅務課長に進み、更に庶務課長に轉じ、大いに其の將來を囑望せられしも素と刀筆の吏は氏の志に非ざりしを以て、其の職を擲ち、市井の間に隱れて、靜に世態人情を觀察し、京都市の將來は社會敎育施設を最も急務とするものあるを痛感し、將に大いに爲す所あらむとす。偶々有名なる大將軍八神社の社掌に推され、益に奉職すること年あり。氏資性厚篤にして、顧る長者の風格を備へ、社會公共の志に富み、敬神崇祖の念に厚く、大正十四年二月、京都市の道路敷地として、土地一反三畝二十一步餘を寄附したる廉により、其の功を錄せられ、同十五年十月十八日勅定の紺綬褒章を下賜せらるゝの光榮に浴し、更に大正十五年九月京都市內圓道敷地として、土地一反二十一步餘を寄附し、昭和五年一月二十八日同飾版を賜ふ。其の間神社の奉仕と社會敎育の方面に一生を捧げ、京都少年保護事業に與はり、或は京都府方面委員として社會事業に盡瘁せる外、仁和學區委員として學事に對して寄與する所頗る大なりき。而も之等の事業は、更に大いに氏の努力に待つ所頗る多かりしに、天年を藥さず、昭和五年七月八日、機に四十九歲を一期として、溘焉として逝く。寔に惜むべく、赤悼むべきなり。

當家の紋所は揚羽の蝶にして、家庭にはまつ未亡人と、みさを嬢あり、昭和十五年京都府立第一高女出身の才媛として聞ゆ。

を傾けて常に驚然たる氣宇を失はず、明朗恬淡人に接して圓轉滑脫、自らを持するに謙虛なりしかば、株式仲買業の店員たるには最も適當し、主家の信望忽ちにして加はりしが、岡本商店に在ること數年にして、更に同業藤田商店に入り、奔放自在の商才を發揮し、其の基礎は業界注目の的となるに至れり。

獨立の機漸く熟するや、氏は角丸商會を設立して專務取締たり。また共同證券株式會社の創機に參與して取締役たり。證券業界に堂々の地步を築くや、日滿支經濟一體化の將來性に鑑み、滿洲國進出を企て遂に滿洲角丸證券株式會社を創設して自ら社長の要職に就き、經濟界に於ける證券業の持つ重大使命の達成に邁進しつゝあり。

昭和十一年五月、千葉縣東金小學校へ金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十一年九月八日、勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

元北海道會議員、厚岸漁組株式會社、同組合
組株式會社取締役社長、海産物商

紺綬褒章受賞者

上田勘兵衛氏

嘉永元年六月二十七日生
北海道厚岸郡厚岸町若竹町五五

略歴

氏は京都府の人上田勘七氏の五男、京都市下京區中堂寺南町に生る。夙に志を立て明治十五年七月東京を經て北海道に渡る。同年九月函館より厚岸港に移り、倉前某方に勤務し獨立自營の機を待つこと二年、同十七年五月厚岸町若竹町に一戸を構へて先づ木炭商を創業す。同十九年九月實物商に轉業し、漸次業容を擴大して味噌、醤油、酒類をも取扱ひ、同二十五年に至りて海産物を加へ、業務愈々繁劇となるや、至二十六年より餌場見創漁業を營み、二十九年三月京都市に支店を開設、長男泉次郎氏をして主管せしめ、海産物の賣買に異數の發展を畧ぐ。

明治三十八年神木わが領有となるや、同島に進業地を開拓し、出漁三ヶ年にして中止するのやむなきに至りしも、この間厚岸に於て網納漁業の改良に苦心し、私財を投じてこれを完成し、漁業の發展繁榮に資したるところ尠からざりき。同年十一月厚岸町に未曾有の大火あり、氏も亦罹災に襲はれ家屋資財を烏有に期せしも、聊かも屈するところなく、直ちに再起現所に堂々たる店舗を再建して擔土重來の意氣を以て家業に精勵、遂に今日の大を成せり。

氏は家業に精勵怠りなき傍ら、厚岸町會議員、同漁業組合副取、同水産組合議員、同組合理事、同組長、北海道會議員、厚岸灣漁業組合監事、同組合理事、同組長、北海道會議員、厚岸灣漁業會副會長、釧路税關參事官内國產委員を歴任し、水産業界ならびに自治産業に貢獻せしところ尠からざりしのみならず、常に社會公共に率先するの念厚く、明治四十四年九月恩賜財團濟生會へ金五百圓、大正八年厚岸町實業學校新築費として金壹千圓を寄附せしほか、大正四年九月以降同七年十一月に至る間明治神宮へ朱御堂百本、山櫻參百參拾本、木眞柏壹本を獻木、同五年五月厚岸侍單勝神社の他へ山櫻參百本、青木眞百本を寄附、大正七年十月官幣大社札幌神社へ朱櫻五拾本、山櫻百本を獻納、同八年五月編山神社へ櫻樹四百本、厚岸小學校へ眞柏外八種七拾參本を寄附するなど善行多し。大正十三年二月十一日、勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

紺綬褒章受賞者

故 上杉順治氏

文久三年一月一日生
大阪市東淀川區中津本通二丁目

略歴

○昭和七年二月日本赤十字社事業資金として金壹萬圓寄附の廉に依り、同年六月二十二日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○昭和七年四月陸軍學藝技術奬勵基金として金參萬圓寄附の廉に依り、同九年八月六日勅定の紺綬褒章飾版一面を

故上杉順治氏

大阪市東成區中津本通一丁目

玄久三年一月一日生

略歴

○昭和七年二月日本赤十字社事業資金として金壹萬圓寄附の廉に依り、同年六月二十二日勅定の緋綬賞章を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○昭和七年四月陸軍學藝拔術奬勵基金として金參萬圓寄附の廉に依り、同九年八月六日勅定の緋綬賞章飾版一箇を賜ひ、其の善行を表彰さる。

氏の祖先は清和源氏の後裔にして、累代大和十津川の鄕士たり。上杉明保氏の四男に生る。奈良縣吉野郡十津川の地は古來勤王志士に由緣多く、今なほ全村の氣風質實剛健にして氣慨に富む　氏幼にして篤學、十津川文武館に學びて英才の譽高し、稍々長ずるに及んで醫學を志し大阪に出でて斯學を專修の後、更に東京に上りて其の蘊奥を究む。學成りて歸阪分家して一家を立て醫を開業す。氏の穀々たる氣骨は、平凡凡庸の町醫者たるに甘んぜしめず、開業の傍ら京都帝大、大阪醫大に研鑽を重ね、更に明治年代に於ける漢法醫の大家松本顯先生に師事して、漢法醫學を學ぶ。典型的古武士の風格を具へたる氏は、病犬漢法醫學に傾注し、遂に氏をして純然たる漢法醫たらしめ、名聲東西に揚るに至り、氏に治療を乞ふ者ひとり大阪にとどまらず、往診の足跡全國に及ぶ。

醫は仁術の古諺あれど、これを實踐するもの多しとせず。氏の如きは五十年に亙んとする醫師生活を、終始一貫古諺の實踐に勉め、名聲嘖々として揚るに至りても、身を持するに謙虛　患家の貧富を選ばず、遠近を問はず、醫は天命なりとの信念を加實に新用して使命を完遂せしは恪めて稀なり。然も名利に走らず、一切の公職を斥け、醫師會にすら干與することを避けて、只管斯學の研究と施療に沒頭したる氏の醫師生活は、崇高にして犯すべからざる威嚴をさへ備へたり。

晩年育英事業を唯一の悅樂とし、私財を投じて多數の俊英を育英し、氏の仁愛によつて世に名を成したる者尠からず。

昭和十一年九月歿す。享年七十四。氏の遺業ともいふべき藥草栽培事業は、生前十四萬圓を投じて、大阪近郊に用地買收を完了してあり、之留未亡人、亡夫の遺志を繼ぎ、國家的事業として完成したき意氣を示しをれば、結實の日も亦近かるべし。

緋綬賞章受賞者

職取、岡水產組合議員、鐵路局管內稅關々會議員、厚岸漁業組合監事、同組合理事、同組長、北海道會議員、鐵路局水產會副會長、鐵路稅關署管內調查委員を歷任し、水產業界ならびに自治產業に寄與せしところ尠からざりしのみならず、常に社會公共に率先するの念厚く、明治四十四年九月恩賜財團濟生會へ金五百圓、大正八年厚岸町眞龍尋常小學校新築費として金壹千圓を寄附せしほか、大正四年九月以降同七年十一月に至る間明治神宮へ朱樹壹百本、山櫻參百參拾本、木眞柏壹本を獻木、同五年卒五月厚岸停車場構內其の他へ山櫻參百本、青木貳百本を寄附、大正七年十月官幣大社札幌神社へ朱樹五拾本、山櫻百本を獻納、同八年五月鞠山神社へ櫻樹四百本、厚岸小學校へ眞柏外八種七拾參本を寄附するなど善行多し。大正十三年二月十一日、勅定の緋綬賞章を賜ふの光榮に浴す。